

も出奔失踪して更に音信を通ぜざりし不孝の我に、死後の存亡興廢をあけて一任せられし父が慈愛の深きを思へば、我そもく何を以て其墓前に報すべきぞ、また我の驚いて病院に馳せし時は、何ぞ圖らむ、父は長兄をして東屋に我を迎へしめし時なりとぞ、あ、我は由來こゝに一年半さらに一片の音信も通ぜざりしが、父は出奔の當時に送れる我郵書の消印に依つて此大阪にあるを知り、しかも竊に財を散じ人を煩はして早く既に我所在を探知せしのみか、別に用意の深遠なる、その死に迫るまで母にも兄にも曾て告げざりしといふ、また以て父の我に對せしは所謂親として子を思ふの外に何等かの見るところありしなるべし、

其十四 父が死後に於ける兄弟三人

十萬の財産を遺すものと、百萬の負債を遺すものと、いづれの親を取る乎とは曾て父の我に問ひしところなり、

十萬の遺産を固く守るものと、百萬の負債を生涯必死の力に半減するものと、さらに百萬の負債を數倍にして悠然たるものと、いづれの子を愛すべき乎とは曾て我の父に反問せしところなり、

今や我父は十萬の遺産に適すべき家兄二人のためにせずして數百萬の負債に適すべき我ために一家存亡の機をあけて最後の責任を賜へり、

事に輕重大小の別あり時に利害難易の差ありと雖も、殆ど當時の我に取つて友を得たるが如く、また權謀の術數を勸むるに等しき一篇の小説あり、たま／＼讀んで深く心に記す、

むかし正徳年間の江戸本町に絲屋總左衛門とて、其ころの見積相場三十萬兩に數へられし

大身代ながら、主人の將に死せむとする時、三人の子を枕頭に呼び寄せて一室の四方を閉て切りつ、この絲屋が世間より羨まる、三十萬兩は今日まで渡世の品玉みせぬ我智慧の種、全くは差引勘定の金銀取集めて三貫目ありやなしの内證、このま、我こ、に果てなば忽ち闇路の汝等三人いかに思ふぞ、矢の催促に逢はぬうち家財一切ひつくるめて三割とし、兄弟三人おのゝ人しれぬ京大阪で旗を翻すか、但しは談合の智慧袋を絞って親の跡を張ぬいて見るか、いづれとも勝手次第にせよ、何事も知らぬが佛の浮世を去って我は極樂の東門より見物すべしといひしかば、三人の兄弟おもはず顔を見合せて驚きしが、さて仇敵に残さる、借金金の淵にもあらねば、うらみを並べて訴ふべき道もなく、こゝに一計を案じ出して父に向ひつ、さらば最後の御一筆を賜はるべし、これは固より無い金ながら、世間體の鑑定違ひを僥倖、たしかに有るものとして三十萬兩のうち、二十萬兩に家財を添

へて長兄の分、残る十萬兩を五萬兩づ、二人の弟が分、但し二人の弟が三十になるまで一切長兄が預かり置いて喧嘩口論すべからずとの御遺言状さへあれば、我々三人みごとに御跡を張り切つて見むとぞいふ、父は思はず笑を含んで、天晴れ宜い子どもを持つたりけりと其ま、往生を遂げしが、固より互に牒し合せし覺悟の計略、葬式の濟むや否、二人の弟が兄に向うて分配の喧嘩を吹掛け、果は白刃三昧にも及ばんほどの勢ひ、長男は驚いて町内の名主を始め五人組の許に駆け込みつ、例の遺言状を示して涙を含みながら、かく書置いて相果候ところ二男三男の弟ともが申合して、亂暴狼藉、譲りの五萬兩づ、只今受取らむとて親代りの私へ難題の始末いかにも無念に存じ候間、憚りながら二人の弟ともが合點いたすやう御役柄を以て御諫言たのみ入る、勿論彼等三十になれば、遺言通り相違なく渡す筈の金子なりといひしかば、名主五人組いづれも驚いて二人の弟を呼び寄せつ、

さまぐくに説き諭して後、三十の曉は我等證人となつて兄が手より正に五萬兩づ、渡すべき間、それまで萬事を慎しめとて事なく済みしが、この沙汰いつしか世間へ傳はりて、絲屋の身代いよく、磐石の噂となりしを二人の弟その機を外さず家を飛び出して色町へ流れ込み、日夜の遊興に狂ひまはる體を長男また泣顔して近處の人々に頼みつゝ、諫言すればするほど血氣に任しての傍若無人、なるほど子を見ること親に如かずの本文あの二人の放蕩を見抜いたればこそ三十の曉まで長男に預けられし先代の目鏡ぞと、しきりに感心の物蔭より二人の弟ども、手を代へ品を變へて金銀を借り廻れば、悪所金ぞと利分の高きに目の眩む人情、まして三十の曉には五萬兩づ、慥かに取るべき男、加之も町内の名主五人組が立合の印形あるも同然とて、竊に争うて貸與へしかば、二人の弟こゝを得たりと借込んでは人しれず長男の手許へ差廻して内證を捻ぢ直させ、おのれ一兩の散財を五十兩に觸れ

歩いて取込み引込みし金子およそ二萬八千兩、其うち全く三千兩ばかりを吉原に音高く抛け込んで残る二萬五千兩は、悉く兄が商賣の品玉となりしかば、いつしか名ばかりの絲屋も身代おのづから立直りて、この分ならば最早破綻あるまじと思ふ坪を覗ひし二人の弟ども、さつと江戸を出奔して影を隠すや否、長男さらに驚いたる體にて又もや名主五人組へ騙込みつゝ、いつの間やら二人の弟どもが言ひ合せて二萬兩づ、盗み出し、残らず傾城狂ひに費ひ果せし上、承れば外にも借財のある由、何とも以て私の手に合ひ難く持餘し候へば、勘當の御帳面につけ下さるべしと届け出でし風聞に、金貸したる者ども青くなつて立騒ぎしかど、固より内分の高利にて請判もなく、加之も跡取の長男が許へは一言の挨拶もせざりしかば、本人のない今更ら泣寝入の外なく、いづこへ取付く島もなき哀れさに引替へて、二人の弟は京と大阪で一活動せし後、また打連れて長崎へ下りつゝ、丸裸の膽魂

二個を押並べて絲類の相場に運を開き五年の間に四萬兩を擱んで再び江戸へ立歸りしかば、長男は今更に喜んで以前の貸手どもを呼び集めつゝ、利分は固より一切取消、死んだものが生返つたといふ口上で元金のみを恩に著せて残らず返し、兄弟三人また睦じく世に唄はれて親の身代そのまゝ、竟に内證の尾も見せず。天晴れ化け濟して糸屋七代まで目出たく繁昌せしといふ。

固より二百餘年の昔物語、取るに足らざれども、策を以て成れる一家の秘密を嗣いで三人の兄弟また父の術數に劣らざるところ、讀んで一快事を覺ゆるのみか、當時の我をして更に奮闘一番の勇を起さしめたり、

近くは横濱の山城屋なるもの、三百萬の負債に沈思黙考せし時、たま〜大阪の一友また四十萬の債を負うて來り投するや、忽ち一諾の下に軽く首肯す、傍にありし妻女おどろいて其袖を曳けば、山城屋さらに笑うていふ、大は小を兼ねるの諺あり彼我を合して三百四十萬のみ、その工夫は人力の我に於てし其成否は運命の神に於てすと、惜いかな馬前ますして竟に斃れしが、俠骨稜々、意氣軒昂、譬ひ鐵火を喰ふも猶かつ色を變ぜざるの態度は、また以て當時の我に一片の消息を通ぜしむ。

其十五 秘密の鍵

最後の父が手より我に賜ひし一枚の絶筆、いはゆる鬼神なほ窺ひ知る事を得ざりし秘密の金庫を開けば、負債目録と題して總計四百二十七萬圓の數字あり、

實に當時の澤田家は四百二十七萬圓の債を負へり、されど専有の五會社を二百萬圓内外とし、邸宅より調度一切をあけて三十萬圓前後とすれば、一家こゝに赤裸々となるも猶かつ餘すと

ころの負債は一百九十七萬圓、これを十三件の債主に平均して各十五萬圓餘、これを我々兄弟三人に分擔すれば各六十五萬圓、合して二百萬の責任は正に父より譲られたる我手腕の占領地たり、

當時いまだ二十二歳の我を以て俄に二百萬の債を荷ふ、殆ど望羊の歎あれども、飛耳長目の當世に立ちて門内一步の疑を容れしめず、また猜忌嫉妬の人情に接して舉動一片の敵を生ぜしめず、多年こゝに悠々として四百萬の債を軽く塵の如くに負ひ來りしのみか、死後の餘威なほ債鬼を壓して喧騒せしめざる父が巧妙を思へば、其子として生れ其器として任ぜられたる我は寧ろ得易からざる神龍領下の珠玉を覘うて取るの壯快あり、
しかも父が生前、その用意の周到にして奇警なる、その態度の大膽にして縦横なる、一朝もし鋒を聯ねて襲ひ來らば忽ち我根柢を覆さるべき十三人の債主なるものを見れば、いづれも

當世に實より名の過ぎたる大會社の社長、もしくは大銀行の頭取取締役の類にして、しかも彼等個人の私産を用ひし事なく、その資格と地位を巧みに利用して殆ど五分の一の利を喰はせしが如き、いはゆる敵の白刃を以て敵を防ぐの神算鬼謀あり、また合名合資株式の便方を取らずして殊更に獨力獨行の五會社を専有せしもの、その一は以て世人の信任を博し、その二は以て帷幄の有無を通じ、その三は不意の包圍攻撃に遭ふも八門遁甲の理に等しき敵をして我中堅を衝かざらしめむがため、その四は所謂る金庫の鍵は他に託するも秘密の鍵は他に渡さざる本領のあるところ、その五に至つては實に死後の一計ともいふべく、澤田雄藏こゝに屍となるも専有の五會社なほ巍然として煙筒の煤煙を吐き器械の廻轉を絶たざる間は債鬼おのづから心を安んじて俄に來り迫らざるの餘地を存し、しかも十三人の債主をして互に相關知せしめざりしが如き、殆ど當世を翻弄して掌上の豆を數ふるに等しき狀あり、

されど門外一步の世人が多年こゝに父の祕密を窺ひ知らざりしは宜なる哉、その子に生れ身みづから其事に與りし二人の家兄と雖も、いまだ曾て此間に於ける真相を看取し得ざりしのみか、父の死後なほ釜中に游泳して寧ろ餘ある財産の處置に苦むが如く、かの五會社に勤續せる重役の輩に至つては單に數の答案を簿記帳に現はして得々たるもの、その實は噴火山上に睡るが如し、

そもく當時の我に於ける第一の苦心慘愴は、二百萬の債を荷うて巧みに難關を越ゆるの策にあらず、十三人の敵を操つて徐ろに一家を保つ術にあらず、また忽ち一朝の灰となるべき噴火山上に睡れる可憐の社員を救ふの難きにあらず、只その脚下に火あるを知らずして釜中に游泳せる家兄二人を説くの難きにあり、むしろ父より我に賜はりし負債目録を示すべき時機の奈何にあり、さらに二人の家兄をして惘然たらしめず愕然たらしめずして靜に能く我

説を容れしむるの難きにあり、さらに一致協力して我は張良と韓信を兼ね二人の家兄に蕭何の任を盡さしめむとするの難きにあり、

生前に於て二人の家兄を事に當らしめ、死後に於て末子の我を事に當らしめむとする父が深意を思へば、長兄と次兄は正に父の生前に適せる子といふべく、我は正に父の死後に適せる子といふべし、されど偏に恐る、家兄この意を解せずして我を怨むに順を破り功を貪るものとし、ために一致協力を缺いて敵に乗せらるゝの悔あらむかと、

規則に依つて行ふべき事と勤勉に依つて成功すべき業とは、長兄の尤も得たるるところにして殆ど間然すべき點なく、文字に依つて知るべき事と指揮に依つて確守すべき業とは、次兄の尤も得たるるところにして殆ど間然すべき點なし、されど不幸にして今や猛火を包める如き我一家の難關には、この二兄を煩すべき要なくして只こゝに我あるのみ、敢て我は二人の家兄

に勝れりとするにあらす、奈何せむ當時の勢ひ我は正しく其適任なりしのみ、もし二人の家兄にして我説を容れずんば、涙を吞んで外その敵に當るの前まづ内に戦はざるべからず、あ、我は父の子として父に負かされど、竟に不悌の弟として兄に反くべきか、勢ひ止むなくんば兄弟牆に闘ぐとも外その侮を禦いで、將に倒れむとする我一家の更に隆盛ならむ事を祈るのみ、

其十六 二人の家兄を擁せし我

多年こゝに神扉として深く閉せし一家の秘密を開き、父が最後の手より我に賜ひし負債目録を示して、二人の家兄に善後策を説きし時は、たゞ愕然たる狼狽と惘然たる恐怖と茫然たる自失の色ありしのみ、

しかも果して我説を一片の書生論とし、到底爲すべからざるの大言壯語とし、事實行ふべからざるの虚勢空喝とし、竟に痴人の夢とし一場の滑稽として排斥せられしのみか、殆ど平地に波瀾を起して何等かの爲にするものと疑はれ、甚しきは我影に覆面の人あつて野心の指頭に動くかと怪まるゝに至れり、我この時の家兄に向うて發せし言語は、今日の澤田家を成せし進軍の喇叭に等しく、殆ど危激に涉りて長上に對する禮を失せしが如きも、實に當時の我肺肝より涙と共に迸りて出でしものなり。

世には五萬十萬の端た金を、あかの他人にでも遺ることか、現在おのれが生んだ子孫に譲るさへ、いや親類會議だとか、平生懇意な手堅い人間を選んで立會證人にするの、いや家憲だの遺産分配書だのと、しきりに立騒いで河童の尻にも如かざる印形べたく、捺し竝べる奴の多い中に、勿體ない、子を思ふ親心の慈悲で、そもく二百萬圓といふ借金を惜し

けもなく我々三人に賜はった御心中、どこに斯んな氣の利いた父がありますものか、決して疎略には思はれませぬ、眞實、子なればこそ親なればこそです、ところで百九十七萬圓これを三分して一人前の取高六十餘萬圓づつになります、只今の仰せに従ひますと、長男の乃公は自然の勢ひ父と同一の權利を以て内外一切を處理し、次男の雄次郎は萬事その相談役として、三男の汝は當分月々幾何かの小遣で無關係に遊んで居れと仰しやいましたから、實は聊か不平ですが、あらたに家長の御意、こゝに謹んで承はり、乃ち負債の全部百九十七萬圓の遺産を未練氣なしに悉く兩兄へ差上げます、しかし、また父が折角かうして三人に譲られた借金を二人で取込むのも濟まぬ理用だ、氣の毒だと思召すなら、どうか私にも其六十餘萬圓の分配を願ひたいもんです、否、さらに進んで忌憚なく露骨に申し上げれば、甚だ欲張過ぎた事ですが、全額百九十七萬圓を悉皆そのまゝ、此雄三郎に頂戴し

たいのです、しかし末弟不肖の汝に嫌だと仰しやれば儲それまで、致方も御坐いませぬが、その代り兩兄とも憚りながら澤田雄藏の子に生れたといふ事を、お忘れのないやうに祈ります、世間普通、いはゆる今日當世の平凡紳士なるものと違つて、父は確乎に萬人傑出の資格を備へて居ったのですが、憾むらくば天この人に年を惜んだがため、最後の成算なるに垂として逝かれたのです、あの通り日夜の繁忙さらに寸暇もなき身を以て突然、かの大阪へ行かれた心中には、よほどの大望があつたに相違ありません、もしこゝ三四年も生きて居られたなら、今日百九十七萬圓の負債は正に一轉數倍の財産となつて我々に譲られたかも知れませぬ、ところで苟くも其子に生れたるもの尋常一般の料簡では逆も無効です、しかしまた餘り騒ぎ過ぎて怪我の拍子に内輪から火の手をあけないやう、なるべく度胸を広く膽魂を太く方法を細密に油断なく蹉跌なく遺憾なく尤も男らしい立派な善後策を願ひ

ます、しかも躊躇は此際に於ける得策にあらず、願はくば疾風雷霆の勢で、いはゞ敵をして迅雷耳を掩ふに違あらざらしむるの勢で、その作戦計畫は先づ二日間、なれど萬々一その二日間に御工夫の出来ない曉は、この雄三郎、責任を以て確乎に引請けませう、もの、美事に全額二百萬の借金を脊負つて、十三人の債鬼を寧ろ倒さまに叩頭三拜せしめ、以て澤田雄藏の子たるに恥ぢざるだけの活動を御覽に入れませう、目的は手段を辯解すといはむよりは更に事實は事實を證明す、こゝに多言を要せず、もし二日の間に兩兄の策なくんば、三日目に此の雄三郎が、是非とも全額を譲り受けませう、

家兄の我を見ること、父が我を見たる十分の一にも及ばざれば、殊更に危激の言を放つて其

反動力を喚起し、ますく我に當らしめて以て一の難題を求めむとせり、しかも其難題の我心に任ずるよりも小にして且また易きを知れるものは、家兄の心中なほ未だ我を危み我を輕んじて、その成敗を一任するの雅量なければなり、殊更に一の難題を求めて自己の手腕を示すが如きは、固より長上に對する禮にあらずと雖も、奈何せむ當時の勢ひ、我まづ事實の問題を解決せし後にあらずんば、二人の家兄をして首肯せしむるの道なく、また父が最後に於ける委託を果すの途なし、

其十七 家兄の疑問に於ける我

専有の五會社さらに何の破綻なく、世間の信用いよく加はりて日夜の繁忙ますく榮え行くのみか、百九十七萬圓その債主十三件と稱すれど、父の死後いまだ曾て一人の迫り來るものなきは殆ど事實あるべからざるの理、まして我々二人を措いて多年不幸の末弟に此大事を

託すべきの理なしとは、當時の家兄が我に對する第一の疑なり、されど父が最後に遺せしといふ負債目録なるものを見れば、重患の墨色筆勢、おのづから平生に異なるところあれども、正に疑ふべからざるものあるのみか、十三件の債主おのづから其姓名に金額と年月と契約の利分とを明記して、これを運轉せし大略の費途まで明かに載せたる事實の證に接し、こゝに始めて愕然たると共にいよく此大事を放逸散漫の彼に委すべからず、ます／＼此難關を乳臭いまだ脱せざる彼に一任すべからずとは、當時の家兄が我に對せる第二の危懼なり、常は殆ど近づけざりし彼に此大事と此難關を任せし父が奇なるよりも、さらに奇中の奇なるは彼が此大事と此難關を笑うて殆ど意とせざるが如きであり、しかも父を以て自己が一人の父たりしが如くに誇り、こゝに兄を以て自己が兄とするに足らざるが如く嘲り、一氣呵成の

に二百萬の債を處理せむと叫ぶのみか、また手に唾して一轉さらに家運の隆盛を誓ふに至つては、正に是れ死せる父を楯として生ける兄に矢を放つもの、いたづらに其狂態を逞しうせしめむよりは、むしろ左右より彼を要して言行一致の實を迫るに如かずとは、當時の家兄が我に對せる憤懣の狀なり、第一の怪疑と第二の危懼と第三の憤懣とは、固より當時の家兄が當時の我に對すべき當然の理にして、我また期せしところなりしのみか、其實は却つて我これを激發せしもの、二日の後、果して一の難題は來れり、

例の善後策に就いて二晝夜の間、さしあたる萬事の用を抛つて殆ど沈思黙考、あらんかぎりの脳味噌を絞つて工夫を凝らして見たがね、奈何せん天生の痴鈍で、これといふ妙

案が浮ばない、ところで父が我々二人を差措いて末弟の汝、しかも出奔失踪して居った汝にばかり託されたのは、定めて其間に深い理由もあり、また汝も必ず歴々たる成算あつて引受けたに相違なからうから、こゝは一先づ我々二人が潔く手を引いて汝に委したい、つまり兄弟三人が倒しまに位置を轉じて汝を家長にするのだが、兎も角も父が遺した二百萬圓の負債を一氣呵成の下に處理する奇策名案を聞きたい、については子として父を疑ふ筈ではないが、聊か我々の腑に落ちないところがあるから、その二百萬の奇策名案に手を下すの前、まづ汝の小手調べとして、その十三件の債主のうち、重なる人より父が生前に差入れて置いた借金の證書を借りて来てくれないか、勿論、義務を果さないうちに渡す筈もあるまいから、その本人を引張つて来て其書類を一見すれば宜しい、但し其債主のために他の債権者が一時に騒いで火の手を擧げないやう、平穩に無事に祕密に、寧ろ味方となつて

くれるくらゐに敵を籠絡して生捕つて来て欲しい、

家兄が我を疑ひ我を危みて、その實を試みむとせし一の難題なるものは斯の如く、我覺悟よりも更に小にして軽く易き事は豫期せしかど、あまりに軽く小にして易かりしがため、我は殆ど失望せり、將來もし我を信じて我に任ずるところも亦かくの如く軽くして易く小なるかと、我は此時さらに一步を進めて我手腕を試みるに足るべき難題を求めたり、

兄弟三人が倒さまに位置を轉ずるの、いや我々二人を差措いて汝にばかり打明したから定て云々といふが如き、何だか其間の言葉が際立つて妙に聞えますが、元來これ一家骨肉の間柄、つまらない眼前の小事に彼はいふ場合では御坐いますまいから、暫く御免を蒙つて

長幼前後の別は儲置き、不肖ながら只今の御注文は一切この雄三郎が確乎に承知いたしました、しかし澤田家が興廢存亡、間一髪に迫つた今日こゝに二百萬といふ借金の善後策ですから、よほど慎重の態度を取つて、心を大きく持つて貰はないと困ります、馬鹿らしい兄の身分として弟の命に従ふなぞといふ吝な小さな狭い料簡では、よし私が先づ假に、どれほどの名案を呈しても無効です、味方の心が支離滅裂しては敵の重圍を破るの理由はありません、いはゆる兄弟牆に閱いで外その侮辱を防ぎ難しで、實は此事ばかりを心配して居ります、結局、今では二百萬の負債よりも失禮ながら寧ろ却つて貴兄方の意志が難關ですから、しかし、それには僥倖の御注文、父の遺命を疑ひ私の手腕を危んで居られる折柄、債主の一人を連れて来て證據書類を一覽させよとの御意、謹んで承知しました、また十三件のうちの最も手厳しい奴で加之も其奴がために他の債権者に何の影響も及ぼさず、平穩

無事に秘密を守らせるといふ一段たしかに承知いたしました、ところで、もし其の一段に就いて、成程と御得心の出來た以上、いよ／＼澤田家の興廢存亡をあげて一切この雄三郎に御委任して下さいますか、つまり長男の澤田雄太郎と次男の澤田雄次郎と二人が表面に立つて、その實、帷幄の參謀に三男の雄三郎が働くのです、たゞ願はくば飽くまで其參謀を信じて、大將みづから叨りに智慧を出さないやう、もし今その一例をあぐれば、私の手腕を試みむとするに債権者のうちの一人を連れて来て平穩無事に證據書類を見せよといふ、そんな生優しい單純な簡易な事では逆も無効です、もし私が貴兄なら大喝一聲おい雄三郎、貴様五尺の丸裸で苟くも二百萬を引受ける成算があるなら、債主のうちで最も金額の多い奴を説付けて、天晴れ倍數の金を借りて来いと、但し一箇月の間に十萬乃至十五萬の現金を他から工夫して、十三人中の一人に義務を果して来いと、聊か骨のある事實

問題を持ち出せば斯る場合、たとひ一個でも家の責任が軽くなる理で、いやしくも兄弟三人が徒らに、意地の張合をして無用の争ひをする時ではありませんまい、

家兄の我に對せし難題は寧ろ我に於ける難題ならざりしのみか、勢ひ殆ど一片の悪感情に出でて假令これを遂ぐるも事實に益なかりしかば、さらに我より一步を進めて家兄に乞ひ、債主十三人の姓名と金額とを圖として其中の一を抜き出せば、横濱の貿易業東洋商會の支配人川瀬庄平なるもの金額は正に十二萬圓なり、加之も家兄に約するところ、これを半月の間に得て先づ我手腕を示すにあり、

其十八 行路第一歩の十二萬圓

その債主は東洋商會の川瀬庄平、その金額は十二萬圓、これを我手腕の第一歩として、半月の間に空拳の指頭より揉み出さむとする當時の我は、正に家兄が目に見たる無謀の極にあらずんば一種の狂態なるべし、

されど一笑の下に二百萬の債を荷うて横行闊歩し、また更に大に爲すところあらむとせし我には、君子人の首肯を得ずと雖も、十二萬圓の成算歴々として脚下の草を抜くが如く、半月を期して家を出づる時、別に一封を家兄に残していふ、もし其間に敵の襲ひ來るあらば坐して防ぐべき神祕の一策この中にありと、

汽笛一聲、大阪に入るの前、まづ京都のホテルに投じ、直ちに書を馳せて東屋の主人を招けり、

あ、我の人生行路に於ける第一歩の手腕は此時にあれど、また我の人生行路に於ける第一歩

の罪惡も此時にあり、今なほ當時の我を顧みて深く心に疚む、されど奈何せむ、父の遺命を果さむとすれば、事に適せざる家兄あり、家兄を措いて我その任に當らむとすれば、勢ひ長上を犯して先づ我手腕を示さざるべからず、しかも赤手空拳を以て一呵の下に十二萬の財を得むとすれば、いはゆる聖賢を學ぶの道に求むべからずして、その權謀術數は實に當時の免るべからざる我たりしなり、まして東屋の主人なるもの、大阪に於ける同業者中の巨臂として稱せらるゝも、其業と其産は其性と其心に満足を與へずして、半白の餘勇なほ機に會せば鞍を叩くの概ありしのみか、我を澤田雄藏の子と知らざりし時、既に我に許せしところは、さらに我を澤田雄藏の子と知れる後、ますます我に許すところあるべしと、竊に舌を吐いて其來るを待ちし當時の我は殆ど一種の無賴漢に似たり、

この無賴漢また更に笑を含んで、その來るや自己たゞ一人にあらすして必ず其一子を携へ來るべしと豫期せしが如き、我みづから我心の醜なる、殆ど言ふに忍びざるものあり、一子とは誰ぞや、あ、實に今日の我妻なり、人の我に許すところを以て其機に乗し、さらに其子の我に意あるを以て其事を遂けむとするに至つては、正に父子を賊するものにして奸佞狡獪の極なり、たゞ其人を謀つて一時の權謀に得たるところは半歳の後に辨償し、しかも其子を我妻として生涯こゝに親愛せるがため、當時の我罪惡は幾何の減するところあるを思ふのみ、果して父子の我を訪ひ來りし時は、我胸中に於ける權謀の既に成れる時にして、満面に微笑を帯びたる父は窈窕たる花顔に紅を潮せし我子のため、正に十二萬圓を荷うて來れるの觀あり、しかも當時の東屋なるもの、その財産をあけて二十萬とすれば、實に其産の半額以上を

携へて我に供せしなり、もし我に今日の我なくんば、その家を謀つて亡ぼし其子を欺いて姦せし我とならざるべからず、

當時の我この東屋の主人を擁して語りし事の概略は、父の死後に於ける兄弟三人の意見衝突より説起して、我は寧ろ其方針の父が遺志に反くを歎じ其遺産の分配を潔しとせざるがため、さらに赤手を以て別に爲すところあらむと喝破せし一言に局を結べり、しかも虚實の間に舌鋒を極めて危辯百出風生叱咤、竟に彼をして自己が産を空しうするも我ために盡すの念を起さしめたり、もし乾燥無味なる言を以て當時の彼我を對照すれば、いはゆる我は十二萬圓を以て戀を買はむとするもの、いはゆる彼は十二萬圓を以て戀を賣らむとするもの、その實買契約こゝに成れりといふべし、さらにまた圓轉滑脱なる言を以て當時の彼我を對照すれば、彼は自己の産を護るべき一子のために取つて以て誇るに足るべき女婿を得たるが如く、

我は二百萬の債を處理すべき第一歩のために取つて以て愛すべき妻を得たるが如し、

其十九 前虎後狼の間に於ける我

父が遺せし秘密の鍵を取るべき我任の第一歩として、まづ家兄に示すべき我手腕の十二萬圓は其約こゝに成り、東屋の主人と我と枕を並べて京都ホテルの樓上に一夜を談笑せし曉は何ぞ知らむ、大阪に於ける東屋の灰にならむとは「ユウベ、クワジ、マルヤケ」この打電は無慙にも一字を誤らずして彼我の枕頭に落ち來りぬ、

この一電に接して彼も我も未だ一語を發せず、たゞ茫として殘夢を見るに似たる時、たまたま復た東京の家兄が許より我に發せし一電あり、「レイノコトハ、トモカク、サテオイテ、スグカエレ、スグカエレ」

幸福の來るは徐々として處女の歩み寄るが如く、災禍の起るは突如として惡魔の襲ひ來るが

如し、そもく運命の神は人を弄ぶものなる乎、前夜こ、に枕を竝べ満腹の好意を以て我を迎へし時は、其人の家屋すべに炎々と燃え上りて二十年來の産を一朝の灰とせし時なり、我また其人に依りて一家顛倒の機を救はむがため頻りに歡心を求めし時は、我家すでに何事か起りて家兄の狼狽自失せし時ならむか、

あ、前門の虎と後門の狼は一時に迫り來れり、曾ては白刃の山を踏んで猶かつ聲色を動かさずと我みづから我心に誓ひし我も、此時は殆ど進退こ、に谷りて死毒を舐めたるが如く、我行路第一歩の成算とせし彼の家は既に灰となつて、事いまだ一步の奏功なき我家また既に何等の變を來せしのみか、我これを招かずんば來らざりし彼を思へば、殆ど我ために火災の難を蒙りしが如く、しかも彼に約せる其子は情に於て娶らざるべからず、その子を娶れば義に於て其父を救はざるべからず、茲に於て乎、我は竟に澤田家の存亡と共に東屋なる一家の責

任を負ふべき人となれり、

されど由來こ、に今日まで踏破し來れる我既往を顧みれば、いよく窮して益々通ぜしといふ父が天性の幾分を稟けしものか、我は順境に立ちて徐ろに計を成すよりも、寧ろ逆境に立ちて咄嗟の間に事を處すべき點に得たるが如し、まして當時の勢ひ只これ進むあつて退く途なく、しかも殆ど冒険的にして向ふところに何物の敵を許さざりしが如き、その猪勇の猛進は却て此間に一轉の功を成さしめたり、實は一條の血路を開かしめたり、

乃ち東屋の主人に一策を授けていふ、徒らに狼狽して既に灰となれる大阪の家に歸らむよりは、その餘煙を汽笛一聲の車窓に顧みて神戸に馳せ行き、いまだ火災を知らざる取引銀行に從來の信用を以て許すかぎりの約束手形を投じ、いまだ火災を知らざる英米佛の三商會にあらむかぎりの物品を買取るべし、事もし整はずむば直ちに電知せよ、さらに我一家の澤田銀

行を用ひて別に疾風奔來の一策あり、加之も成敗は間一髪を逸すべからず禍を轉じて福となすの奇謀術數また茲にありと、鬪聲激發、殆ど死せるが如き東屋の主人を鞭つて起たしむ、其日の午後四時、果して神戸よりの電知あり「デキタ、アンシンセヨ」この一電を得ると共に身を翻して其夜の汽車に投じ、東京の家に歸れば二人の家兄こゝに我を擁して憤怒満面に一枚の白紙を我眉目の間に抛つていふ、危い哉、一家をあけて汝の狂に失はむとせり、咄々この野狐漢と、蓋し十二萬圓を約して家を出でし時、もし事あらば居ながら敵を防ぐに足るべき神祕の奇策として二人の家兄に残せし我一封なり、固より一點の文字なく一片の策を記せしにあらすして、事實たゞ一枚の白紙たりしなり、二人の家兄が色を變じて我を鬼畜の如くに怒りしもの正に其所以ありしなり、大喝一聲の下に鐵拳の飛び來らざりしは寧ろ二兄の温順にして謹直なりし平生を見るに足る、

されど此時の我また勢ひ已むべからず、殊更に聲を激まし膝を進めて二兄を喝破せし言語はこゝに明記して他日の謝罪に代ふ、心に泣いて口に罵るとは實に當時の我たりしなり、

なるほど電報の委細は此白紙一枚からですか、いや、よく分りました、しかも此白紙一面に認めてある無形有意の文字が、兄等の目と心に讀む事の能はざりしは、實に遺憾の至極です、そも、野狐とは誰ぞ、鬼畜いづくに在る、今に後悔して其野狐を拜し、鬼畜に伏するの怪しい結果なくんば幸ですが、つまり約束の十二萬は既に出來て居ります、期日までは相違なく現金を以て御覽に供します、ついでには私の差置いて往つた神祕の一封、これを開くほどの變が、どこに起りました、私の不在中に何物の敵が襲ひ來りました、假令この白紙が眞ッ黒になるほどの細字を埋めて如何なる周到緻密の萬計を残しても、一家の

ため能く忍んで兄が弟の言を守るだけの雅量なくンば逆も無効です、わざと白紙一枚を名案奇策と欺いて残した所以は、みだりに立騒いで狼狼のあまり藪蛇の愚を演じさせないためです、また事實の變が起つて開封した時には、第一この雄三郎に満腹の憤怒をうつさせ、敵に血氣の勇を驅らせざるがためです、かつ憤怒に堪へ兼ねて兎も角も私を呼戻せば、將來また二兄の淺果敢な專斷で徒らに大事を過らざる豫防劑にもなりますから、彼れ是れ萬事の便宜上、かりに一片の變通を行ひ機先を制した意味です、たとひ人を馬鹿にした無意味の白紙一枚にせよ、誓約に反いて叨りに開封するが如きは共に語るべからざる小人のする事です、兄等が約に反いて居ながら、いまだ約束の期日に至らざる我を呼び戻したの事は殊ど自家顛倒の甚だしい次第で、いはゞ時來らざるに食を搦むと一般、兒戯に類した少量の俗解です、しかし、こゝで如何なる議論をしても、血で血を洗ふの諺、さらに何の功

も御坐いませんから、私は約束の期日までに必ず十二萬圓を拵へて御覽に入れた上、また約束通り、亡父が跡を引受けて物の美事に遣つて見ませう、もし期日に十二萬の約を事實に遂げ得ない曉は、宜しく澤田の姓を更へて別に無宿の浪人となり、この盛衰興廢をあけて一切兩兄にお任し申しませう、白紙云々の事に至つては十二萬圓成否の後に於て生すべき事、但し其間に不意の變あつて始めて生すべき問題です、就いては明日また京都か或は大坂まで出かけます、結局かく長上に對して憚りもなく禮を失するといふも、實は父が名聲を損せずして此難關を巧みに切抜け、あはして一轉さらに澤田家の萬歳を祈るからで、その他には別に何の理由も御坐いません、

みだりに事を好んで論を争ふにあらず、いたづらに眼前の小禮細節に縛せられて竟に一家轉覆の大禍に陥らむことを恐るゝのあまり、磐石を以て二兄を壓するが如くに説き伏せ、その翌日また急行列車に投じて京都に向ひしが、十餘時間の車中に於ける當時の我胸間には、殆ど運命の神より教へられたる人生秘密の一卷を讀むに等しく、凡そ我生涯を通じて最も機敏に最も周到に遺憾なく活動せしが如きも、今日これを思へば只これ大膽なる一狂漢の幸に顛倒を免れしのみ、

其二十 一瀉千里の我

間一髪の臨機應變、いはゆる禍を轉じて福となすもの、その東屋の主人に授けし權謀の一策は、悉く中らずと雖も半以上の效を奏して、物品買占の時價暴騰より得たる利益を打算し來れば、一夜の火災に失うたる家屋と商品の損失は既に再び攫取し得たりといふ、

その名は二兄に對する將來の我地步を占むべきためと説き、その實は我澤田銀行に投じて必要ある毎に忽ち應ずべき約を結び、さらに來春の三月を以て婚を結ぶべしと誓ひ、こゝに我一個の證書と交換せる十二萬圓は、實に我をして其後の手腕を一瀉千里の勢ひに揮はしめ、あはして今日の澤田家をなさしめたる第一歩の基礎たり、以て長く我家の徳とすべきところ、其人は既に死して其徳に酬ゆべきもの只これ今日の我妻あるのみ、

我と妻と常に當時の事を語りて、昔を思ふ談笑の間に今なほ一事の心に快しとせざるのみか、うた、一掬の涙を注ぐべき事あり、何ぞや、かの重吉なるもの、實に其放火犯たりしがためなり、多年恩義の家に火を放つて一朝の灰とす、その罪や天地に容るゝところなしと雖も、熱して狂し狂して亂れ亂れて竟に罪を犯すは小人の常、しかも其こゝに至れる所以を思へば、人事さらに一點の道理なき彼が怨恨の極と嫉妬の極より成れる其犯罪も、たゞ我と妻とに於

ては殆ど罪の極を以て惡むに忍びざるものあり、彼が獄中に死せる日を記して聊か心に弔ふ、されど當時の我は今日の我にあらず、こゝに得たる十二萬圓を提けて疾風の如く家に歸り、半月の約に先だつこと四日、二人の家兄が一驚の面前に投じていふ、正に是れ赤手空拳の我指端より揉み出せるもの、但し玩弄紙幣にあらずとの一言は、他日に於て深く悔悟せり、たゞ幸にして家兄の寛なる、忽ち我言行の一例に服せしのみか、その亡狀を尤めず、また出所の奈何を追窮せず、竟に事實を事實として約の如く我に一家の存亡を託せり、嗚呼、もし我をして家兄の地位たらしめば、天性かくの如き我、まして當時の勢ひに於ける我は、寧ろ屈せずして更に疑を起すの極、その裏面を看破して其外面を打撃するの一怪事ありしやも知るべからず、

家兄こゝに我を我として疑はず、一家の存亡興廢をあけて新に任せられし後は、その第一著として彼の襲ひ來らざる前、先づ我より向ふべきもの、横濱の東洋商會に於ける支配人の川瀬庄平なり、

川瀬庄平の名は屢々これを新聞紙上の經濟界に見るのみか、聞説、其性の酷薄にして其利に走るの老獪なる殆ど當世に敵なく、いはゆる人の隙を窺ひ其虛に乗じて今日の富を致せるものと、まだ家兄のいふところに依れば、父が生前の交友中に於て殆ど意氣の相投合せざりしものなりと、これなる哉、これなるかな、十三人の債權者中いづれか最も與し易からざる一人の勁敵を取つて以て寧ろ我用に供せむとせし反間苦肉の一計には、正に適せる好下物この機を逸すべからずとして、直ちに其本營を衝けり、敵として恐るべきものは味方として頼むに足るの理あり、酷薄にして老獪なるものには策を策とせずして策ならざるところに策を施すの利あり、その父の生前に意氣の投合せざりしは

寧ろ却つて死後の難を説くに易く事を強ふるに易く、一見こゝに乳臭を帯びて殆ど彼の眼中になきところ、正に以て其膽を奪ふべしとは、いまだ鋒を交へざる彼に對しての我作戦計畫なりき、

もし一步を誤れば十三人の先鋒となつて襲ひ來るべかりし此の老獺物に對ひ、膝を叩いて談ぜし當時の大略こゝに記して他日の一笑とす、

全體この私は澤田家の三男で、加之も若輩の部屋住、今日までは殆ど家にあつて用なき無關係の人間ですから、父の死後も二人の愚兄が萬事を引受けて、この雄三郎には一切さらに分らん事が多いです、まづ例へて申さば、父の雄蔵が多年の事業上に於ける遺口、かりに手腕と申しても宜いでせうが、結局その活動鹽梅は、世間の評判いかなるもんで御坐い

ませう、幸ひ生前に御懇親を願つた方々の目より、無遠慮に露骨的の批評をして戴けば、大に私どもが將來の参考になりますからと、いふやうな工合で、二三度も伺つて小僧扱ひを蒙つた後、實に貴君の方より口を開いて貰つて、俄に驚いた風をするのが、身にとつての利益ですが、さる小面倒な事は借置いて、簡單に今日は借金の御催促を願ひに出ました、しかし何分お手軟かに願ひます、あまり物凄く遣られましたは、事實まだ戰場に馴れない初陣の我々兄弟三人、まづ刺違へて死ぬより、外に術は御坐いませんといふ其の理由大略、つまり澤田家は近日、あの五會社もろとも仆るべき運命に差迫つて居りますが、何とかして維持繼續の方法、むしろ挽回の策は御坐いますまいかね、さらに言葉の艶を取つて仕舞つて、單刀直入に曲折なしの早いところを願へば、兎も角も貴君に對する十二萬圓は、元利取揃へて直ちに返済いたしますから、外の債權者同様、いまだ一文も受取らな

い顔で、わざと一時に包圍攻撃の最も手厳しい先鋒となつて、有名無實の御挑戦を願ひた
いのです、取も直さず貴君に表面、敵の指揮官さては參謀官となつて其同勢を事實に踏込
ませないやう、空鐵砲を間断なく放して戴きたいのです、さらに其實は、我々兄弟三人の
味方となり、大に反間苦肉の計を用ひて人しれず満腹の御俠義を仰ぎたいのです、しかし
また思召に依つては御遠慮の入らない事、全く眞實の敵となつて澤田雄藏の亡跡を御踏潰
しになつても宜しい、その代り十二萬の負債は飽くまで其ま、捨て置いて、いはゆる百貫の
抵當に古編笠一蓋を呈するの覺悟、といふのも實は前夜までの考案で、今日こゝで只今お
願ひ申したいのは、むしろ砲火相交へずして穩和にテーブルの上の御談判を懇願いたしま
す、寄つて集つて踏潰すとすれば一文も残りますまいが、また四方から支へて立直すとす
れば外面いまだ事なき澤田家の位置、何とか御工夫は御坐いますまいかね、人よりも金と

いふのは凡そ二三十萬以下の事、もはや百萬二百萬の興廢存亡となれば、金よりも人の價
値にある事、また小貧の整理は手数が掛つて面倒ですが、大貧の整理は却つて簡単に済む
もんと聞き及んで居りますから、願はくば貴君が聲なくして靜なる祕密の音頭取となつて、
この澤田家の瘦身に乘せず、肥して太らして取つて戴く事は出来ませぬか、かう開け放
つて萬事うちあげた以上は、殺すも生かすも貴君次第、只この三男に生れた雄三郎は二人の
兄と違つて父の大執著心を稟けて居りますから、尋常の殺されやうは致しません、しかし
また生かして戴けば澤田家に於ける廣大無邊の大恩人、長く其の徳を記して子孫に傳へま
す、つまり申さば貴君は貴君の分だけ損せず先づ取つて置いて而して、後また更に義侠の
名と實を取る理由で、御年輩を伺つても一番こゝは御老後に於ける面白い御善根の植場所
かと心得ます、

酷薄と老獺を以て世人に目せらるゝ彼は、寧ろ却つて我に見るところありしが如く、一諾の下に膝を打つて忽ち我言を容れしのみか更に自から進んで大に我用をなさむとせり、しかも謹直方正にして小心翼翼の名を世に稱せらるゝ人よりも、當時の我家に於ける必要と當時の我心に期せるものは、正に斯の酷薄にして老獺なりし川瀬庄平にあり、

其二十一 戰國策を學びし我

人を殺すの毒また人を生かすの效あり、船を覆すの風浪また船を馳せしむるの力あり、こゝに川瀬庄平の一諾は他の債主十人に敵すべしと雖も、世の隙を窺ひ人の虚に乗じて今日の富を致せしといふ剽悍なる彼の性は、殆ど我ために猛獸を飼養するが如く、もし其間に寛嚴の

機微を誤れば忽ち野外に逸し去るのみか、我を反嚙するの恐あり、

猛獸を繋ぐに鐵鎖の固きと共に舌を鳴らすの好餌なかるべからず、醒薄にして剽悍なる老獺物には利を喰はすの外、また別に何等かの作用なかるべからず、擒縦自在とは我これを文字の上を知る、そもく如何なる策を以て彼の生涯を我擒にすべきか、

此間に於ける我一計は、こゝに戰國策中の悲惨を學ぶが如しと雖も、たゞ一諾の快を以て心を許すべからざる彼に對しては、一家の存亡興廢を荷へる當時の我として、勢ひ實に己むを得ざりしもの、殆ど皮肉を削るの苦痛あり、何ぞや、彼が一女を娶りて我長兄の妻とするにあり、

此時の彼には二男三女ありて、その一女に當れるもの當時二十四、しかも親の子に於ける、彼が世人に稱せらるゝところと正反對にして、その教育と親愛は殆ど圓滿なる紳士の家庭に

あるが如く、容貌また美にして性行の温淑なる點も父に似ざるの評ありしのみか、我長兄ここに年三十、いづれの方面よりするも既に娶らざるべからず、まして秘密を藏せる一家の外、面としては殊更に早く娶らざるべからず、只その妻として生涯を伴はむとするもの、彼が子たるに苦しむのみ、また更に其子の父に頼りて一家を救はる、が如き形跡あるを厭ふのみ、其父を娶るにあらず其子を娶るにありと雖も、人情こゝに至りては自から一種の不快感を感じて、しかも長く其不快を保たむとするには殆ど言ふべからざるの苦痛あるべく、今や其苦痛を以て我家兄に強ひむとせし當時の我苦痛慘憺は、寧ろ却つて家兄に勝れり、されど思ふ、もし兄の生涯を以て一家の犠牲に供するものといはば、また彼が女を質として彼を擒にするものといふべく、たゞ幸にして其間に於ける夫婦相愛せば可なり、もし長兄にして聞かすんば次兄に迫らむ、もし彼にして應せずば、別に一策ありと、こゝに意を決して竊

に人を介し、まづ試みに彼が意中を探れば、また忽ち一諾の下に手を拍つて満面の笑に迎へ、これを長兄に説けば亦さらに何の苦むところなくして、寧ろ我一家のために力を盡すの前の女を送りて誓を固くするものとせり、あ、我の最も苦心慘憺たりしところは、何ぞ圖らむ、却て彼と兄との最も意氣投合せしところにして、我は生涯の事業上に於ける殆んど豫想の違はざりしを以て誇りしが、只この一事のみ實に案外の結果を來せり、しかも家兄が伉儷相和して今日に及べるを思へば、さらに當時の我みづから我を笑ふの外その策に過ぎて敵を翻弄するの概あれども、味方を容るゝの量に乏しかりしを恥づ、そもく、また我は戰國進取の人にして太平守成の人にあらざるを知る、

其二十二 秘密の鍵を抛ちし我

大聲疾呼の敵として第一の先鋒に襲ひ來るべき川瀬庄平は、竟に我味方として最も有力なる

第一の防禦線に立てるのみか、その女を以て我家兄に送るの約ありし後は、さらに其老猶なる手腕を揮つて我ための武器となり要害となり、しかも其富の事實は益々我ための聲援となり城壁となりて、其間に於ける我をして縦横の策を恣にせしめたり、されど煙のあるところ必ず火あり、影の動くところ物また動くの理あり。由來こゝに鬼神をして猶かつ窺はしめざりし父が多年の秘密も、その父に如かざる我は只これ個人の耳目を蔽ひしのみ、竟に個人の集合せる社會の耳目を盲聳せしむる能はずして、一二の新聞紙上に實業界の疑問と題し我一家に於ける鼎の輕重を問ふものあり、幸ひに敵中の味方たりし川瀬庄平あるがため、我これを利用して事實にまだ門外一步の難なからしめしと雖も、既に我鼎の輕重を疑ふものあり、しかも鼎は輕し父の遺命は重し、今や退いて守るべき時にあらず宜しく進んで大に戦ふべしと、俄に十三人の債主をして其二百萬

を八百萬と稱せしめ、さらに有力なる新聞雜誌に向うて尤も明白に尤も露骨に其名を聯ねて告白せしめたり、

蓋し此時に於ける十三人の債主なるものは、その債權を合して既に一の合資會社を組織せしめ、これに關する一切の方法細節を設け我専有の五會社を擔保として、年々その收益の幾分を配當すべき規約ありしがため、事實この十三人は正に我一家の利害得失を伴ふべきの理、只その二百萬を更に八百萬圓と稱して天下に暴露せしめむとせし時は、殆ど色を失うて躊躇せる中に一人かの川瀬庄平の大膽にして機敏なる、忽ち案を拍つて快と叫べり、

既に秘密といふ、讀んで字の如く人間の神扉たらざるべからず、秘密は秘密を守るの方あつて始めて秘密なるべし、たとひ其秘密の内容を窺はれざるも其秘密たるを知らるゝ時は正に秘密の破れたる時なり、陶器は底に隠れたる一點の龜裂を以て外形を損せずと雖も、水を盛つ

て漏洩するの恐あれば宜しく割ッて而して後また更に繼ぐの要ありとは、當時の世評に對して我一家のため門戸開放せし所以なり、

果して我おもふところに違はず、わづかに門戸の隙より窺うて半信半疑の間に彷徨せし世人は、驀然として突出せし八百萬の負債に驚いて後に仆れ、しかも明かに署名せし十三人の債權者中たゞ一人の來り迫るものなきに益々一驚を喫し、さらに專有の五會社が依然として日夜煙筒の煤烟を絶たず間斷なき器械の運轉に愈々膽を奪はれ、その反響は却て我家の將に逸し去らむとせし勢力と信用と手腕をして殆ど恐るべき當世無比の名を得せしめたり、

八百萬の債を負うて白日青天の下に一步も躓かず、當世に名を知られたる十三人の敵を敵として更に一點の眉目を動かさず、年いまだ三十を越えざる兄弟三人こゝに父が遺業を守つて悠々たる談笑の態度、いかに醜態たる世人の眼底に反映せしぞ、人なき半夜に枕を敲て、沈思

默考すれば、殆ど石を抱いて深淵に臨むが如き感あれども、また門外の風塵を仰いで當時の我を顧みれば、殆と言ふべからざるの快あり、

其二十三

我そもく南海一端の山間兒より出でて當世の實業界に横行闊歩せしもの、子に生れ、しかも鬼神なほ窺ひ得ざりし多年秘密の父が遺志を嗣いで、飛耳長目の世に立ち嫉妬陥穽の衆に交はり、その間に一家存亡の危機を荷つて今日に至れる往事を追憶すれば、人情の千差萬別世態の毀譽褒貶、時の消長窮達、事の利害得失、殆ど走馬燈を見るが如く、其いづれか一定の真相なるを知らずと雖も、自然に得たる鍊磨の功は竟に一の悟道となり、無意に得たる習慣の功は竟に一の主義となり、また人と我との離合集散を事實に照らして得たるところは竟に一の觀念となれり、

されど我の悟道なるものは幽立なる文字の上より來れるにあらず、また我の主義なるものは高尚なる論壇の上より來れるにあらず、さらに我の觀念なるものは人の取つて以て學ぶべき哲理の上より來れるにあらず、たゞ何等か一種無形の感觸によりて得たるもの、聊か記して老後の一興に備ふ、もし其名を題すれば我のための「一家言」といふべき乎、

○人は多く自己が長所よりも自己が短所に誇るものなり、失敗と落魄とは此の間に生ず、また人は多く自己が生活せる業を嫌うて他の業を好むの癖あり、怠惰と貧困とは此の間に生ずさらに人は恩を受けたるところに却て不平を抱き、仇となるべきところに寧ろ親しむの怪あり、不義と怨恨とは此間に生ず、されど皆これ凡俗小人の徒、只それ凡俗小人の多きを奈何せむ、

○富の價と人の價と相並びて其當を得ざるべからず、人より富の大なるは、其品位に於て必ず何等かの卑しきところあり、富よりも人の高きは、其性行に於て必ず何等かの缺くるところあり、俊秀の名士にして赤貧洗ふが如きは、これを昔日の文字上に稱すべく、これを今日の事實上に稱すべからず、まして野卑劣等なる俗物の俄に肥馬輕車を驅るが如きは、古今を通じて醜の醜なるもの、黄金盤上に糞土を盛れるが如し、

○大富は天にあり、小富は人にあり、大なる富は運命の神の守るところにして人力の得るところにあらず、小なる富は、人力の及ぶところにして、運命の神の司どるところにあらず、只それ萬人傑出の偉物は、能く人力を盡して後さらに運命の神と戦うて亦これに勝つ。

○人の面貌は殆ど其人の性行に於ける一部の消息を洩らせるものにして、額の廣く平なるものは温雅にして度量あるが如く、額の狭くして凸凹あるものは、小膽にして怒り易く喜

び易きが如し、鼻の高く尖れるものは、多く耐力に富み、鼻の低く横たはれるものは不
 撓の力に乏し、目の細くして小なるものは沈鬱の氣を帯び、目の大にして張れるものは多
 く輕舉の風を帯ぶ、眼球の爛々として底に光れるものは、善惡ともに遂行して已まざるの
 決心あり、眼球の朦朧として常に睡れるが如きものは、大小ともに逡巡して進まざるの怯
 懦あり、眉の太く濃く短きものは事を好むの癖なく、眉の細く薄く長きものは無事を嫌ふ
 の癖あり、口の太なるものに却て小心翼翼あり、口の小なるものに寧ろ大膽不敵あり、耳
 の大小を以て貧富を證とすれども殆ど中らざるが如く、色の黒白を以て善惡を證すれども、
 亦これ俗解に近く、たゞ面色おのづから一種の青黒を帯びて、其間に言ふべからざる光澤
 を含めるものは多く敢爲にして甚だしきは剽悍の性を備へ、白く冴えて潤ひなきものと赤
 く冴えて照らさざるものとは、往々嫉妬偏執の性に多し、されど是たゞ世間普通の常人を取

つて多年の實驗上より其特殊の點をあけしのみ、凡骨にして偉物あり、威相にして凡俗あ
 り、なほ深淵の底を知らざるが如し、

○凡そ人に天生うまれながらの惡人なるものなく、大惡人は大善人と等しく世に稀なるも
 のにして、多くは其境遇と其習慣と其利害得失と其喜怒哀樂とによりて生ずるものなり、
 放火夜盜の類と雖も、仔細に其來るところを研究すれば、殆ど其性にあらざるが如く、ま
 して世間普通の人情に於て其惡の通性たるべきもの少く、たゞ一時の酒に酔へるが如し、
 されば人の惡を憎み惡に憤り惡を怨み惡を叱咤せむよりは、我その惡に當らざるを以て理
 とす、

○およそ人の生涯に於て、最も廉價なるものは妻なり、その父母より受けたる教育と其家
 より相應に運ばる、衣類調度と其天生より得たる容貌と性行と既往の一切とをあけて無代

價に携帶し來るのみか、將來さらに新なる戀愛と貞節と子孫を産むべき誓約をも事實として捧げ來るものなり、天下また豈かくの如き廉なるものあらむや、されど人間の生涯に於て最も高價なるものも妻なり、もし其選を誤れば祖先傳來の財産を傾けて足らず、一家風波の悲惨を拂うて足らず、我生涯の苦痛を間斷なく投じて足らず、天下また豈かくの如き不廉なるものあらむや、

○一方に頓首再拜して哀を乞ふものは、また一方に大言壯語して勢を示すものなり、人は二兎を逐ふ能はずと雖も一人にして能く二箇の假面を被るものなり、

○深く酒色の巷に出入して瓦礫の如く金銀を散ずるものは、却て親族故舊に吝嗇なり、廣く朋友の間に往來して兒戲の如く談笑を恣にするものは、却て交誼友情に缺乏せり、

○人を衣食の間に救はむとすれば、宜しく其人の性行と境遇とを見るべし、救ふところ厚

きに過ぐれば其人こゝに誤り、救ふところ薄きに過ぐれば其人こゝに恨む、およそ人として衣食の間に救はるゝものは、衣食の外を顧みるの違なければなり

○拙速を主とするものは事に使ふべし、巧遲を主とするものは理に使ふべし、大慾なるものは金庫の鍵を託すべし、小慾なるものは奔走の任を託すべし、

○厘毛の重きを知つて萬金の輕きを知るものにあらずんば富を談すべからず、道理に屈せずして白刃に屈するものは共に大事を語るべからず、

○大に高く聲をあけて笑ふものは愛すべし、幽に低く聲を含んで笑ふものは愛すべからず、窮して物を賣るものは愛すべし、窮して物を典ずるものは愛すべからず、驚いて遁ぐるものは愛すべし、驚いて動かざるものは愛すべからず、近く迫りて我に向ふ敵は愛すべし、遠く走りて我を顧みる敵は愛すべからず、

○自己が妻に弱點を知られざるものは、出でて社會と戦ふに足る、自己が妻に不平の色なからしむるもの、亦た出でて社會と戦ふに足る、

○讀書なき文官の才智は頼むべからず、修養なき一時の品位は信すべからず、境遇によりて作られたる性行は時に變ずるの恐あり、習慣によりて作られたる面目は事に破るゝの恐あり、

○世には小人に似たる君子あり、君子に似たる小人あり、智者に等しき愚者あり、愚者に等しき智者あり、奸惡に類せる善人あり、善人に類せる奸惡あり、只その名を聞いて其實に驚くべからず、その實に驚いて其名を聞くべからず、

觀じ來れば人生そもく夢の如しといへど、我は其夢さめて曉の殘燈に猶かつ我影のうつれ

るを恥づ、さらに思ひ見る昔日の我は果して何をか爲し、ぞ、徒らに血氣の勇と眼前の策を驅つて泡沫に等しき一時の快を貪りしのみ、

たゞ茲に聊か父が遺志を嗣いで一家の存亡を危機の間に支へ以て今日を致せりと雖も、その危機を支ふるがために由來幾何の敵を作れる、その今日を致せるがために世間幾何の罪を作れる、

たゞ幸ひに其罪と其敵とは悉く當時の事を任せし我一身に荷うて、あますところの成功と得たるところの今日を家兄に譲りしがため、その澤田家に於ける我は殆ど父の子たるに負かさ

れど、その社會に於ける我は殆ど覆面を以て至るところに毒刃を揮へるが如し、一人の大なる富は幾千人の小なる富を奪うて成せるもの、一人の大なる成功は幾千人の小なる成功を奪うて成せるもの、興廢の理と勝敗の數に於ては免るべからざる自然の結果なりと

雖も、そもく我敵となりて我鋒鋦に斃れたるもの、多くは、堂々たる白日青天の決戦にあらずして、殆んど悪魔の虜ふが如き權謀術數に中てられしを思へば、うた、往事を回顧して更に昔日の我を悔ゆ、

されど當時の我を思へば勢ひ當時の我たらざるべからず、また當時の我家を思へば勢ひ當時の我なかるべからず、そもく父は我父としての父なりしか、そもく我は其子としての我に生れしか、

父は山間の一小村より出でて加之も逆流の半生に一代有數の人となりしがため、其間に於ける商機の已むを得ざるものありしと雖も、我は既に成れる父の家に生れて餘威いまだ失せざる下に其遺志を遂ぐる能はず、わづかに奇を以て制し術を以て勝ち策を以て今日に到れるを思へば、子として父の墓前に向ふの我また深く恥づ、

名は成り功は遂けて身を退くの語、これを史に見る、我は今こゝに何の辭を以て餘生を送るべきか、

たゞ家兄の我を待つに功を以てし、家人の我を仰ぐに威を以てし、世人の我を見るに智を以てするのみ、その名や家兄の我に遇するところ、その威や家人の我に迎ふところ、その智や世人の我に迷ふところ、もし其間に我みづから我を稱して人事一切の契を絶たむとすれば、腦味噌を摺り潰して竟に恍惚たりといはむのみ、

元祿名物男

其 一

家の貧富と賢不肖の差別あれども、同じ人間に生れながら駕に乗る人と駕を昇く人、時の利害と運の吉凶あれども、同じ道ゆきながら物を落す人と拾ふ人、さて思へば浮世はさまざまの現狀を、水の流れの行方に譬へて何處いかなる淵となり瀬となるやらん、こゝ、遠江國、東海道を西と東に分ちて五十三驛を眞只中、音に聞ゆる大天龍小天龍の流れに夜の寢覺の枕を敬て、朝は秋葉つゞきの山鴉もろとも、東天の街道筋に馬を追ふ鈴の音ちやらく、荒井の番所より漏れ來る旅人の袖袂を、ふりわけの中の町とて、またの名を町屋村ともいふ草と瓦の家數とりまぜて三四十軒、されば息杖の立場ともならで、やう／＼往來ふ

人の草鞋錢と背門の田甫の青菜に生命を繋ぐ枯村ありけり、

この中の町の村外れに、いづこの里より尾羽うち枯らして渡り來にけむ、近ごろ借家住居せし武士の浪人あり、うち見たるところ身も心も花は昔に今は皺くちやの梅干老爺ながら、元來うまれついでの大男、老の腰骨かたく伸びて手足の筋は猶いまた切柄を握るの勢ひあり、しかも霜降る鬢の毛を引つめて生來きかぬ氣の而魂、身の成る果を人にも言はで、たゞ自己が胸一つに何事も包みし風情、されど世を忍ぶ身にもあらでや、傾く軒の柱に木札をかけて墨くろ／＼と筆太の大字に、横山庄左衛門とぞ現はしぬ、

横山庄左衛門、秋の夜長の寢覺勝を語らふべき友白髮の妻もなく、たゞ味噌醬油の通路に名使ふ下郎もなく下女もなく、たゞ家にありて老いたる父に冊くものは二人の子息、兄なるは源太とて今年二十七、弟は左門とて二十一、

兄の源太は人品骨格あくまで父に肖て、しかも今を盛りに色白の大兵、言葉すゞしく眉目は凛々しく、見るからに槍一筋の主ともなるべきを、かゝる片田舎の埋木に惜しや今日までと思へど、何とかしけむ、あはれ弟の左門は生れついでに醜男にて、色黒の満面に大痘痕の小兵もの、肩と腰との骨のみ横に張出して大道曰の歩むに等しく、聲は小田の蛙の啼損ねたらむが如く咽喉に溢り唇端に濁りて、唯これ瘡瘡神の油断より斯世に生き残りたる怪物、同じ同胞ながら斯くまで黒白美醜の差別あるかと驚かれぬ、

されど老いたる一人の父に事へては兄弟もろとも力を戮して朝夕の怠りなく、浮世の月花を餘所に見て斯の草叢に若き身の名聞も思はず、女手のなき浪々の瘦世帯に可憐ら盛りの男振を我から打捨て、兄が汲む水に弟は厨の立働き、夜更け人定まりて後は燈火の下に差向うての讀書三昧、曉には背門の切株に父の庄左衛門が老の腰うちかけての指南役なり行司役なり、その面前に兄弟が右左、朝露の草を蹂躪つて勝負を争ふ竹刀の音激しく、それ源太が膝に隙の見ゆるぞ、南無三うたれをツたか、やれ左門その小手に用心せい、え、言はざることか白痴め、は、は、は、先づ今日は勝負なしの相討ちや、相討ち々と老の身を忘れての高笑ひ、亂杭の齒は缺けたれど親として心の快樂は胸に満ちて溢れぬ、

村の誰彼、をりくの籬根越に此體を見て、いづこも同じ人の口々、はて不思議ぢや、水入らずの父子三人いかに睦じからうとも、高が月に四匁五分の茅屋を借入れて、やうく浮世を張抜の提灯世帯、まして南風にあてられた飴細工ながくと流れ渡りの浪人とは、朝夕出入の紙衣袖でも知れた身の境涯に、あの氣樂さは何事ぢや、兵糧攻に逢った瘦大將か飢饉年の施行米に外れた亡者を見るやうに、筋骨だらけの老父奴が兩脇張って差控へた面前に、兄弟の奴等が左右に分れて腹減しの劍術三昧、やれ怖ろしや、斬取強盜武士の習慣の下稽古ぢ

やあるまいかといへば、仔細らしき男が小首を振つて、いや／＼その鑑定まだ若いぞ、貧は士の常を守つて浮雲の榮華を思はずとはこのこと、味噌醬油を三文買のあの瘦身代で父子が出る時の腰の物を見い、著類は夕陽前でも武士道具は日の出の勢ひ、ぴかりと鑑に輝くは黄金の伏金八寸、ことしの夏の蟲干に破葛籠の底を叩いて布子の古著でも出すかと思ひの外東向の縁端に飾つたは紫裾濃の大鏡、五枚鑲の兜の鍔形だけでも慥に青田三四段が物、なぐれ渡りの道中を憚つてか千段巻より切放した大身槍葉槍鏢槍十文字槍が四五本、此方の衣紋竹には用意の麻社袴、はてあの分では五年十年の凶作が續いたとて、喰ふと飲むとにビクともせまい用意ある筈ぢや、うかく／＼ほざいて笠の臺を失ふなといへば、また一人分別貌に、なるほど、あの様な人體には得て有る事、横に曲つた家老の鼻柱を捻上げたか、但しは持つて生れた瀧癩玉を殿様の前へ叩きつけたがため、御不興を蒙つて御國退轉、さて子息共

は世に出すとも我身は生涯浪人と定めての詫住居、もしこれが當らずば敵を視ふか敵に視はる、かの一つ二つ、田甫道に出逢うても頭を下け損うて踏み潰されなとぞ戒めぬ、
 さても横山庄左衛門そもや何者の成れの果ぞ、我身のみかは、今を男盛りの可惜ら同胞二人まで斯かる田舎の草叢に埋めて、

其二

ばや秋の夕日も沈みて塙に急ぐ鴉の聲々、門口の街道には戻り馬を追ふ小室節、いづこを宿と定めなき其日々々の雲助どもが空駕荷うて過ぎ行く高笑ひさへ、つゞく繩手の奥に消え果て、旅人の腸を断つ、ましてや世に住み詫びて物思ふ身の夕暮は哀れも最ど深し、
 兄の源太が窓の燈火に向うて書見の此方には、その火影を分ち机を並べて弟の左門、しきりに筆を執りつゝ物した、むる體父の庄左衛門は老いたる身の夜は殊更用もなく、若き子息等

が修行の支障にもならんかと、一室に夜具ひツかついで身を横へながら、このごろの夜長に一入の目も冴えて眠られねば、おもはず破障子の隙間より枕を欹て、兄弟の姿を見るにつけ、親心いつしか涙なり、あはれ兄の源太あのみ、大道の中央に押出しても天晴れ美事の男一貫いづこに瑕瑾やあるべき、かはいや弟の左門ままれし姿こそ見苦しけれ膽の太さと分別の敏さは凡そ今の世の若輩もの誰にか劣るべき、さるを何ぞや、なまなか世俗に反いて首骨の固き我のやうなる者を父に持ちしがため、ふびんや兄弟もろとも世に出でて男らしき境涯にもあらせず、いたづらに荒れたる宿の軒に物淋しき春秋を送らせて、あたり名器いつしか草叢に野犬の皿となつては臍を噛むも及ばじ、兄は二十七、弟は二十一、もはや年輩といひ骨格といひ彼等が時節到来、さらば我は我かくて人知れぬ此ま、の埋木に朽ち果つるとも、いざや兄弟は世に出して思ふほどの道を歩ましくれむ。

夜は更けたり、背門の木葉を掃ふ風の音さへ身に沁むま、の庄左衛門、しづかに夜具を脱いで枕を片寄せながら、「源太、左門」

はや寢入り給ひしとのみ思ひし父が聲として、呼ばれたる兄弟等しく振向きぬ、「や、まだ御寢なりませぬか」「いや、今夜は何とやら、わけて寢られぬぢや、いかう更けたれど、ちと兄弟に改めて言ひたき事もある、また聞きたい事もある、その燈火こ、へ持て来よ、はて茶も湯も入るものか、そのま、く、」「はッ、はッ」

引寄せし燈火かきたて、起直つたる父の庄左衛門、今更に兄弟の顔つれくくと見入りながら、おもはず老の膝を進めぬ、「兄弟とも、今この父が言葉の端々、しかと心に落附けて油断なう聞けよ、さりとて父が言葉に聞えぬ筋もあらば右左より打込ンでの談合づくを待つぞよ、これぞ父子三人が生涯わけめの首途ぢや」

おもひもよらぬ父が言葉に、兄弟もろとも顔を見合して無言に窺ふ體、父は猶更言葉しづかに容を正しぬ、

「今更めて語らずとも、すぎし關が原の一戦に迎も叶はぬ非運の末と知りながら、天下の義と朋友の誼に依つて石田がため働いたる苦節の一傑、しかも敵味方に戰場名譽の禮を教へたる大谷刑部が妻の弟は我のための祖父、その姉婿の刑部もろとも死せし後に残りしは汝等がためめの祖父この父がための親、さらば今こゝに横山庄左衛門といふ浮世しらすの癖者が浮世しらすの草叢に終りてこそ、父祖三代あはれ武門の意地は立抜いたり、されど四代目に當れる汝等兄弟は、もはや世に何の會釋も入らぬ心のまゝの出處進退、いたづらに父が片意地に引かれて可憐ら若身の花を枯らすも惜しや惘然なり、ついでは今夜あらためて父子一世の永訣、ながくの暇を遣はずよ、兄弟が揃ひも揃ひし今日までの孝養にて父は満足、さて此後

は一人の老いたる父ありとて往く道の後髪を引かる、な、おのゝ思ふがま、に家を出て世に榮えて天晴れ身を立てよ、浪々の手許ながら先づは武士一通りの修行もさせたる筈、男一貫の心得も平生より教へ置いたる筈、もはや何處の里に行くとも踏まれもすまい蹴られもすまい、なう源太、左門なんとちや、およそ父として子の可愛さに優劣なけれど、由緒あつて世に落魄れたるほど猶更人一倍に可愛き汝等兄弟、今あらためて手放す心の中を推量せい」

其三

父の庄左衛門が老の涙もろとも、燈火ひきよせて語り出せし一期の言葉に、兄の源太、弟の左門、等しく手をついて頭を俯しぬ、

父は猶更膝を進めて、ささりながら兄弟とも、よく聞けよ、今この父が汝等を世に出さんとして首途、いたづらに目に持つ老の涙ばかりが餞別の品ともなるまじ、さればこの十餘年來、

我身を利害の外に置いて諸國流浪の曉、つくぐと世のありさまを觀じて人しれず胸にた、
 みし心の分別、あらためて汝等兄弟に言ひ聞かさん、それ源太まづ進め左門も頭をあけよ、花
 は櫻木、人は武士と唄へど、槍の穂先に血を塗って千石となり、兜首一つを萬石に賣り飛す亂
 世ならば知らぬこと、今この太平に生れあはして新參召抱への兩刀どれほどの價値かあるべ
 き、白痴にもせよ腰拔にもせよ、天下の諸侯いづれ悉皆それく家に譜代の家來筋あつて家
 老用人物頭と折紙づきの世の中、さるを昨日まで編笠紙衣の素浪人が俄に出でて身を起さん
 こと、なかくの業、よし一朝の知己を求めて破格の選に逢ふとても、門閥朋黨の小人原が
 嫉妬偏執の重圍に落ちて結句みづから身を亡ぼすの基、これを思へば今時の武士ほど面白か
 らぬ當世に、可愛の我子を武士として新たに主取させんは親心、なんとやら無分別に似たれ
 ど、儲また祖先傳來の兩刀を今更に菜切庖丁として横山の苗字このまゝの土に葬らんは勿體

なし、ついでには兄の源太に言ふぞよ、見渡す大名中、いたづらに舊記古録を鼻頭にかけて家
 柄に誇る許へは奉公無用の業、幸ひ江戸には當流隨一の俄大名、柳澤美濃守あり、此奴元來
 この太平の世に下賤より這ひ上つたる器量人、しかも將軍家無二の出頭として内外一切を片
 手に握り、譜代外様の大小名を手鞠に取つての振舞は人なき境を行くが如きの大膽不敵さ、
 今こそ僅に五萬石なれど、これさへ四年以前は柳澤彌太郎といひし三百俵の小身者より取上
 けたる早業、あの分で押行かば十萬石は瞬くうち、やがて天下の權を擱んで竟には千代田の
 城を指頭に振廻さんも知れぬ男、かつは氏素性もなき一代身上とて其身また傳來の舊臣なけ
 れば、しきりに耳自を馳せて草を敷寝の浪人中より人を求むる眞最中、これこそ汝がために
 幸ひの舞臺、さらば兄の源太は江戸に出でて柳澤が手に就き、天晴れ一期の腕を試して見よ、
 おのれ微賤より頭をあけて天下の侯伯を逆撫にするほどの柳澤、よもや人を見損じて玉を瓦

と誤るの盲目ではあるまい、されどこゝに一事、汝が腸に刻んで覺悟すべき一大事は、かれ美濃守あのみ、無事に上らば太平の智者また治世の賢者とも謠はれんが、一朝もし武運つきて逆境に立たば忽ち石田三成が亞流、根が拾ひ物の身代を抛つて如何なる大賭博うつやらも知れぬ男、いや必ず打つべき男、さればかゝる場合、汝も主を扶けて諸共に一死の覺悟、よいか、よいか、たとひ魔界の鬼となつて果つるとも、知己の恩を忘れ武門の契を捨て、眼前その場の難を遁るゝな、よいか、しかと善いか、士は自己を知るもの、ために死する本文こゝぢや、よしまた逆境に立ちて死生の境に出逢はずとも必ず敵の多かるべき柳澤、平生その邊の覺悟も大事ぞ、以上は父が汝へ饒別の一言、ゆめ忘るゝな」

父の庄左衛門、しみぐと兄の源太に言ひ聞かせし後、また弟の左門へ膝ふりむけて容を正しぬ、左門、左門、汝が身を起すべき道筋に就いては、この父また別に言ひ聞かすべき分別の一

言あり、兄の源太には今いひし如きの次第、なれども汝は武士の兩刀さらりと捨て、素町人となれ、や、その驚愕、その怪しかる俄の眼配、道理ぢや、無理でなし、さらく、以て無理でなし、由緒ある武門人血筋に生れて二十一の今更、兩刀抛け捨てよと勸むる父の一言、まして兄を武士道の首途に見送りながら現在肉身の弟を町人になれとの一言に、その怨めしき顔色、神もつて至極の義なれど、左門よく聞けよ、これぞ却て父が子ゆゑに肺肝を碎きし遠謀深慮、その仔細は聽て言ひ聞かさんが、まづ今の世に見渡すところ、日夜に小判の音を響かして出船入船の絶間なき日本一の大港は攝州浪花、その浪花津、世にいふ大阪の中央に淀屋とて日本一の長者あり、町人ながら氏素性、源家以來に傳へし八幡侍の家筋、しかも四海の富を一手に握つて黄金の雨を降らすも心のまゝなる全盛華奢、これを汝が舞臺に踏んでの一活動、左門なんとぢや、兄は東の江戸に飛鳥おとす當世武門の冥加もの柳澤を擒とし、弟は西の浪花に古今無類

の長者たる淀屋を擒とし、東西に分れて白刃の勢ひと算盤の珠とに兄弟が活動鹽梅を、この街道の中の町に蟠居して右を見また左を見つ、老の慰み、は、は、は、いや面白いぞ、面白い、おもしろい、すんと面白い事ぢや」

其四

子を思ふ親の一念に、父の庄左衛門が其身を浮世利害の外にして、しづかに十餘年來の胸にた、みし分別の置どころ、兄の源太には武士そのま、の首途に江戸の柳澤美濃守を説き聞かせ、弟の左門には兩刀こ、に抛け捨て、浪花の長者淀屋が許に身を寄せよとぞ言ふ、なほも弟の左門がために老の膝す、めて、言葉を盡しぬ、そもや武士と町人の尊卑輕重は三尺の童も口に叫べど、そは唯その目に見たるばかりの輕重尊卑、されば武士も武士によりけり、町人も町人によりけり、しかも太平無事の今、つらく思ふに、なまくらの大小を弱腰

に差そらして青天白日の下に大道を横行する奴等が、一たび家に歸つて長家住居の妻子と顔を合せての青息吐息は、まだしも、わづか一枚か二枚か身分の上に向うてさへ草葉の蔭に泣音も得立てぬ機織蟲同然、もし主の御前に罷り出でば人間の活動いづれにある、首も脛も疊の目に埋めての三拜九拜、よし運に叶うて一足飛の家老用人になればとて、元來が新參の本杉いまだ根は淺うして四方の風に倒れ易く、かつは當今世間しらすの大名氣質とて、へろくと奥の裏方にのみ這ひついて自己が住む城池の要害も辨へず、手飼の狎猫いたづらに肥えて廐の馬の骨たかく、秘藏といへば玩弄の器具に代へて刃りに臣下の人命を斷つ白痴さ、されば斯る世に魂魄ぬげがらの殻大名を主と仰いで生涯を糞土に終らん事、そもや生きて何の面白味がある、三世五世を傳へて譜代相傳の臣家ならば遁れぬ義理の因縁もあれ、今あらたに五體を整へて泳ぎ出さんとする天晴れ男が、たい兩刀さしたさの奉公沙汰、さりとては無

分別の至極、左門なんとちや、もし兄の源太にす、めし柳澤美濃守が如き大名なほ外にもあらば、汝が兩刀こゝに捨てよとは言はねど、あれほどの大名は當世たゞ美濃守一人、されば徒らに參觀交代の道中筋を飾る行列人形となつて僅の飯粒に首骨を繋がんよりは、あはれ日本一の大町人が身代に操り糸を引ッかけて見よ、今の當主の淀屋辰五郎と聞えし男、そもくゝいかなる者かは知らねども、天下の諸侯が知行を質に取ッて證文手形と引替に小判を借すほどの勢ひ、もしこの勢ひに乗じて胴骨しかと押据ゑたる曲者の一活動あらば、名こそ町人なれ、いはゞ太平の世の矢玉を倉庫に積ンで大名小名の搦手より隙間なく打入るも同然ぢや、なう左門、いかに面白いぞ、さりながら日本一の長者と諡はる、ほどの大家には、また祖先傳來の家法さまゝあつて、流れ渡りの浪々を俄に拾ひあけんこと、なかゝむづかし、まいて其大身代に操り糸を引ッかけん事、なほさら以ての難事ながら、この難關を斬抜けて

淀屋の棟木に喰入るべき工夫は、左門、汝が腕の試し場所、なまなか今この父が教へて臨機應變の活動を妨げんよりは、一切すべて汝が分別覺悟次第、されば以上、兄の源太が武士そのまゝの姿を賣ッて江戸の柳澤に入るよりも汝が兩刀すて、浪花の淀屋に入るこそ却ての骨折業、心得たか左門、もし西と東に兄弟もろとも志望を得た曉に、この父なほ生きてあらば老の思ひ出これに増すものなし、よし死して草葉の蔭の骨になるとも、満足過分この上やあるべき、やがて五年か十年かの後、互に身を立て、の上の兄弟會合、いかに面白からうぞ、なれども兄弟に言ひ置くべき一事、柳澤は別して下賤より起りし俄大名の早業出世、まして此上の志望いよく大なれば萬事の寛活大氣に隨ひ金銀の入用も他家他門の三倍五倍となるべきは必定、ついで天下の出頭たる柳澤ほどの太腹大名に金を賈すべきもの凡そ日本國中に誰かある、その義は竊に淀屋へ申し込むべき事これまた必定、源太、左門、兄弟とも大事

の覺悟、こゝちや、たとひ其時その場合、兄は柳澤の使者となり弟は淀屋の名代となつて膝つきあはしての談合ありとも、必ず互に心を曲ぐるな氣をこらして油斷すな、おのゝ主を大切に男を立て、争ふべくば飽くまでも争へ、肉身の兄とて用捨無用、肉身の弟とて用捨無用、二人とも父祖三代首骨かたき横山庄左衛門が子なるぞ、私に手を取つて酒酌み交すとも、みだりに主の本城あけ放して袖の下に言葉を通はすな、よいか、しかと言ひ聞かしたぞよ、

其五

東海道五十三驛の中央、東に天龍川の大流あり、西に荒井の番所あり、されば上り下りの旅客の足の歩行おのづと落合うて、草深き田舎ながらも織るが如き往來の中の町に、參觀交代の諸侯は固より有司奔走の旗下は更なり、さては絶間なき大小名の家來、馬といひ駕といひ草鞋の紐の砂塵埃、もの、七分は武士で持切る街道筋を幸ひ、かたぶく門の廂際に杉の太板

うちつけて墨くろくくと筆太の書體みことこに、

黄金二百枚の甲冑を枕に致し候うて、其日の一升米を求め兼ねたる獨身の浪宅に飢死仕候武士の有之候事は、近來き、及び候へども、我等いさ、か仔細あつて其武士の心底を譽め申候事なりがたく候、就てはこゝに秘藏傳來の武具を賣却いたし度く候間、この門前御通行の誰様に限らず、もし御入用の思召も御坐候へば、何卒御一見下されたく候、

- 一 紫威の大鎧
 - 一 槍
 - 一 刀
 - 一 脇差
 - 一 箭の根
- 元祿名物男

- 一 著
- 四 筋
- 二 腰
- 三 腰
- 五百餘

右之通りに御坐候

但し大名衆に御坐候へば拙者おもはくの代金より三倍増に申受けたく候事、

但し旗下衆に御坐候へば拙者おもはくの代金より一倍半増に申受けたく候事、

但し主持の御家來筋に御坐候へば拙者おもはくの代金にて賣拂ひ申すべき事、

但し浪人衆の御所望に御坐候へば拙者おもはくの代金より三割を引き申すべき事、

以上

横山庄左衛門源義行

商賣の手違ひより入らぬ無用の小道具を賣こかす町人さへ、そつと人しれぬ内證の云々、外聞を憚るが世の常なるに、いかに落魄れたればとて、あらう事か、武士の浪人が先祖傳來の鎧兜、さては刀脇差を賣るに往來たえざる街道筋に木札を立て、あの墨くろくくと大文字、しかも自己が姓名まで筆太に書認しての恥しらすといへば、いや、いやくさうであるま

い、買人を選んで大名と旗下に差別を置き、主持と浪人の所望に代價の高下を分けし心底、なか／＼思ひきつたる仕業ちや、利慾の念が太うて膽魂の細い奴等になるべきことか、當時は麻の社杯に金銀づくりの大小さしながら心は花街の亡八に等しく、人の婿入嫁取さては地面家作を取持ッて小判をいたゞく世の中ちやと浮世さま／＼の批判とり／＼、街道の上り下りに旅人の足を停めぬ、

弓は袋に槍は鞘、いかに太平無事の世なればとて、流石に日本一の街道筋、日夜たえまなく往來ふ武家武門の中には、おもはず眼を張ッて庄左衛門が木札を仰ぎ見ながら、懐中を探ッて迎もの事と舌うち鳴り無念の顔色あり、なまなか一見しての上もしや代價に足らずば我身の恥辱かつは賣人の手前も氣の毒なりと、のこり惜しげに門内さし窺いて過ぎ行くもあり、天晴これほどの男道具を賣り飛ばさむとするには、いづれ深き仔細のあるべき筈、さりとは

物の哀れの底よ、他人事ならず盛者必衰の道理、平生の用意専一と悟り顔に振返るもあり、
 ながの道中に徒然の一興これは面白し、書認したる品々を戯れに見て冷かしくれんと思
 ふ不敵者も、書體の美事さと文句の一癖あるに何とやら小氣味わるく、しかも窓越に主人の
 庄左衛門が面魂を見れば霜降る鬢に凄みを添へて兩眼かゝやく老兵の隨、おもはず首を縮め
 て君子あやふきに近よらずと遁け出す徒輩もあり、
 さればこの木札を建て、より、たれ一人の入り来るものもなき七日目の晝ごろ、外様か譜代
 かいづれの大名にや、ばたりと門前に行列をとゞめぬ、

其六

親心いづればあれど、わけて年久しき浪々の枯れたる宿に母もなき男手鹽にかけて育てあけ
 たる兄弟二人がため、父の庄左衛門が肺肝を碎きし多年の分別、こゝに兄の源太は江戸の柳
 澤美濃守を規はせ、弟の左門には浪花の淀屋を説いて、はや西と東に首途を送る今となつては
 家に持傳へし甲冑も武具も草葉の老の我身に殘して何の用なし、さらば差當る金銀に代へて
 前途の遙けき子供等がために浮世の方便を安らかにせんと、門前に建てたる一札の賣却看板
 すでに七日に及べども、一人の入り來つて談合するものもなきに、庄左衛門おもはず嗟嘆して
 あはれ淺まし世の中ぞや、三百の諸侯、八萬騎の直參これに附隨ふ幾萬の武士が日夜往來の
 其中に、目を持つ男はなきか心ある徒輩はなきか、茶の湯の小道具さては無用の玩弄物、第
 一に生きたる美人の面をか、けて賣るならば、忽ち門前に市をなして競ふべきに、
 をりしも七日目の晝すぐるころ、いづこの大名にや行列はたと門前にとゞめて、一人の武士
 しづかに入り來りぬ、うたのみ申すし
 いざや世に出さむとする兄弟の身の上、此後いづこの里いかなる人に面を合さむも知れねば

武士が武具を賣る取次挨拶はさせまじきぞと、かゝる時にも子を思ふ庄左衛門、みづから立出でて慇懃に迎へぬ、

「これは誰様に御坐る、御用の筋は」
「餘の儀でも御坐らぬぢや、只今手前主人、馬上にて御門前を通行の砌、ふと一札の表に目をつけられ、御差支さへなくば一見いたし來よとの儀にて、まづ拙者推参いたした」
「これはくゝ何とも以て、浪々の果敢なき體たらく、恥入る次第には御坐れど、聊か仔細あつて斯る始末、いざ御一見くだされたい、目錄の品々は彼方の一室に」
「さらば、此ま、御免なりませ」

目色をもて兄弟を背門の方に退けながら、庄左衛門しづかに其武士を一室に誘へば、そこに飾りたてたる紫裾濃の大鏡、まづ兜より小手脛當に至るまで、をどしの絲の色艶、札の鍔の端々、大袖小袖草摺裾金物、さては總角の結び目にも心をとめての穿鑿、やがて刀脇差の小

道具より無銘在銘とりませでの鑑定、また鎗の穂先より中身の鐵氣、數ある矢の根を兩の掌に拗ひあけて無言のまゝ、の腫を凝らしぬ、

あるかぎりの武器いちくゝ見終つて後、禮を正して主人の庄左衛門に向ひつゝ、
「いづれもくゝまことに結構の御道具、かゝる品を俄に御拂ひの御心中、たい察し入る、ついで以上一切このまゝ、申し受けたし、早速ながら代金の儀は如何ほどで御坐るな」
「お言葉いたみ入る、拂ひ料の次第は門前の一札に認め置きましたる通り、御道中の體にて歴々の諸侯方と見まらするが、そもくゝ御主命に依つて御求め下さるゝや、但しまた御身様の御所望で御坐るや」
「主命で御坐る、思召の料に三倍増は固より承知の上」
「しからは黄金六十枚、四百五十兩を申し受けたう御坐る、拙者おもはくの高は黄金二十枚、とりも直さず百五十兩で御坐れば」
「いや三倍増にしてからが案外の下直、それにて宜しう御坐るか」
「かくても武士冥利、武

器を賣拂ふに餘分の利益などは念頭に御坐らぬ、たゞ差當つて二百兩内外の入用、幸ひ諸侯方の御所望に依つて拙者おもはくの代金よりは過分に存じまするぢや」
 「さらば確と御約定申す、おつて後刻夕景、今夜の本陣より引返して再度の御意を得まする、ついでには門前の一札早速ながら御取退け下さるやう、手前ことは柳澤美濃守が家來に川田大助と申すもの」
 「や、柳澤侯、あの美濃守様であらせらる、か、これは、思ひもかけぬ事、儲はや世の中は」

其七

武家武門が日夜の往來に織るが如き街道筋を幸ひ、差當る眼前の恥辱を忍んで重代の武具を賣拂はむとする涙の底には、おのれやれ、老の我身は此ま、人しれぬ草叢に埋もれ果つるとも、天晴子供等を世に出さむとの用意金、しかも兄の源太には當時三百諸侯のうち柳澤美濃守を隨一の器量人として奉公させむ工夫の折しも、七日の間に誰一人の買人もつかず、七日

目の今日ぞ始めての買主、そも、何人と思ひきや其の柳澤美濃守と聞いて、流石の横山庄左衛門はツと胸をた、きぬ、

賣拂ひし武具の代金を兩分に割つて、西と東に兄弟を旅立させむと思ふ矢先に、幸ひの買人を柳澤とは至極の重疊、兄の源太が他日をも待たぬ運命の吉兆、さらば今こゝに武士が老恥しのんで金に代ふるの用なし、弟の左門が分だけは別人に賣拂うて、兄が分は甲冑一著このまゝの手土産に、父が附添ひながら今夜の本陣へ仕官の念を訴へくれむか、いやまて、俄大名として當時出頭隨一の權者に浪々の白髪頭が直接の推參は聊か憚りあり、さらば懸ての夕暮に代金持參の川田大助とやら、人品といひ年輩といひ且は門前一札の表を見て忽ち萬事の鑑定約定を命ぜらる、ほどの重用人、この人に念願うちあけて推舉を頼まむか、いやまて、おもはぬ時の僥倖を得手に取つて父が附添ふ道中旅窓の押掛業は、いつまでか源太の行末に街道

拾物の憂名や人に唄はしめむ、さらば何とせう、あくまで此ま、知らず顔して武器を賣拂ひし後、其子とも名乗らず、行列の影を追うて江戸に下らせ、儲あらためての志願を遂けしめむかと、平生は物の分別に迷はざりし横山庄左衛門も我子の爲に思はず腕を組み眼を閉ぢて思案とりくの門口に、はや日は西に傾いたりけむ約束違へぬ川田大助、御免なりませとて入り来りぬ、

庄左衛門も今は思案の寸暇なく、慇懃に迎へて手づから葦茶の馳走ぶりや、これは、此方より品物持参いたすべき筈のところを、かく見苦しき浪宅へ重ねての御入來、いたみ入りまするぢや、御使者がらと申し一段恐縮の事、「先刻の委細、手前主人へ通じましたるところ殊の外に満足の體、ついでに御約束の代金として黄金六十枚分、乃ち金四百五十兩、別に又この一包は酒肴料として主人より當座の進物、あしからず思召されて御入納下されたいし

「草葉の浪人が明りに歴々の諸侯方を見かけて三倍の押賣沙汰、それを何とも仰せられず其ま、に御求め下さる、のみか、別に一封の賜物、いやはや、有難きまで忝さの重疊、たい恐れ入りまするぢや」「御挨拶の段々は委曲主人へ申し通じまする、時に、これは手前一存にて何ふ次第、異な事を御聞き申すが、儲かく浪々の一軒家に、あれほどの武器を御所持の上は、定めて深き御由緒あるべき筈、また御賣り拂ひ遊ばさる、についても、何か深き御仔細のあるべき義と存するぢや、かつまた先刻一見の砌、右か左か確と覚えねど鎧の片袖に札數の二三段ばかり聊か色合の變せしところは正しく血汐を洗ひ落してより五十年前後と思はる、のみか、草摺の腰糸に處々の修繕、裾金物の三箇四箇が際立って摺れ損じたる鹽梅、元來あの鎧は一たび戰場に出合ひ申した筈、その節に兜ばかりは取残して召されざりしものと見受けた手前眼中、狂ひましたかな、年數と申し織工合と申し、兜の八幡座の裏面に浮張したる織物

の紋所に、唐糸を以て大桐の縫取は、傳へきく太閤殿下より其頃の諸將へ下し賜はつたる名物ぎれ、ついでに當時その織物拜領のうちにて横山姓を名乗らる、御人は聞き及ばぬこと、たい承るは拜領の一人大谷刑部殿の御内に横山彈正と聞えし古兵のありし由、されば關が原の一戦に刑部殿より譲られたる武具にて、その横山彈正殿の御子孫では御坐らぬか、もしそれならば、手前主人美濃守あらためて今夜の旅宿へ御招き申せとの儀で御坐る、御身様のため決して悪しからぬ事、この川田大助が受合ひ申すぢやし

其八

いかに武運に叶へばとて、いかに天下取の籠に逢へばとて、今この太平無事の世に當つて三百俵の小身者より瞬くうちに五萬石まで取上げたる器量人、なほ此上に兩の鬘を伸して大空に舞はむとするの勢ひ、どれほどの男なるかと世上の批判とりくくなる柳澤美濃守、急御用

にて京都へ使者の歸途、この東海道を江戸への道中、今夜は見附の宿を本陣として休息の一室へ、かの中の町の浪人横山庄左衛門を呼び寄せぬ、川田大助に引かれて入り来りし庄左衛門を見れば、尾羽うち枯せし浪々の老の身に似もやらで定紋の麻社袴しかと著けたる用意のほど、さては境涯に過ぎたる美事の大刀を取つて柳澤の家來に渡し、おのれ自から小刀を櫛の鬘際に差置きながら、するくくと無腰のまゝに臆する顔色もなく進み出でたる體、流石は名士の流れ、天晴れ心ある武士の成れの乗ぞと美濃守さうらに一入うちとけて言葉をかけぬ、加之も祖先の功に依つて今當世に賜ぬけがらの殼大名ならねば、いたづらに權威を弄せず華奢を好まず、すべての萬事に簡略を旨として、たゞ打見たるところは凡そ二三千石の旗下衆を學べども、眼ざし面魂の一癖は隙間なく百萬石の國司にさへ喰つて掛らむ不敵さを示しぬ、

「これは中の町に詫住居の浪々もの横山庄左衛門め、今日おもひがけなき御懇命に甘へて、かくの推参、憚りながら益々御壯健の體を拜して、天下御用の御ため謹んで御祝儀を申し上げまする」や、近う來られい、柳澤美濃で御坐るぢや、今日通行の砌、ふと門前の一札いかう面白う心得て、家來を差遣はしたるところ早速の談合調ひ、満足に存する」はッ、その砌には、また格別の賜物を下し置かれて「いや、その挨拶は無用の事、さて聞き及べば古今の御一人太閤殿下が遺傑と唄はれし大谷刑部殿の身内衆、横山彈正の孫さうなが、關が原の一戦以來父なる人も御身も始終浪人で世を送られしか、但し其間に主取せし事はなかりしか」關が原の戦鬪に祖父の彈正が姉婿の刑部もろとも一死の曉、著せし甲冑を後の記念と家來に持歸らせし砌、父に當る者やうく十一歳、乳母に抱かれて勢州龜山在に人となり、その子の拙者に至るまで全く草を敷寝の素浪人、をりくは由緒をたづねて知らる、諸侯方の御招き

を蒙りしが、もはや世に心なき身の唯そのま、」なるほど、大事やぶれては名士三代みだりに他人の手首を握らずとの本文、さもあらん、なれども、三代の今更、さほどまで由緒傳來の大切なる武具を賣り拂はんとの心體、これは如何に、何がためぞ、美濃守は元來氏も素性もなき微賤より運に叶うて這ひ上った一代身上、されば武功感狀さへ辨へぬ若年者として講學のため、平生より心掛けて世の見聞を求むるぢや、天晴れ名士の末に生れたる老體の覺悟が聞きたい」はッ、まことに恐れ入ったる御言葉、さらく以て申し上げべきほどの義あつて斯くの仔細に御坐なく、たゞ取傳へたる愚の一念に孫なる拙者まで父祖三代の志を致せし上は、もはや四代目の愚息どもを何卒、せめて人らしき世にあらせんための工夫、さりとして浪々うちつゞきし者の子と生れて、今更何處に蔓も根も根もなき義に御坐りませれば、あはれ浮世の浪風に思はぬ楫を取損ねんこと惘然に心得、かくは重代の武具を賣り拂ひましたる次第、また

門前一札の心底は、たゞ金銀にのみ買取られて淺ましき者の手に流れ渡るも無念心外と存ぜしが故、「いや親心、あはれの事を聞くぢや、じたい子供は幾人で年齢は」「母なるもの幼少に失せて男手鹽に兄弟たゞ二人、兄は源太と申して今年二十七、弟は左門とて二十一に相成りまする」「兄弟とも手許にか」「兄の源太めは昨年の夏、すでに江戸表へ下らせましてより未だ何の便りもなきは、武運に遅くて善き主取もないがため、なほ浪々いたし居る義と心得まする、只今の手許には弟の左門、此奴は聊か仔細あつて武士の兩刀さらりと捨てさせ、京大阪の邊に追ひ上して素町人に致さんと心得、されば兄よりも別けて金銀大切に存じ、かくは涙を呑んで重代の武具を賣却の仕義に御坐りまする」「はて、それは面白い分別ぢや、兄は其まゝの武士で身を立てさせ弟は有徳の町人に仕立て、世を安樂に送らせんとは、さて残る老體の御身は何とするぞ」「拙者ことは前にも申し上げし如く、固より草叢に埋もれて螢の宿ともなつての

本望、愚息どもが身に添うて孝養せんと申せしを吐りつけ、わざと斯くの體に御坐りまする」「それほどの心體、もはや動くまい、さて兄の源太とやら、江戸にて主取いまだないとあらば、我等に得さすまいか、名士の末葉、美濃守おろかには扱はぬぞ、弟の左門とやら町人となる身に川なし、たゞその兄を我等に得させよ、異存はないか」「はッ、まことに重ねて身に餘りし御懇の仰せ、なんとして異存の御坐るべき、さりながら兄の源太奴は聊か世の常に變りし浪者、自己が心に染まずば譬ひ大國の家老支配に召出さるゝとも聞くまじき奴、あはれ今彼奴が居るところさへ存するならば父が言葉として、今日かゝる御恩命を申し聞けんもの」「いや、その骨格なほさら面白い、年齢は二十七、名は横山源太、ものごし風體は」「色白骨太の大男、鬢の毛いさ、か縮んで黒木綿三紋の外は身に纏ひ申さず、紋は左巴、大小は茶絲の長柄に鎧は金の鍬形三寸ばかり、もし御乗物の隙間より御覽せらるゝ事も御坐らば、あはれ

何卒御拾ひあけ下さるべきやう、偏に懇願たてまつりまする。「よい、確と心得た、それほど委細に聞けば、江戸中より探し出すも易い事ぢや、いざ繋がる縁の端に盃せう、我等も道中つれづれの折から」

其九

かくても横山庄左衛門、神もって欺くにあらず唯子を思ふ一念、現在手許の兄の源太を去年の夏に家出せしとて、柳澤美濃守に一入所望の心を起させつ、中の町の浪宅に歸りて受取つたる黄金六十枚、例の四百五十兩を其ま、兄弟の膝前に差置きぬ。

「逆も世に出ぬ生涯の浪々と心を定めて、我は我だけの一生を過すの用意金なほ餘分あり、此後の厨に下男一人を召使うて我七八十までの貯蓄はあり、されば汝等がために今あらためての出世金、兩断に分けて二百二十五兩づ、相渡すべき筈ながら、幸ひ兄の源太が身に取つて

武運の吉兆、おもひし柳澤に思ひもよらず出逢うて、主従の契約たしかに父が取極めたり、人知れずあの行列の影を追うて江戸に立出で、およそ物の二月か三月も過ぎたらんころ、何事も知らず顔して仕官せよ、相手は待ち受けたる汝がこと、もはや舞臺は出来て腕次第ぢや、されば前途さのみの金も入るまじき兄に引替へて、弟の左門はこれより雲霞同然、たえて縁も由緒もなき浪華の長者淀屋に向ふこの首途、しかも兩刀うちすて、町人となる身は猶更の金銀入用、乃ち兄が分を五十兩として左門へ四百兩このまゝに渡すぞよ」

妻子眷族うち揃うて家門繁昌の全盛より、かぎりある日数の旅に馬駕を添へて我子を遣るさへ世の常の親心なんとやら物悲しきに、これはまた身は薄し哀れは深し、幼少より母におくれ浪々の男手鹽にかけたる兄弟が、涙もろとも西と東に別れゆく後姿を、かたぶく軒の柱に

よりて見送る親心いかなるべき、子は互に振り返り振り返りつ、さても世に一人まします
 老の父を此草叢に捨て、の旅路、父は子供の前途に胸を悩まして山河百里の風雨を思ふ悲歎
 兄の源太は黒木綿の三つ紋に茶柄の大小を横たへて富士形の葦笠を携へつ、浅黄地の脚絆
 甲懸旅草鞋、をりしも曉に道芝の露を踏んで東に立出で、弟の左門は心こそ傳へて武夫の種な
 れ今日よりは町人の旅姿、前途いくその志望を布子の袖に包んで柄袋かけたる脇差のみを腰
 に横たへ、紺地の脚絆甲懸に菅の一字笠、空に鳴渡る旅鴉を仰いで我も諸共にと西に立出
 で、父の庄左衛門は右と左に兄弟が行末を祈る心の涙、老の身の脊を門の柱に凭せて流石に
 兩眼を瞬きぬ、

兄の源太は今年二十七の男盛り、うまれついて色白骨太の大兵の柄長の兩刀たばさんで踏み
 出す姿は、見るからに天晴の武夫、あのま、にても當時の侍相場に五百石以上の物はあり、加

之も僥倖さしてゆく江戸の空には落附く檜舞臺も定まりて、もはや彼が腕次第の業、この上
 さらに氣遣ひは無けれど、あはれ弟の左門は生來ふしぎの醜男、たゞ不具ならぬが身の幸ひ
 に今年やうく二十歳を出でしばかりの小兵もの、しかも今更ら俄に思ひもよらぬ素町人
 となりつ、よしあし繁き浪華の空に草の葉蔭の頼りだもなき旅衣、いかに浮世の雨風に曝
 されて幾年つらき憂目や見む、されど父が本心を他日にぞ思ひ合す事こそあれと、其ま、思
 ひ切つて門内に驅入り、一室に膝を組んで我を忘れしが、ふと心附いて窓越に門外の方を見
 れば、兄弟いつしか立戻つて門の柱に身を潜めつ、残りし老の我身を窺ふ體、庄左衛門はら
 くくと涙を流して濕める聲を激ましぬ「やれ不覺の奴等めが、その腑甲斐なき根性骨で何が
 なる、親、親の心づくしを無にする不孝者、き、斬つて捨つるぞ」門外には兄弟が齒を喰ひ
 占めて互に手を取りながらの男泣、兄上さらば、弟、汝も無事で居やれ、さらば、さらばぞ、

西東

其十

そもく我、武士も武士、音に聞えし横山彈正が末と生れながら、二十一の曉に兩刀なけすて、今更の素町人となること、まして現在の兄は其ま、の武道を棄て、天晴れ江戸に赴き、弟の我は斯く淺ましき姿となつて人しれず浪華に向ふ非運の一身、さては固より弓矢神にも見放されたるか、あはれ生みの父にさへ用なき者と捨てられたるか、男をやめて出家沙門となれといはい、朝夕山寺の鐘をつくとも偕おもひ諦めむものを、情なや傳へ傳へし武士道うちすて、俄に金錢の奴となり射利一點の算盤珠に甲斐なき生命を繋ぐむ事、いかに口惜しかるべき、同じ腹からの兄弟ながら、兄には甚く劣りて我すら二目とも見られまじき顔貌、かくまで不

思議の醜男に生れつゝいたるが故、戦國ならぬ今この太平に諸侯の面前は逆も勤まるまじとの父が心か、さてはまた腸まで親に似ず兄に及ばぬ不覺者と思はれたるが故か、母は無し親戚は無し、其の中の唯一人まします老父の命、子として背くべき我ならねど、さても無念や心外や、

兄には幸ひの柳澤美濃守あり、弟の汝には天下の三百諸侯に仕ふべきものなし、さらば慈ひ無用の兩刀さしそらして一握りの端た知行に終らむよりは出船入船たえまなき日本一の大港に聞き及ぶ淀屋辰五郎といふ長者こそ、却て世に思ふま、の振舞すべき至極の舞臺と、しみじみ我を諭し給ひし父が言葉は忘れざれども、我その淀屋の主人となるでもなし、父の命に依つて多年工夫の曉に宿志を得たればとて淀屋の家來同然、山の如き金銀を自在に動かせばとて元來他人の財寶を何とかすべきぞ、兄がために天下の三百諸侯より唯一人の大器量として選

び出せし柳澤美濃守それほどの大名ならば、弟の我身も兄と共に柳澤へ仕官させ給ふべき筈
 さるを我のみ素町人に落して武士道を捨てさせ給ふこと、いかに父が命なればとて面白から
 ず、されば親にさへ兄にさへ逆も武夫になれまじと見込まれたる我、今夜の宿に一書を残し
 て美事なる腹十文字の最後を取ツてくれむか、せめて此世の思ひ出に、
 今朝の首途の其時は、老いたる父をあ草叢に取残して行方も知れぬ旅の悲歎、さては肉身の
 血を分けし兄に別れて復いつの日か逢ふべき心の切なさに、たい何事の思ふ寸暇もなく、涙
 に身を浮かせて道芝の露を踏み出でしが、一刻々々、一步々々、西に向うて進むに従ひ、偕も
 今更ら湧くが如き無念さ、おもへば我身ながら口惜しの成る果ぞ、
 さりながら、子として怨むまじき親を怨んで心を亂し、弟として憤るまじき兄に憤ツて身を
 捨て、たれ知るまじき今夜の宿に、これ見よがしの面あてがましき一死は取詰めたる女童の仕

業なり、いざ此上は思ひ返して捨つべき生命を存らへ、固より親兄に見放されたる一身を我
 に拾うて、心から全くの腸を入替へたる素町人となり、いやしき金銀を無上の本尊に仰いで、
 幾年の艱難を忍び行末の辛苦を打破りつ、町人も町人どれほどの町人になるか、一念の注
 ぐところ一心の凝るところ、すまぬ事ながら父上なほ世にましますば天晴れ御意を得て今日
 の怨みを申し上げむ、兄が此後の取得たる武士道に較べて其時の顔色を見物せむ、さらば日本
 一の長者に仕ふる弟の行末と、日本一の大名に仕ふる兄が行末と、子を見ること親に如かさ
 る父が面前に立竝んで、その時の御挨拶たしかに承るべし、おのれやれ、もはや心を翻し
 魂魄を取替へて金銀財寶を戦鬪の矢玉とする町人に、何の思召あつてか賜はりし一本の脇差、
 まづこれからが小癩の種、えッ、道中すがら猶更ら無用の厄介物た、き賣ツて街道いそぎの空
 腹なりとも肥しくれむ、武士を捨てしからは由緒も傳來も入るものかは、名物の槍長刀は天下

通用の一文錢に及ばずと、こゝに横山左門當年二十一歳、むらくとして大俗世界の煩悩を起しぬ、

其十一

横山左門、兄は武士道そのまゝの花をかざして東に向ひし天晴れの姿に引代へ、現在こゝに弟の我は今更らの素町人として西に追ひ遣らる、腹立まぎれに、生命と壁一重の間際まで悲憤の胸をつきつめて、無念の焼け腹みことに搔切らむと思ひしが、心機一轉、忽ち翻然として氣を取直し腸を差替へみれば、第一まづ腰の此脇差から小癪に觸つて堪へられじと、幸ひの途すがら落松の城下なる見倒し屋に惜氣もなく叩き賣つて人しれず冷かなる笑を含みぬ、これによし、これによし、いざ此上は左門といふ名さへ禁物の武士めいたり、さらば改めて左助と呼ばむ、今日よりは全くの素町人たる此の左助當年二十一歳の醜男が、日本一の大港に向

うて行末の運命いかなるべき、

その夜は舞阪に宿を求めて枕につきしが、終夜寢られぬまゝに性來このまぬ酒を呼んで、とろくろと曉方の夢さむれば、はや門外の街道筋に馬を追ふ鈴の音ちやらく、いそぎの旅の駕を遣る小唄に促されて立出でつ、落名の海上一里の渡船に桑田碧海の諺人の身も斯くぞと今更らの心地して、荒井の關所に思はぬ時刻を潰され、さらに浮世の行路かたきを思ひくらべぬ、

これより浪花は六十七里の道程、白須賀、二川、吉田、豊川、御油を経て赤阪の旅寢に二日路、あくれば藤川を過ぎて男川の流れに影をうつし、岡崎を過ぎて矢矧の橋に今の我身を慰めつ、其夜は池鯉鮒の宿、四日目は三州と尾州の境なる今岡芋川を経て鳴海より宮に出で、をりしも順風に帆をあけて七里の海上を射る矢の如く桑名の岸に著きぬ、

これより京へ三十里、京より伏見の夜船に夢を上げて浪華へは一息の間ぞと、五日目の東天に桑名を立出で、四日市を経て石薬師、はや庄野の入口、高宮の村外れまで来かゝる折しも路傍の松影より唯ならぬ人聲の聞ゆるに、左助おもはず歩を停めて何事ぞと見れば、樹の間もれくる夕陽を浴びて武士二人、はや大刀の柄に手をかけつゝ、血眼となつて睨み合ひぬ、腹から素町人の種なれば、やうく二十歳の初旅に思ひもよらぬ人斬庖丁の叩き合を見て、忽ち腰をぬかし街道の馬糞に埋れて這ひ廻るべきを、元來の不敵に生れたる左助、一文字笠の下より兩眼じつと定めて見物する體、加之も志を翻して武士禁物の冷かなる目には、道中の徒然に無價で見える本歌舞伎これほど安いものはなし、一人は三十前後の膏ぎつたる大兵肥満、一人は二十五六の肩骨いかりし岩疊男、互に血氣の足踏み鳴らして大刀の反をうたせながら、何事をか争うて今や打込まむとする體に、左助いよ

く面白く、我を忘れて街道の木の根に腰うちかけ、しづかに見るとも知らぬ彼方は必死の覺悟、やつと掛けたる聲もろとも抜放つて斬結びし後は、忽ち電光石火の勢ひに入亂れ飛廻つて、煙草一服の間に紫の血煙り立つや否や相討の倶斃れ、ばたりと音して左右の草の根に蟲の息とぞなりぬ、

早い人の生命、露とは儲よくも言うたりけり、今の今までは鬼拉ぐばかりに見えし大男、しかも兩刀いかめしき武夫の眞盛りを、一瞬の間に叩き散して忽ち野末の骸とぞなる、あはれ家には親兄弟もあるべし身には妻子眷族もあるべきに、何が心に濟まざる俄の斬合ぞや、かゝる人なき街道脇の松原に唯二人立對うての必死は、必ず雙方得心づくの決闘なるべし、もし主持ならば主のためにもならぬ私闘の犬死、もし浪人ならば志望ある身の猶更ら返らぬ不所存者、もし金錢ならば何れ麥一俵の價になるやならずの事、たゞ張切つたる片意地に血

迷うて可憐ら一命を冷飲草履より心易けに捨てたる奴等、これを武夫の花とは、今の我目に
 何の白痴ぞ、さるにても武士は禁物いよく禁物、捨つべき生命は骨を粉にして惜からねど
 生存ふべき生命は醫者と首引しても保つべきが本懐南無彌陀佛と唱へて立ち上りつ、足を
 早めて庄野の宿に入らむとする前途より、またもや武士六七人おのゝ息を切つて馳せ來り
 つ、左助を見るや否や問掛けぬ、この前路で武士二人の決闘を見さりしか、いや存せぬといへ
 ばはて不思議、この道ならでは外にない筈、おくれて死なすな、ともかくも追掛けよと砂煙を
 立て、韋駄天の如くに馳せ行く後姿、左助おもむろに振返つて、さては今の犬死殿が友朋輩、
 あれも遂には武夫の花ちや花ちやと冷かに笑うて過行きぬ。

其十二

きのふは高宮の街道脇なる松原にて、いづこの不所存者やらむ、おのが生命を三文とも心得

ざる白痴殿の決闘を見て、その夜は庄野の宿に膳の上の獨酌を味ひながら、あはれ今ごろは
 先刻の相討に倶斃れの亡者が六道の辻にて前後を争ひ、またも三途の川端で掴み合をや始
 めけむと、無常迅速如露如電、なほさら武士は禁物の心易き枕について、六日目の今朝は東
 天の鴉と共に立出で、龜山關、阪の下、鈴鹿峠も越えて土山の市場あたりより一入道を急ぎ
 つ、水口に著きぬ、

水口の新町に宿を取つて夕餐を急ぎながら、傳馬町本町足輕町き、及べど今みれば流石に知
 らぬ昔も懐かしく、馬場前の松原を横ぎつて、をりしも背月の影に八幡宮へ詣でつ、みづか
 ら心に念じて伏拜みぬ、そも、當社は大谷刑部が武運祈禱の本願所、關が原一戦の首途には
 兜の鍔形を取つて奉納せしとき、其時其場に鎧の袖印を剝いで伯耆安綱の短刀を包みつ、
 納めたる一族横山彈正が四代の孫、今こゝに左門とて當年二十一歳、俄に兩刀なけすて名さへ

左助と改ため素町人となつて浪花に上る途中、あはれ祖先に等しき武功感状は入らぬこと、たい願はくば生命あるだけの定命を無事に守らせ給へ、いざ今の我身には兜の鍔形さては鎧の袖印名刀よりも大切の矢玉とすべき小判三枚、謹んで納めまるらずと、懐中の胴巻を探つて社前なる賽銭箱へ投込みぬ、

七日目の朝、水口を立出でて北脇村、いづみ、田川と三雲の境なる村外れの藪影に野伏りどもの小屋三四軒、蟹は甲羅に依つて穴を這入るばかりの席戸をかけならべつ、隙間より立上る薄煙りは偕も何をか炊ぐやら、しきりに笑ひさゝめく聲の漏れ聞ゆるに、左助おちはず足をとめて眺むれば、西の端なる破席かきあけて歩み出でたるは白髪頭の乞食、老の腰やうやう竹杖に踏伸して見返る後方より、ついで六七人の年若き非人ども、や目出度いぞ千秋樂萬歳樂、目出度いくと踊りながらに立出でぬ、中には缺徳利の腐れ酒に酔ひ過ぎて千鳥足の瘦

狸々もあり、

左助あまりの不思議さに立寄つて見れば、かの白髪の乞食ことし八十八の賀筵とて、十二の曉に物貰ひとなりしより此年まで七十六年の間、煩うたことなく泣いたことなく、一日もの、貰ひ外せしこともなき大の幸運者、しかも流れゆく先々の野山で女乞食に戀を仕かけられたる冥加の数は凡そ六十何人、今この手許に生まれし子と孫とを呼び集めて十三人、悪痘瘡の流行りし歳にも一人の缺けたることなく、天晴れ達者に育つて一家一門の繁昌この上なしとぞいひぬ、

やれ面白し人間さまの浮世、きのふは立身出世の風上ともいはる、可憐ら名聞の武夫が人しれぬ草叢に生命の捨合を見て無常を感じ、今日はまた犬畜生に等しき乞食非人の萬歳樂を聞いて心を伸ぶ、幸ひの通りが、りぢや、その白髪頭を壽き祝ふぞと、腰巾着より青銅三

百文つかみ出して抛け遣れば、おもはず一齊に踊り狂うて足踏み鳴らしつゝ、そのうちの三人が石部の宿の此方まで送り來りぬ、

固より急がぬ旅の一人道中、その日は草津に宿を求めて、八日目は旭に近江富士を見返りつゝ、瀬田のから橋うち渡り、けに汐ならぬ海の景色に心を洗ひ、大津の昔に滋賀の都を偲びて追分、四の宮、山科、奴茶屋、藪の下、日の岡、けあけの清水、粟田口、いづれも名のみ聞き及びし名所舊跡を経て、これぞ王城の地と、まだ日は高けれど三條小橋の宿に草鞋を解きぬ

其十三

さす方は大阪なれど、今こゝに急がぬ旅の獨身、まことに京は都の景色あくまでも見物しておよそ半月あまりの逗留に残る限なく、いざとて伏見より三十石の夜舟に乗りぬ、さて今宵の夢さめし曉方には、き、及ぶ八軒家に足踏みかけて我身の運命いかならむ、ま

だ見ぬ浪花のよしあし胸に浮びて、さすがに敵味方わけめの心地せられぬ、

江戸の飛脚、長崎の唐物買、大阪の米屋、堺の兩替屋、近江の蚊帳賣、奈良の具足屋、高山の茶筌師、丹波の百姓、鹿島の事ふれ、出家山伏醫者旅役者とは、けに乗合舟の人さま、を唄ひし其中に、例の左助も振分荷物を枕に三人分の坐を買切りながら、夕暮の空に伏見の町を見残しつゝ、淀の川瀬の水車、さては男山の八幡あれかとはかり橋本を過ぎて、舟は牧方に差かゝる折しも、諸國うちまぜて知る知らぬ旅人の今まで騒ぎし浮世の雑談さつと消えてたゞ艦の方に一しほ際立つ喧嘩の聲のみ聞えぬ、
左助その身を横たへながら空寢入の耳を欬て眼を開けば、まだ前髪の一僕めしつれたる町人、しかも六十ちかき老體を捕へて、左右より血氣の荒男が頻りに猛り狂ふ體、きけば老人が煙草の吸殻おもはず飛んで誤らしとの事なりける、

やい老耄奴、この俺様達を何と見た、横堀の勘太つりがね町の坊主龜といへば大阪三界に隠れもない男ぢや、その男と男が紙一枚の隙間もない併せ面の頬境へ、まだ火の消えぬ煙草の吸殻ふツかけて済むかい、さア挨拶せい、ついでに言うて置くぞよ念のため、もし乗合中の奴等が一團になつて舟底を舐つても仲裁の仕様に依つては、金輪際きかぬ氣の男ぢや、誰でも彼でも敵手にすると、まづ乗合中の目と口を縫うて四方を睨み兩腕まくりあけたる勢ひ、まづては嚇して金にする奸策、あゝ氣の毒や悪い巨蛇に見込まれたと覺りし上は、乗合いよく、恐れて首を縮めしま、誰一人の取扱ふものなく、老人は唯うろく、聲まで震はして謝罪言ま、まづに盡せば、盡すほど猶も猛り立て、斯る事には慣れたる船頭さへ聞かぬ顔しらぬ顔、此奴また八軒家の上り口で其こぼれを袖の下いたゞかむとの心なるべし、左助なんとか思ひけむ、むくりと頭をあけて買切つたる三人分の座に起き直りつ、元來不出

來の面がまぢ一入さらに黷めて喚きぬ、その挨拶人こゝにある、仲裁の仕様に依つて金輪際きかぬ氣の男振は萬々承知の上の仲裁人ぢや、なれども人込の枕頭ばかりで足の踏場もない、憚りながら是から申さうが、儲なんとして御心が済むやら」きくと等しく二人の荒男ふりかへつて、つくづく左助の面上を苦の火影に見渡しながら「人間か化物か、出來損ひの青二歳奴、おのれ等の出る幕場ぢやない、怪我のないうち夢でも見直せ」「いや夢にも飽いた、面の不出來は天生、まづそれよりは差當ること、おぬし等が心の濟みやう聞きたい、じたい何としたりば、其の老人に文句ないのぢや」「や、此奴が、深入して後悔するな」「深いも淺いも覺悟の上の仲裁人を、面の不出來と年の若いに小楯をついての遁口上、は、ア汝等元來き、及ぶ淀川筋の舟蟲ぢやな、あやまつて吹掛けた煙草の吸殻どれほどの焼痕かは知らず、高が三文四文の張膏藥で済むべき事を、有徳の老人と見込んでの難題、さアこの青二歳が改めての敵手

ぢや、腰に脇差ない代り懐中に耳の切れるやうな小判で四百兩か、ツても損のゆかぬ敵手ぢや、喚きながら紫縮緬の胴巻ふしりと舟底に抛け出せば、乗合いづれも呆れて其の大膽不敵に驚きぬ、

されど驚かぬは左助一人、今ぞ俄に驅出しの素町人ながら、音に聞えし武者腹より生れいでたる本性いつしか現はれて、左手をあけつ、老人を差招きぬ、「敵手が變つた、御老體こ、へ御坐れ、そのあとへ拙者が入れ替るし」

其十四

同舟の好誼といふ世諺さへあるに、諸國うちまぜての乗合これほどの人中に誰一人あの老體を助くるものはないか、さても笑止千萬それに引代へて彼奴等二人の胴摺奴いけすり奴、誰彼なしの仲裁もろとも、眼前の相手とは猶更ら以て奇怪至極、この舟ぐるみ呑込たる面つきが痾

癩玉に觸るはと、根が武者腹の横山左助、むくりと起き直つて嘲弄さんぐの上、懐中の胴巻抛け出しての大膽不敵さに、流石の悪黨も何とやら小氣味わるく、聊か度を失うて臆れたる體を見澄し、こゝぞと飛込んで胸倉とるや否や腰の大刀ひねくるべき筈ながら、いやまて今は町人しかも無腰の我、腕節よりも三十六計の奥の手に如かずと、小判一枚そつと人しれず船頭に握らせて何をか耳語きぬ、

左助なほも外面は怯まぬ顔色、さア二人の奴等、さし代つた敵手の此の青二歳を何とするのぢや、斬るか、つくか、金とるか、さりとて隙間もない人込しかも水の上の舟、は、は、は、生れ命までは得取るまい、但し八軒家に著いた曉の業か、それならば汝等より此方から仕掛けるぞよ用心せい、

もし萬々一まことの腕つくとなるにせよ、市井の奴たゞ二人を敵手の働き、何ほどの事ある

べき、九歳の春より二十一の今まで朝夕そのみを業と心得たる覚えの我と、腹の底に高を括ッて悠々たる左助わざと敵手に身を措寄せぬ、をりしも舟の流れ俄に止まりて、守口、守口と呼ぶ船頭の聲をきくと等しく、左助おのが座に入れ替へたる老人に向うて、「やア御老體、もう夜がしらしく、曉ぢや、あと構はずに此處から上らッしやい、此奴等は身が引受けたしいひつ、起ッて手を取り、前髪の一僕もろとも髯をついて追上げつ、一旦抛出したる四百兩の胴巻片手に提げながら、御縁あらばまた逢ひますると、見送りの挨拶までして又もとの座に立歸る風情、さても怖ろしの不敵人と乗合いづれも膽を潰しての見物、二人の悪黨も今更いよく呆れて打守る面上を、左助しづかに睨み下して坐するかと思ひの外の間一髪、手に提けたる胴巻ふりあけて敵手が目鼻の急所ぐわんと喰はすや否や、隙間もあらず足をあけて胸板を蹴飛ばし、身を躍らして苦を跳退けながら岸に

飛上ツたる早業、知るや知らずや船頭この時うんと棹を張ッて、舟は忽ち中流に浮びぬ、助けられたる老人いまだ堤を上り切らざるうち、ついで飛上ツたる左助しづかに振返ればはや舟は漕出して何やら頻りに苦の下より喚く大聲、は、は、は、白痴奴、あとの祭禮ぢや、「これはくゝいづれの御方が存じませぬが、さしか、る老人の災難を御救ひ下されて、千萬お禮の申しやうもない次第、早速舟にて御住所お名前を伺ふべき善ながら、それでは却ッて御勝手わるしと存じ、實は残念に心得ましたるところへ、おもひもよらぬ早業いやはや感じ入りまする」は、は、何が扱つれぐの慰み半分、まづ御老體の御怪我が無うて重疊「先刻より見受けまするにお年にも似合はぬ萬事の御扱ひぶり、さすがの悪黨づれも二言といはさぬ御辯口、第一あの中で始終どこまでも落著いたる御様子の段々いかにも不思議に存じまする、お姿は町家の旅支度なれど」「や、御鑑定、何を隠し申さう、由緒ある武士の家に生れ

し身が、仔細あつて俄に兩刀なけすてたる驅出しの素町人、これより大阪へまゐつて奉公口でも探さうと存するぢや、は、は、は、まだ里が顯はれまするか、これは迷惑、「その御子細は兎も角、始めて大阪への思召なれば、及ばずながら御案内いたしませう、したが今やうやうあけたばかりのこと、幸ひこの守口には兼てより目をかけます出入の者が住宅、それに朝飯した、めた上、駕を申しつけます、これ久三、あの田原屋を叩き起して来い」まづ前髪の一僕を走らせし、其あとより猶も物語りながら歩み出しぬ、

其十五

かの老人に導かれたる田原屋といふは、この守口の家竝に勝れて家庫建竝べたる角屋敷、前髪の小者が先走りして通じけむ、はや主人夫婦は門口に出で迎うての平身低頭、めしつかひの男女が樋で庭掃き竈を横飛にしての大騒ぎ、これは如何にして今ごろ不意の御越ぞ、何の

御用意も致さいで迷惑至極、ともかくも先づ奥へと、前後とりまいての待遇ぶりを、老人は唯うなづいて目禮するのみの體、佐助つらく見遣りて眉を寄せぬ、

これく、大切の御客人つれました、不意に氣の毒ながら、急に洗湯を立て、貰ひたい、この間に出来るだけの料理して下されと自己が家に立歸つて多年の召使ひに物いふが如く、まづ奥の廣室に打通りて慇懃に左助を招じながら、偕あらためて段々の禮口上、それへ主人夫婦も罷り出でて委細を聞き取るや否や、忽ち頭を疊へ摺込んでの挨拶に、左助いよく、眉を

擧めぬ、

湯殿の湧く間、廚の調ふまで、まづ茶を召しませ菓子をと、老人みづから給仕しながら、先刻の御言葉では、御由緒の御武家を捨て、俄に町人とおなりなされた由、定めて深き御子細のあらう事なれど、それは只今こゝで承るに及ばず、第一が差當つて大阪に知己の方は、「い

やく、實は草の葉蔭の由縁も御坐らぬぢや、たい聞き及ぶ日本一の大湊、大阪とばかり志しての獨旅なるほど、流石、武家衆の御料簡ぢや、あまり御立派すぎて町人の出世それではまゐりませぬ、なれども幸ひ、これを御縁として及ばずながら何かの御用に立ちまする、老人ことは、身不肖なれど町家として聊か世間體を仕るもの、淀屋と申す家の支配人に昔は先祖一族の端くれ、今は同姓を憚りて菅屋與左衛門と申し、この年まで何の手柄は御坐らなくても、まづ、淀屋の家を取つては身代の蝦鉦といはれまする身分」

きくや否や左助おもはず兩眼を見張りぬ、はて不思議ぢや、多年うき世の外に身を置いたる父が命として、兄は武士そのまゝ、江戸に行かむとする折しも、念願の柳澤美濃守が行列の影を追ひ、弟の我は町人となつて浪花の旅の今こゝに思ひきや、心に規ひし淀屋の支配人を助け斯くの仕合せ、さては面白し、兄弟等しく東西に立身を争ふべき運命の幕あいたりけりと

思ふ顔色を包んで膝をすゝめぬ、淀屋とは武家にしての天下取も同然、音に聞き及びし浪花の長者、その御支配人とは全く町人の鏡、「いや、鏡も斯う老耄れては曇り勝て御坐りませぬ、ついでには此後大阪へ下られて先づ何の御商賣に御かゝりなされまする」「先刻も申した通り兩刀なけすて、より僅に一月あまりの新参見習、その大阪とて始めての足踏み、まして商賣の何が善いやら悪いやらは、とんと雲霞で御坐る」「それならば猶更らの事、暫時この老爺が御客分として賄ひまする間、毎日々々市中を御見物かたぐ、朝夕ある限りの商賣に御目とめられ、其上にての御分別が肝要」「いかさま一時に百萬兩の損益ありと聞き及ぶ大阪の事、申さば町人掛引の絶間なき戦場へ、初陣の我等分際たゞ一騎驅にては何ともはや、されば辭義に及ばず、お言葉に甘へて暫らくの御介抱御指南たのみまゐらす、やれ、捨小舟の楫を拾うた心地いたしまするぢや」「は、お武家だけに大阪を町人の戦場とは

面白き御言葉、なるほど全くの戦場で御坐ります、小商人の荷擔賣は格別、まづ今時の身代で中分の處では、城の構へぶりが繁華の町を見立て、の角屋敷、表通りを大手といたして軒高く、先祖傳來の看板を馬印に押立て、左右の兩店に開いたる中央を取放し、よせくる商人物買を引つゝ、んでの掛引、横町に家内の者の出入口が搦手、いづれの繩張も得て此口の無用心から落城いたしまするぢや、めぐらす堀の心で朝夕に溝を清めて駒寄石を犇と打ち、溝板は夜々くりびきに致さずとも、人の踏む足音で客の表へ廻るを知るべく、大將分の主人は奥の勘定場で日夜軍法の詮議、家老職の番頭は店の結界を楯に取つて其日の采配をふり、手代は秤目せ、つて油斷大敵と四方に眼を配り、丁稚小者は軍令に従うて縦横無盡に驅廻つての働きぶり、いや全くの戦場で御坐りまする」

其十六

土地の繁昌と花街の繁昌とは凡そ兩天秤で榮え行くもの、野の花の目に美はしいとは拜み搗の米に飽いたる冥加者が年に一度の麥飯を賞美すると等しく、浦に汐くむ海女いかに美なりとも唯その浦での美人が、何として日に十千萬兩の聲を聞く大都育ちに及ぶべき、されば今この時津波うち寄する日本一の大湊を懷中に控へて四海の金銀を搔むしる浪華の繁昌も、もの七分は傾城傾國の夜のありさま、萬燈の銀燭かゝやいて闇なき別世界に味を遣る娛樂は、鴻の池の生諸白を砂漉にして飲む男こそ知れ、西瓜燈籠に火を點せし如き色まッ青に青光りの瘦男が夢にも知るところにあらずとは、親重代の角屋敷を一夜に賣り飛ばしたる浮氣者の金言なりける、

されば其ころ浪花の色を渉るには、六軒町の小夜格子、太左衛門橋の山城宿、瓢箪町の色茶屋、曾根崎の風呂屋女、蜷川の磯せり、いづればあれど別けて全盛の第一は當時新町の大

廓に九軒の不夜城、これに通ふ華奢男の名を大盡と稱して世の中の金の冥加を知らぬ徒輩、それと見るより飛附いて扇子の風に其身代を扇り潰す面々は、うてども踏めども更に音せぬ太鼓の皮の張拔野郎さては祭り所もなくて世に狼狽へたる悪神の末社どもが前後を圍つて、京の卸せ江戸の二挺立こ、には大阪浮世小路の悪所駕と小唄に唄ふ乗物を飛ばして通ひつめ、果は編笠紙衣の末に落ちても夢なほ覺めぬ途方なし奴が、月に何百人、日に幾人、一町内に一人づつは昔より今に至るまで絶えず勘當帳に上ること、逆に取つて思へば流石に日本一の大都會なるほど、擱取の利益あつて掻潰すほどの金銀たしかに満つればこそ、この里の繁昌いよく榮えゆく其繁昌の眞只中を、近來いづこの何者とも知れず、新町の廓の大門ゆるがして男山こ、一代の花と通ひくる大盡あり、人に隠れて磯せ、りの鹿戀女郎に矢を放つ拔圖の功名は知らず、およそ此花街に通うて大盡

といはる、ほどの男は、皆おのれが僭上に耽つて戀の奴となり、あるが中にも音に聞えし隨一の傾城を擱んで我物にせむと思ふ一心、また一つには其身の全盛を人に誇つて羨まれむがため、これ見よがしに入らざる名聞を好んで萬事くわつとしたる雲上の出方を旨とす、されば太鼓末社に取巻かる、本尊は、いづれも何の某と我から名乗かけて一文字に沖へ漕出し、商賣は氣長のこと傾城買は太く短き本文こ、ぢや、よしや紙衣の末に落ちても淋しき時に思ひ出して、我みづから慰むほどの味を遣らば面白からぬと竟には大盡と大盡の鉢合せに戀の外なる意地を張合うて、ひとり喜ぶものは茶屋の亭主と買はる、大夫の身に止まり、三年間つゞくべき軍用金を一年たつや立たずに撒き散らした曉、今更に悟つて去年の敵同志が兄弟分になるもあり、これ等を粹とも通とも譽められた時は肝心の女は他人の物となつて、おのれ等は粹ごかしに押出されたる拔殼大盡、すべて斯る白痴の寄合と瓢箪の川流れ、うきに浮い

て心も空に闇くも飛上りの全盛ともが其中に、たい怪しきは近來何者とも知れぬ例の大々
 盡、花街に顔しられたる至り末社は一人も召連れず、さりとて門外より續いて入込む素人太
 鼓もなく、たゞ替雪駄逆手に持つ草履取一人、誰に由縁の色やらむ紫しぼりの大風呂敷に
 楊弓の道具を包んで持つ男一人、左右には年のころ十三ばかり散切の美童二人つき添うて
 しかも本尊その身の出立は此廓開闢以來の寛活華奢を極めぬ、
 黒羽二重の當世羽織を上繪なしに染抜いたる水車の紋所は闇の目にも際立ちて、おなじ著流
 しに祕し裏の二枚重ね、印傳の染皮足袋に袋打細緒の脱捨草履、面は夜露をふせぐ富士
 形の葦笠に包んで、名物の七所道具を具へたる鮫柄の大脇差を化粧振に横たへ、をりく見
 ゆる腰の平印籠は切金入の高蒔繪、千段葦の細杖よしやがかりについて大門口より練り込む
 風情、まことに歌舞伎役者が見て置いて稽古の種ともなるべし、

其十七

うまれは新町の門外にて素人の腹から出でしが、十六の春より此里に通ひつめて自己が親ゆ
 づりの身代を揉潰し、なほ飽足らいで幸ひ跡目の絶えし伯父御の家庫、在所に田地持つて年
 に百石の取入米ある一人の伯母をも欺し込み、その欺しついでに京と伏見の従弟三人まで引
 導わたして、まんまと首尾よく傾城買より紙屑買にまで引落したる功のもの、うたはる、名
 を横飛の喜助とて、ことし四十二の厄年ながら不思議に何の祟りもなく、越後町の山口屋に
 花山といひし鹿戀女郎の果を女房にして、竟には此里に骨を曝すべき天晴の覺悟、指の股を
 廣げ黄なる聲をあけ扇子ばちつかせて日夜に入り来る大鳥を覗ひつ、商賣往來になき商賣
 の一つ、土地生え抜き悪神大將となつて手下の末社を引廻す男ありけり、
 横飛の喜助つらく思ふやう、およそ此廓の大門口へ入るものは、釋迦でも達摩でも

片手に振廻して胴骨ひんぬき、いかなる悪粹に長けたる強氣の大盡でも仙人でも海月のやうにせずば歸さぬほどの我、しかも新町みぬきの天眼通と呼ばれて、大小とりませ百七十軒の茶屋揚屋が人に知らさぬ内證の深淺厚薄、あるほどの女郎が心意氣は更なり、人形の旨ひきぬいて弄ぶ禿が十年むかふの間夫の面つきから、横町の牝犬が孕んだ相手の毛色まで、めきき違はぬ我この里にありとも知らずや、近來あの水車の紋所つけて機關人形の歩むが如く花街の中央せましと人も無けに入り來る編笠め、じたい何物の化姿か風俗容體すべての至り證議を見れば無類の大々盡なれど、附従ふ末社を見れば何れも白い奴ばかり、しかも雲上めかして色を買ふでもなく香をとめるでもなく、たい悠悠々と入來つて悠悠と立去る風情は、日本一の本廓を自己が庭前か何ぞのやうに心得たるが憎し、第一が横飛の喜助こ、にあつて盲目ともならぬに、あれほど大業に繰込む化物の正體を現はすこと叶はぬかと指さ、れては末代

この男の面が潰れる、おのれやれ今夜こそ、無事で置かぬ、分別ありと眼を据ゑて呻り出しぬ、

入相の鐘に花ぞ散りけるとは世間の事、こゝは入相の鐘に物いふ花ぞ咲く大廓、名木の屋形すきまもなく軒を並べて、萬燈の影に露の珠を貫く、はやその夕暮の沙合を計つて心の一物まちうけたる横飛の喜助、おのれが腹心の手代末社二人を引連れて、身は人に叩かる、太鼓ながらも此里の色柄とつては名譽の男、白練の二枚拾の墨繪の大茄子を畫がいたる寛濶姿、眞紅の幅廣帯を寛く結んで唐人の寢言に引捲つたる瓢箪の腰根附、頭は剃下けの撥鬢奴に態とならぬ素足の一枚雪駄みるから人に變つて一風をかしけの出立そのま、大門際の水茶屋が外床几に腰うちかけて、暑くもあらぬに馴れし扇子の風を胸の邊りに送りながら、さす敵いかに今や遅しと待ち掛けぬ、

をりしも水車の紋所つけたる例の編笠、名の木の香り四邊を拂うて、千段葎の細杖つきたて
 絞柄の大脇差に片袖ひっかけながら、左右の美童、掛髭いかめしき草履取、紫の風呂敷持を
 従へて、竹田の操り人形みるが如く悠々寛々たる風情、そこらに居るは人かとはかり入り來
 りぬ、

かくと見るより横飛の喜助、その名の横飛に飛んで出で、かねての癩癩むらくと大手を擴け
 て仁王立かと思ひの外、くるりと裾を廻つて脚下に小腰を屈め、たゞみし扇子を片膝に立て
 片手の爪先を大地につけぬ、や、いづれの御大身様かは存じませねど、これは此里の運氣に
 つれて自然と湧き出づる蟲、おしつけながら御人品を見込んで斯く飛附きまする、はッ、は
 ヅ、おのれ此返答うろたへて出でみよ、編笠むしッて生面逆撫にしてくれむと、喜助おもはず
 額越に睨みあけぬ、

されど水車の紋所さらに動かぬ體、じろくくと編笠越に見下しながら、葎の細杖もて靜に輕
 く喜助の肩口を押へぬ、「この里に湧く蟲なれば、小判を餌食にすると聞き及ぶが、儲それか
 今みるは初めて、は、、、、」

流石の喜助もはや横飛びの勇氣もなく、あッと呆れて張り切つたる弓に繼ぐ矢もなし、

其十八

これは此里の溫氣につれて自然と湧いた蟲、御人品を見掛けて飛附きましたと、流石は浮世を
 一足に横飛の喜助、眞正面から立塞がツて手數のかゝる野暮に出掛けず、多年の功に得たる
 早業、裾から這うて見上げながら、やい化物どうちやと天晴膽魂に打込んだ心算なれど、敵手
 は石佛の頭を蚊が刺したほどに思はぬ體、それは小判を餌食にする蟲かと、芋殻に等しい細
 杖で肩口かるく叩かれた時、喜助その身に取ッては南蠻鐵の塊物を投附けられたる心地しぬ、

南無三寶の荒神松、たゞ一本調子と思ひの外、さては葉も枝もある茂り渡つた大々盡、そもや如何なる御方ぞと、附従ふ草履取の袖そつと引いて尋ねれば、はやその奴までが我を白痴扱ひ、しらぬと面ふくらしして横を向きぬ、

やれ無念心外、十六の春から色道の諸分しりぬいて今こゝに四十二の厄年まで、戀の唯中に家を構へ粹の水上に棹さして渡る男が、たゞ一言の下に抛出されたりと、忽ち狼狽眼に四邊きよろ／＼度を失うて遁場もなき哀れさを、編笠しづかに見返りて聲低う笑ひながら、「蟲よ來い、小判の餌食で腹の皮の破れるまで食傷させるぞ、さアどこなりと汝の食おき場所へ案内せい」

一度ならず二度までも腸を扶られて、今は面目玉を踏潰したる喜助、こりや四十二の厄に當つたかと思へど、小判で食傷するほどの厄當りは結構至極、どうか今年中は當りつけに當

つて見たいものぢやと、際どい時にも本性違はぬ面の厚皮張切つての三拜九拜、「はッ、はッ仰せられまする小判の捨場所は、まづ此里かう御坐りませうか、それ御家來衆、幸ひ此處から御替草履ぢや、はッ、拙者の肩、これは冥加至極」當時この里の戀の山、峰まで登りつめたる揚屋の全盛は、扇屋、吉田屋、茨木屋、巴屋、丸屋、柏屋、藤屋、住吉屋、井筒屋、中にも扇屋は廓第一の家臺骨とて、あと振返る羽翼の小さい大盡は寄りもつけざる門口より、横飛の喜助が鬼の首とつた勢ひに驅込んで、まづ内證への注進に目色を變へつ、さア／＼大事ぢや、今これへ連れまするは見倒し屋の古鐵買に見せても天晴古今の大々盡、まして色道諸分の本阿彌この鼻奴が鑑定折紙附、何の事はない、たゞ金銀を蒔きにはかり御坐つた御方ぢや、いづれも心得て寛濶伊達を盡し、諸事萬端ばつとして御意に入るが専一、また物の買ひ時を考へて取外すまいぞ、多年修行の面々そこらに如才あるまいが、えて彼な大々盡は人

に物を遣りたい持病があつて、その熱の出る汐合に小判の花を降らさずば御氣分の悪いものぢやと、おのれ先づ佐渡の金山を買うたやうなる廣言吐き散らして、滅多無性に踊り出しぬ、横飛の喜助その根性まで横飛に生れて、人が福の神ぢやと騒ぐほどの大盡でも、おのれが心に不審と思へば忽ち鼻であしらひ、へん太鼓の身でも彼奴等の願に乗る太鼓とは太鼓の張鹽梅が違ふぞ、家庫とり廻した角屋敷を五軒まで潰して來た成れの果ぢやと、なるほど喜助が點の打つた大盡にこれまで一年とつゞきし本大盡はなく、くはせもの、金の茶釜いづれも一時全盛の俄僧上に、流石この里の天晴鑑定男と立てらる、その横飛の喜助が、まッ直に飛込み來つて萬事くわつとしたる前觸なれば、扇屋の内外一時に騒いで、小判の山は何處に築かうかと狼狽へぬ、

横飛の喜助が踊りだして、廓第一の扇屋が騒ぐほどの大盡、そもや如何なる大鳥かと見れば、

このほどよりの風聞に上る水車の紋所、草履取と風呂敷持とを立關に残しながら、左右の美童を随へて名の木の香りを薫じつ、加之も編笠を脱がす其ま、悠々として奥の大座敷に打通りぬ、や、喜助め世界の仕合せ男、ありや慥に大名高家の忍姿ぢやと囃しぬ、

其十九

この里の開關以來またなき無類の大々盡を、この里の開關以來またなき無類の太鼓が取巻いて、廓第一の扇屋が奥の襖とり外して五間からりと打開かせ、萬燈の銀燭かややく下に當時ありとあらゆる名譽の大夫二十七人を居並べ、其外の色絲輕口花車小女郎に至るまで凡そ四十人、世の中に罪も報いも疝氣も晦日もあるものかと思はれぬ、

うまれば何處の馬の骨か牛の皮かは知らねども、この里に入つて千人の中より一粒選に選出され色道諸分の粹の水上に育てあけられて、松の位の大夫ともいはる、女が其ころの風儀は、

錦上に花を飾つて聯球をかけたるが如く、あれでも納戸飯を喰ふかと思ふばかりの雲上さ、いかなる晴がましき座にても悪びれず、いかなる敵手に逢うても味を遣りすぎて心とり亂さず、言葉に情の露を含んで身に諸藝を嗜み、おのづから萬事に位を取つて大様なる風情、のツしりとして床柱に身を持たせし時は息が通ふかと疑ふほどの静けさに、たゞ笑を含んで名筆の畫より脱け出でたるが如し、されば大方の大盡いづれも氣を吞まれて戀の弱身に附込まれ大切の黄金を遣ひながら我より機嫌を損ぜぬ心の掛引、これほど詰らぬ事はなしと悟つた頃は無一文とぞいふ、

されど今宵の大盡は格別の大盡、それほど位を取つて男を惱ます名譽の大夫二十七人を眼前に置竝べながら、これを見ること芥の如く土人形の如く、まして其餘の色絲末社の徒輩には目も觸れざる容體、しかも第一の不思議さは編笠きたるまゝに坐して、例の美童を左右に侍ら

せつ、盃とるにも他人手に取らせず、たゞ横飛びの喜助のみ膝前に近づけて、をりくゞ笠の中より聲低う笑ひながらに物をいふ體、一座いづれも呆れて眉を擧めぬ、

編笠に面は見えざれど、寛濶伊達の頂上を越えて聊か滋味に立戻つたる衣裳風俗、かさねし膝の上に膝も崩さず坐しながら何處となく打寛いだる體、小袖の動く毎に名の木の香り四邊に薫じて、眞白き手先に洗ひ朱の大盃とりあけつ、しづかに笑めるが如き身の持振り、なんとしても尋常の人とは見えざる氣高さに、およそこれまで大盡といふ大盡も苦もなく取つて押へし松の位の君達も、いつしか我を忘れて思はれたき色に落ちぬ、え、あの笠の中が見たや、

これほどの大盡またあるまじ、我こそ目にとまらむと、大夫は濡る、心の外に今宵の願念なけれど、その他の末社どもは面白うもない氣つまりの座に四角ばつて立ちも得やらず、さりと

て好きな酒も何とやら遠慮勝に、平生の輕口さへ咽喉に支へて苦しき顔色、これで欲しいもの貰はずに夜を明かさば、煩うて死ぬるぞと互に目と目を見合せながら、涙ぐんで溢面つくる奴もあり、いざ汐合は此時と一座の捌き役に横飛の喜助まかりいでて、大盡の御前ちかう何をか申し上ぐれば、編笠しづかに首肯く體、こりや堪らぬ、今夜の様子どうやら變ぢや、あの喜助奴は元來あのやうに靜肅しからぬ奴、もし氣でも違つて何處ぞから斬捨御免の大名を引摺込み、今宵の慰みに我等が生膽でも取る相談か、やれ南無三寶、えらい處へ喰した、さりとて今更一番に遁け出さば、人にすぐれて目に立つ彼奴を最先に片附けよなどと、得てある奴ぢや、あ、前夜の夢見が悪かつたと、いづれも首を縮めて差控ふる折しも、横飛の喜助が彼の風呂敷持の男より受取つて、朱塗の大盆に溢る、ばかり山と積んだる小判の光り、編笠みるよりそれ蒔けとの仰せ、喜助こゝぞと大祖ぬけば達摩と女郎と相撲取組んだる色繪の襦袢

一枚となつて、一座の中央に仁王立の勢ひ、寒からぬに額の大汗ながして、さア雨が降るぞよ用心せい、

きくや否や今まで陰に閉ぢられたる末社ども、一時に陽氣立上つて居合腰となり、手拭だし鉢巻するやら尻ひツからけるやら、喜助こりや平生の交誼を忘れたか、仲の善い友達甲斐はこゝぢや、遠慮なしに面がまの曲るほど投げ附けてくれと、満座を搔退けて這ひ出したる奴は、第一番に生膽とらる、かと心配せし男なりける、

其二十

足から歩んで這入るべき揚屋の門口を頭から先へ飛込んで、四の五のいふな自己が世界ぢやと喚きながら、踊り狂つて跳廻る亂痴奇騒動の大盡は、得て心の底の小さいもの、蠟燭の火を増して座敷の襖あけか、れば、はや何となく苦い顔、よびもせぬ女どもが集ひ來て勘定なし

に奢りか、れば、忽ち肩を擧めて四邊きよろしく、入らざる餘所の末社まで流れ込んで無用の珍味佳肴を積立つれば、流石の大盡も今は叶はず、俄に腹が痛む疝氣が起つた頭が割れると呻り出す、さては此奴いよく遁けると末社のうちの老功一人を飛んで来て、私も腹からの太鼓でなく元は歴とした醫者の倅少々は針の手も心得て居ります、横になりませ幸ひ昔の手竝を御覽に入れて、身體中に隙間もなく針うって進ぜむと、何やら懐中の紙入より取出して責附ければ、大盡は目を丸くして驚き、やうく一方の血路を開いて床のうちに遁込みながら次第に夜ふけ酒さめて屏風の中に吐息つくく、あくれば前夜の威勢どこへやら、顔色まッ青に狐つきの落ちたる如く、すごくとして歸りがけの駕賃まで半分ねぎって見たきは凡そ尋常の大盡七分はそれなりける、

されど今宵の編笠大盡、萬事の座配ぐわらりと變りて、この里に名譽の大夫あるかぎりと呼

寄せ、花車も末社も来るほどの奴を呼入れて、一時の間に小判幾枚といふ近來稀有の全盛を極めながら、誰をさして色になづむでもなく盃まはして酒を過すでもなく、聲あけて笑はず身を動かして喜ばず、たゞ重ねし蓆の上に寛濶姿のツしりと乗せたるまゝの手前、一座しんとして大名の婚禮座敷に招かれたるが如く、いづれも地の底に引入れらるゝかと思ふ折しも、かの横飛の喜助が大肌ぬぎの仁王立となつて小判の雨を降らせしかば、忽ち満座ひつきりかへつての大騒動、家鳴震動して床板も踏抜かむばかりの其中を、大盡すつと摺抜けて悠々と歸り去りぬ、

小判の雨に死物狂ひの奴等、摺み合せて面の厚皮ひツか、れしもあり、なぐり合せて鼻血を流せしもあり、女は髪を振亂し男は額に瘤を出来して、おのゝ得たる黄金を戴きながら、まづ冥加のため大盡の御前に御禮申し上げむとすれば、蓆に名の木の香りのみ止めて主の影

なし、

その時に横飛の喜助おのれ獨りが心得顔なほ大肌ぬぎの仁王立となつたるま、額際の汗たらしくと流して一座を見廻しぬういづれも今宵の大盡なんと見た、彈りながら近來この横飛が眞直に捧け奉る旦那といふは、まづこれほどの大盡ぢや、わづか一人の君傾城に登りつめて親の敵を規ふやうに目色を變へ、張の弛んだ野太鼓を二つ三つ叩いて悦に入るとは品の出來鹽梅が違ひまする段々得心したか、合點したか、おのれが家の門柱に羽蟻が傳ふ分際でいやこの揚屋の座敷が善い悪いのと柄にない僞上ぬかす端大盡に、一目なりとも今宵の次第を見せてやりたかつた、いづれも血の氣の多い惡達者で物喰はいでも呻らねば生命つかぬ陽の蟲が四十何人といふこの大一座を、何の事はない忽ち夜中の墓場同然しんと淋しう陰の底に落した後、さつとまた陽に開かせて天井裏も打抜かむばかりの大騒動、その騒動

の治まらぬうちに人しれず御歸りの體とは、面々どうぢや、仕掛けの嘘も絲瓜も多年修行の上手も何も斬入る隙間があるまい、色道諸分の本大盡、粹と通との水上こ、ぢや、しかも天性うまれついで的美男、うかく見せて煩惱の種を作らせむも不惑の至極と、始終の編笠そのまゝの振舞は此席に御坐る二十七人の君達を手鞠に取つた活氣の沙汰、どで御坐る、されど誰一人あの編笠を脱がせまして、ほんに憎い殿御と股の邊を捻りあぐるほどの名大夫なく、いたづらに高根の花と眺めて過されたは近來の不出來ぢや、さればまた明日にも御坐らう時おのく腕によりかけて今夜の敵討たのみまするぞ、あの大盡を取廻す事には横飛の喜助こゝにあれど、骨を抜いて海月の三盃酸にするは君達の本藝、あゝ世がま、ならばこの喜助が女になりた、みごと引落して塵隨一の手柄を残すは今ぢやもの」

其二十

横飛の喜助、ことし四十二の厄當りに多年の酒毒を吐いて煩ひもせず、前夜に喰うた蛸の足が胸に横はッて苦しみもせず、近來ふしぎの大々盡を手に入れて扇屋の案内を喚き散らし、ほざくだけの廣言ほざいて其まゝの千鳥足、越後町の横路次に構へたる自己が巢に立歸れば、これが花山といひし鹿戀女郎の成れの果、曉方の蠟燭ならねど流れを立てし昔の風情どこやらに残りて、その中に聊か浮世の世帯じみたるところ、いはゞ銀にいぶしをかけたる滋味の三十女房、良人の顔みるや否や待兼ねて迎へながら、これ喜助どの、ちらと人から聞いたが、今夜は大鵬とやらいふ大鳥の羽翼に乗ッて扇屋へ舞込んだとの噂、ほんかへと問へば、喜助おのれが鼻柱を押へて、女房ども、同じ太鼓を男に持ッても汝は幸福女ぢや、客の前の酒と我宿での酒、水と油ほど違うても味また格別ぢやと、女房相手の膳の上に盃とりあけながら、「そも〜今夜の大盡といふは、五軒の角屋敷みごと揉潰して今この太鼓商

賣するまで夢にも見たことのない大々盡、さりとして戀の水上に棹さして漕上ッた舟板わりとも見えす、どこやらに初心の風があるかと思へば、また自然と備はる場敷もの、體、第一が寛潤を旨として殊更に伊達に落ちざる呼吸いやはや何とも點のうちどころがない、しかも不思議は座敷でも編笠そのまゝ、この自己を呼んでいはる、には、いづれも照續いて膏氣の乾いた故か干物店みるやうな面つきが物の哀れぢや、それ小判の雨を降らしてやれとの御意、かしこまつて家來より受取れば、朱塗の大盆に積んで山の如しぢや、目分量でも髓に三百兩満座の中へ持出した時は點し連ねた銀燭、照輝いて日が眩むかと思つた、なれどもこゝが男の一大事、せめてこの四半分もあれば今年中の晦日は鼻唄まじりと、どうやらすると出か、る本音の穢いところを顔色にも見せず、大肌ぬぎの仁王立、やツとばかりの勢ひで四方を睨んで、ばらり〜と年越の豆の如くに蒔散らしたものの、實は惜しい〜の一念凝固まつて胸

先に支へ、思はず胸ぶるひがしたわい」いひつ、又もや盃あけて飲乾しながら、その時のあ
りさま今なほ目先にちらつくが如く、しばし我を忘る、良人の顔、女房じつと見詰めて膝す
りよせ、「これ喜助どの、あまり夢が夢中に狼狽へて貴方その小判を残らず時かれはせな
んだか」いや、狼狽へても目が眩んでも其處は横飛の喜助ぢや、始め家來衆から受取つて盆に積む
時、そつと先づ人の知らぬ御初穂が五枚、さて満座の中で時くと見せて實は此懐中へ落し込
だ手品の数が二十何枚、都合あはして三十兩はこれこゝに鎮座まします筈ぢや」世間に綺羅
は飾れど内證うすに太鼓家業の晦日前質の流れの瀬戸際に思ひもよらぬ山吹の花盛りを見て
女房忽ち目鼻を崩しての喜悦に引代へ、喜助どうやら心の底に濟まぬ顔、しきりに小首を
傾けながら、「さて女房、こゝまでは首尾ようして退けたれど、その横飛が一生あやまり、そ
の編笠に環卷の絲をつけ損うた、何が儲、小判の雨に一座いづれも大騒動の眞最中なれば、

大盡すつと指抜けて歸られたに氣がつかず、また扇屋の内證、玄關臺所の小女郎まで、もし
や風の模様で飛んで來るか、東手の襖の蔭に集つて押すなくと一生懸命の折柄、誰一人し
らずに歸したは無念千萬、あれほどの大鳥が羽翼をさめて睡る時は、必定この大阪でも五本
の指は出ぬ筈の館、影に添うて見届け置くべきを、もしや今夜ぎりで二度と來られずば、大
風の吹いた後始末、仕かけ花火の消際ぢや、第一この喜助が圖に乗つて満座の中で吐いたる廣
言の遣り場がない、南無三寶、我ながら雲の掛橋、やア踏み損ねたわい」いひつ、懐中より
今しも取出したる小判の数々、なんとなう見詰むれば其中の一枚に封包みの紙の端なほ残り
て、朱印めいたる割符の印證、手に取上げて喜助つらく見れば、丸のうちに三角の印と
叫びさま膝前なる膳も皿も蹴散らして飛び上り、跳ね上り、廣くもあらぬ八疊の室を踊り狂
うて煙草盆に躓き、どつと仆れながら忽然むくりと起直つて兩眼きろく呻り出しぬ、こり

や此日本一の長者、この大阪の舞臺骨、淀屋が黄金の刻印、あの水車の紋所でも知れさうな筈を、今まで氣のつかざりし大白痴奴と、おのれが頬邊ぎゆうと捻りあけて痛い／＼と叫びぬ、

其二十二

蔭くど見せて懐中へ落とし込んだる小判の端の封印より、さては日本一の長者この大阪の舞臺骨と唄はる、淀屋の主人、元來あれほどの大盡に水車の紋所あるからは、いはすと知れし其人とは氣の利いた盲目さへ知るべき筈を、横飛の喜助ともいはる、男が今まで氣のつかざりしは我ながら聊か老込んだり、されど慥に今年の運は上々吉、眞正面から福の神に胸倉とられしも同然ぢやと、八疊の間を踊り狂うて跳廻りしが、寢床に入りても胸先に何やら物のある心地して眠られねば、うまれて朝顔の花を見た事のない奴が、東天の鴉の聲と共に枕を蹴飛ばして起き出でながら、滅多無性に面の道具を崩して笑ひぬ、

さア女房、太鼓へ業に落ちてより十三年、何事も世を張抜の提灯で一寸先は闇の脚下を照して来たからは、貧乏といふ貧乏いかな濫團扇の敵でも驚かぬが、かう俄に運が立直つて馴染の薄い福の神に出逢うては、さすがの男も聊か手加減が違つて萬事やりにくい、まづ障子襖を張替へて疊の表も仕替へた上、汝にも久しぶりて好きな衣裳を著せ白粉氣もつけさせ、思ふまゝ、の物見遊山に出すは勿論の事、第一あの家主奴が近來めつきり我を見下けをツて、どうやら不意に店立を喰はしかねまじき様子の鼻柱、このまゝ、居なりに買取つてやらうかと喰はしたい、また今年の暮の餅米は角の蔦屋の大白借込んで今から踏ましておけ、ついでに横町の酒屋から菰かぶつた奴を引摺り込んで、魚は兎角生肉にかきる、鳥は青鷲か鹽鴨、鴨か鶉も悪うは無し、汁は絹起汁に鶏頭の浮かし菜これこそ飲めるわい、しきりに僭上ぬかして俄の大名氣となれば良人に連れるほどの女房、こいつも根が方角しらすの途方なし、おもはず小膝を

進めて何をいふかと思へば、嗚呼とるまじきの年ぞかし、わたしも今年ばかり若ければ、
 貴方のやうな太鼓を男に持つて世帯じみた苦勞はせず、みごと其大盡の御意に叶うて玉の輿、
 ほんに横飛の喜助どこぞで見たやうな阿しな顔ぢやと言はうもの、きくや否や喜助は女房の
 襟首とツて横面ぐわんと喰はし、果は夫婦喧嘩の眞最中に扇屋よりの使者これ喜助どの前夜
 の大盡が御越ぢや、きのふ小判を蒔かせた時、惜しい／＼の一念で妙な顔しをツた男を呼んで
 來いと仰せ、來るか來ぬか返答き、たいと喚けば喜助をどりあがつて目をむきたし、えッ
 此奴までが入らざる馬鹿念おす奴ぢやと、その使ひの向脛を蹴飛ばして走せ行きぬ、
 横飛の喜助、貧乏寺の瘦犬が鰻屋みつけて驅入るが如く、扇屋の門口より鼻うごめかして入
 來れば、き、及びし太鼓末社どもこゝに待受けて、これ世界の仕合せ男め、おのれ一人で占
 める氣かと四方より取巻かれ、喜助ます／＼落附いて襟かき合せながら、いや／＼自己一人

では逆も運びきれぬ福のこぼれぢや、そこで近來ちと顔色の青い貴方衆にも手傳うて貰ふ筈
 なれど、あの太盡なか／＼の一轍で、萬事は喜助われに限るぞ、外の太鼓が面がまち氣に入
 らぬと仰せらるゝ、この分では今年中の生命が危い、こゝ一月か二月のうち福の神に絞め殺
 されるかも知れぬ男、あとの死骸を冥加のため焼いて粉にして酒で飲んでくれ、は、と笑
 うて内證へ飛込み、さアどうぢや今日の料理は、人間の喰ふものでは承知せぬぞと喚くや否
 や、また取ツて返して奥の大座敷、本尊まします襖の此方に平蜘蛛の如し、「はッ、きのふ御目
 かけられましたる蟲奴、お袖の香を慕うてこれまで」いひつ、隔ての襖すツと開けて見上ぐ
 れば、今日は例の美童も召連れず唯一人、しかも編笠ぬいだる年のころ二十八九の美男、薄
 淺黄の羽二重に上繪なしの水車を墨繪に置かしたる衣裳、大内曳の朱骨扇子しづかに開いて
 差招きぬ、「こゝへ來よ、けふは女禁制、男ばかりで遊ぶのぢや」

其二十三

臙に霞みし春の夜の編笠大盡、今日は心の雲近く晴れ渡りけむ笠も脱捨て例の美童も左右に置かず、めしつれし者どもは草履取まで門口より追歸せしとのこと、さては前夜の面白さ何となう身に染みて忘れぬま、こゝに碇を卸して情の海の浅い深いを探りたき心底、もはや我手の物と横飛の喜助なほさら這ひ寄つて熱々みあぐれば、おもふに立勝りし優形の美男ながら、どこやら目元に凜として聞かぬ氣の痲痺筋を現はしぬ、

これぞ日本一の長者、この大阪の舞臺骨といはる、淀屋の主人き、及ぶ辰五郎か、あゝ人は實に運命の器物、黄金の腹から夜光の珠を捧けて生れ出でもすまいに、どこが世間の人間と違つて今この冥加には叶ひしぞ、これを思へば同じ辰年の我身なれど斯くのありさま、揉潰した五軒の家庫そのまゝ、無事に傳へて持てばとて此人の爪の垢にも及ばず、まして扇子一本を

資本の太鼓とまで落果てし我は生れぬ前から金銀の仇敵、たまゝ現世で見附けられ加之も手痛く打亡ぼされたる空財布同然、その上また心の底に縫目なければ入れても溜る氣遣ひなし、おもへばく浮世は嫌と妙なところに無常を感じて俄に鬱ぎ込んだる喜助、親類の墓場で焼香するが如く打濁れたる面體いよゝゝ呵しければ、大盡おもはず笑うて扇子を開きながら、「こりや喜助とやら、今日は女ども禁制、いづれも汝のやうに出来損うた男ばかり呼集めて、道理に外れた呵しい談話を聞きたい、それこの里に太鼓末者と名のつくほどの奴は皆この席へ呼べ、また小判の雨ぢや」

なんとやら無常を感じて打濁れし喜助、小判といふ聲の耳に入るや否や、また忽ち勢ひを得て取直し、はつと答へて起上る風情、どう見ても人の慰み者に出来たりける、

さア小判ぢや、小判々々、また小判の雨が降るぞと踊りあがりて、この廓中ありとあらゆる

男藝者を呼集むれば、その勢すぐつて七十三騎、おくれじと膝栗毛に鞭つて馳せ附けたる面々を見れば、いづれも物ほしさうなる武者振ひして、ずらりと大盡の前に頭を揃へぬ、さしづめ横飛の喜助は七十三騎の旗頭、仔細らしく扇子ひらいて自己が鼻頭を軽く叩きながら、額越に大盡を見上げて御意のほどを伺へば、大盡いち／＼見渡して思はず吹き出しぬ、
「や、どれも／＼呵しい顔ばかり、ようも揃うた事ぢや、七十三人の中せめて一人、人らしき目鼻のあらうものを、ふしぎ／＼偕また面白い、女色を表面に飾る癖の事なれば、美女を集めて興に乗るは誰もする業、味噌屋で味噌の樽を見るに等しく臭味はあれど、かうも不思議の面相うち揃へて酒の肴とは面白い事ぢや、我等たとひ黄金の山を積むとも、この里の外では一時に迎もならぬこと、やれ流石は人外を集めし癖なればこそ、は、は、は、は、ついでに汝等を生んだ親の顔が見たいわ」

元來この大盡この里の諸分に馴れざれども、前夜といひ今日といひ一切萬事の呼吸おのづから活氣を含んで物に憚らず、しかも来るほどの奴を頭から呑込んで更に咽喉に觸らぬ體、流石は日本一の長者に備はつたりけりと、おのれが親の面附まで引出されながら横飛の喜助しみ／＼感じぬ、よしや聊か腹の立つ事あつても、小判ぢや、あれは小判ぢや、小判が呻る聲、

其二十四

高野の奥にあらねども、今日は女たるもの禁制の一札を梯子段の上り口に立て、この里にありとあらゆる太鼓末社を驅集むれば七十三騎、固より騎の字は奇の字に通うて一座いづれも不思議の顔色、づらりと大盡の前に押並ぶれば、元來ひねり損ねて迎も賣物にならぬ伏見人形ながら、こいつは動いて物いふだけに小判の端ともなる、その旗頭の横飛の喜助が青物市の西瓜を見るが如く、いち／＼扇子に七十三人の額口を叩いて其名を呼立てぬ、呼立てら

る、奴は扇子に眞向びしやりと打たれて忽ち有難しと喜ぶ體、大盡つらく見遣りて聲高く笑ひながら「はて妙ぢや、骨組の出来工合か皮の張鹽梅か、喜助一人が同じ手と同じ扇子で叩きながら、いち／＼額の音が違うて聞えるぞ、ついでに各自腹鼓うたせたら猶更呵しかろ根が狸の化けた汝等ぢやもの、は、は、は、」

これは少々なさない、喜助に叩かれるとも扇子で打たる、とも思はず、たゞ小判が額に當つて妙な音色がすると思へばこそ、さるを其音いち／＼違ふが面白いとて、この七十三人が眞裸で腹鼓まで打たせらるゝを、もし大事の女房にでも見られたら何とする、いかに世を張抜の太鼓家業とて家に歸れば今年二十歳の子を持つ眞人間ぢやと、中には心底むツとせし太鼓もあれど、また中には叩かれながら偏に感じ入る奴もあり、さてもこの大盡、なかくの本大盡、粹の水上より湧出でたる我等七十三人を眼前に置立べなから、萬事初心の身を以て

更に目色を動かす體もなく、いち／＼額の音を聞き分けて興に入るとは殆ど凡人の仕業でなし、あはれ八幡これほどの大盡に名譽隨一佐度の金山ふみくほどの傾城をかけて、その成果が見たいとは此奴も尋常の太鼓にあらざりける。

横飛の喜助する／＼と大盡の前に這ひ寄つて何をか伺ひ、其のま、一座の中央に例の仁王立さア此ごろの早天つゞきで田も畦も龜裂れるほど難儀至極の折柄、ありがたいは天日様の御慈悲どうやら空が曇りかけたぞ、この機を外さず雨乞の用意、用意々々と叫べば七十三人いづれも疊の下に機關糸をかけたる如く、一時に踊りあがり狂ひ廻つて天井板も床板も堪るまじとぞ思はれぬ、

をりしも其二階下に酒池肉林の陣を構へて此里に一粒選の女武者ばかりを呼寄せ、敵は何國と忍び駒の色糸ひかせて興に入りしは、ほど遠からぬ泉州堺での大町人、小西攝津守が末業

と名乗つて今は四國九州山陰山陽の西を一手に握る藥種問屋、軀が小さうて金が大い見立
 ては朝鮮の人參様とて貧の病に利目の早い大盡、しかも三年以來これは此廓に通ひつゞけの
 全盛男、今しも盃とりあけて我も小唄の一節きかせむと思ふ頭の上より、俄に天井板の崩れ
 落つるが如き物音、額越に見上げて眉を逆立てながら、「女ども、ありや何ぢや、雷の喧嘩か
 地震の逆上か、品に寄つては下から天井板を打抜いて正體みようわ」

さらぬだに女を表道具の此廓に來ながら梯子段に女禁制の一札たてられて、いさ、か腹立ま
 ぎれの女ども、こりや善い相手ぢやと四方より膝を進めて喚き立てぬ、「これ人參様、あれは
 何處の大盡か知らねど、黄金も瓦も同じ事ぢやと仰せられて、前夜の一座に小判の雨を降ら
 した御方、今日は此里にありとあらゆる太鼓末社の男ばかりで、扇屋の床板どれほどの丈夫
 か踏抜いて見よとの大騒動、取巻の大將は横飛の喜助どの、あゝまりぢや、ちと叱咤めて下さ

んせ、廓で女禁制の一札たてられたは聞いた事のない我ま、大盡しくやしいくと嘲れば、人
 參おもはず持てる盃天井に叩きつけて片膝おツ立てぬ、「おもしろい第一あの横飛の喜助め日
 本に生れて朝鮮人參を飲まいでも死ねば定命と吐した陰言かねてより此耳にある折柄、其奴
 が捧け奉る大盡どれほどの大盡か、ついでに面も見てやらうわ、女どもそれ自己が脇差いや
 く野暮に抜きはせぬ、たい身の用意ぢや」

其二十五

女ならでは世が明けぬ國の源、女體本尊の此里に來ながら其女を禁制の一札たて、喜ぶとは
 さても色道の諸分を知らぬ唐變木奴、ましてこゝに此の粹の水士様が鎮座ましまして色絲の
 御遊あるとも思はず、恐れ氣もなく天井板一枚の上で今にも踏抜かむばかりの大騒ぎ、第一
 あの横飛の喜助といふ奴、非人乞食でも片手に小判を握れば忽ち叩かるべき太鼓の身であり

ながら、日本に生れて朝鮮人參それほど有難からずと吐した頼けた、事のついでに幸ぢや、かつは三年以來我家も同然に通ひつめたる廓のため以後の懲戒、彼奴等が踊り狂うて天井を踏抜く前に先づ其胴骨を踏抜いてくれるわと、脇差ひきよせ起たむとする勢ひあまりに凄まじければ、女ども今更怖氣たちて左右の袖に縋りつ、これ人參様、お腹立は御道理なれど、何を申すも敵手は茶屋の二階と盆の相撲場と取違へるほどの狼狽者、しかも男ばかり大勢の中へ大事の貴方一人は遣られぬ遣られぬ、こゝは兎も角も粹の雲上に御坐りなされて、誰でもよい御使者に立つものないかといへば、花車の老功隨一ことし四十八の仇名を猘々の勘とて如何な客でも引ッ搔き落すに妙を得たる場敷の婆、それへ罷り出でて妾がといふ、人參殿おもはず手を拍つて、こりや妙ぢや、お勘ある事つい忘れて居た、お勘お勘なるほど汝に限ると、膝前なる大盃とつて與ふれば、猘々のお勘なみくくと引受けて舌鼓もろとも飲乾しながら、

きけば百人近い男奴が四邊かまはぬ狂氣沙汰、みごとくに静めました其時はと、すきまもなく際どいところで落附いたる念を押せば、人參からくと笑うて、いつに變らぬ達者婆、皆までいふな、おのれが欲しいもの遣るぞといふ聲を聞捨にして、衣紋をつくろひ帯しめ直して立去る後姿、あれでも娘と名のつく時代のあつたことか、ようも今まで化けぬものぢや、

互の大盡と大盡とは偕おいて後の事、さしづめ當の敵手は横飛の喜助、こいつ固より四も五も喰はぬ惡神の精靈ながら、此身もまた廓で猘々のお勘といはる、百年の半婆、手柄くらべぢや一代の晴業と、梯子段しづかに上りつめて、女禁制の一札たてたる此方に座を占めぬ、この一座の末社頭を横飛の喜助どのと聞きまして、今日この下座敷の花車お勘で御坐んす、ちと御目にかゝりて憎まれ口の二つ三つ」なるほど猿猴の老いたる聲を張上げて叫びぬ、

七十三人が踊り狂うて小判の雨を祈る眞最中ながら、早耳の喜助それと聞いて立出でぬ、「や、勘どのか、同じ廓に住みながら折が悪うて久しう逢はなんだ、さて何の用ぞ、この頃の早天ついで雨乞の最中、暇つぶして下さるな、一時一枚たしかに降る空合ぢや、しかもこの喜助は祈禱の先達、なか／＼以て忙しい」それは／＼まアお忙がしいこと、とかく太鼓家業は忙しいで持ったものなれど喜助どの、この扇屋は貴方の大盡が買切つたとも聞かぬに、あまり人も無けに里外れな野遊びは止めにして下さる、いかに下さる、物ほしい家業とはいへ、そのやうに汗水ながして狂氣の眞似をせずとも、二階で小判の雨が降れば、これこの下座敷でも小判の津浪がしまいものでもないに、ほ、、、第一それほど骨を折りすぎては今まで賣込んだ横飛の名に觸らうぞへ、馴染甲斐と心易達に申しますのぢや、お氣に觸へられず靜にして下さる、いかな手剛な大盡でも貴方の指頭で廻せば土人形も同然また餘の末社衆

は百人千人あればとて貴方の一聲で済む筈を、わざと踊り狂うて床板踏み抜くが何の面白いぞ、え、讀めた、やッぱり粹め、こりや粹の蟲の居所が悪かつて前夜の夫婦喧嘩を持越したのである、おいてたも、上も下も第一お客が迷惑ぢや」ほ、と笑うて粹ごかしに仕しか、れば、横飛の喜助おもはず目をむきいだして両手を宙に振りながら、「へ、版木で捺したやうな古くさい文句、いふだけ野暮ぢや、鼻持もならぬわ、またこの喜助お言葉なれど粹でも杭でもない太鼓の皮、た、かれて鳴るが家業の身で御目かけられる大盡の手前、狂うて騒いだのが何として、誰様の御氣に觸るか知らねど、今日は藥臭うて堪らぬからの厄拂ひぢや」藥くさい、それがために厄拂ひとは、喜助どの、そりや貴方本氣でいはる、のか」は、、、狂氣かも知れ申さぬて、は、、、」

其二十六

狒々のお勘と横飛の喜助、男女の差別こそあれ花車と太鼓は同じ化生のもの、平生は何の仇も怨恨もなけれど、おのく身に引受けての大盡を持ちしからは、戀の道に粹ほど陥りやすいと同然、意氣地の掛引には碎けて捌けし家業だけに猶更凝って張合つよく、一つは互に今まで賣り込みし名もあり、一つは友朋輩の手前もあり、また一つには大盡へ手柄立して褒美の金の掴み時、つまりは小判なれども、さてその小判の出所に片寄って雙方まけず劣らず争ひぬ、

「これ喜助どの、貴方の獅子ッ鼻どれほどの效能か知らねど、今日は藥臭うて堪らぬとの一言は、この下座敷を堺の人參殿と知つての上の喧嘩口、なるほど、いつぞや山口屋の一座で元來あの喜助は蟲の好かぬ奴、そこ退けとて盃なけられた怨恨かは知らねど、それを根に持つほどの野暮な家業でもない貴方が、太鼓の身として思ひきつた今の大口ようも言はんした

妾も狒々のお勘といはれて通る五十女、此まの聞捨にはせぬぞへ、あた阿しい、小判の雨も年中つゞけて降ることか、たつた一度や二度で膽魂の轉宅する表裏男め、萬事はツと出の大盡は廳て目の前、しゆツと消えた時の貴方が泣面みるやうな「おもしろい、おぬしが狒々の勘なら自己は横飛の喜助ぢや、時と場合に依ては女を敵手にせまいもンでもない、まづ第一この二階は此方の大盡が城郭、その城の中で買はれた間は家來同然の我等、大將の御意を奉じて踊らうが飛ぼうが餘所から入らぬ世話、もし床板を踏抜いたら疊もろとも仕替へる分ぢや、もし天井を突抜いたら扇屋の僥倖、古いものが新らしうなツて徳こそあれ、損はない、よし損があつたとて和女の大盡に奉加帳を廻さうでなし、へんおいてくれ、此方で降る小判の雨の講釋、宵闇に犬の糞を踏み附けたやうな面相しながら懷中で勘定した後、露をうつ大盡とは、は、は、は、大盡の氏素性が違ひ申すぢや、また御心配に預つた喜助が廳ての泣面これも矢

張り他人行儀で居てほしい、あんまり和女に親類交際されては十三年連添うた女房の手前も何とやら、うるさいく」

互に負けず劣らず口を極め、果は目色を變へて争ふ聲に、小判の雨を祈ッて夢中に騒ぎし七十三人の末社も、いつしか踊り狂ひし手足を縮めて耳を欬つる體、水車の大盡しづかに見遣りて、じたい何事ぢや、喜助を呼べとの御意に三四人ばらくと梯子口に立寄ッて、何の事はなし仔細かまはず喜助の手を取ッて曳き來りぬ、

「こりや喜助、女禁制の一札たてしところ俄に女の癩走ッた聲、また汝が高聲、もの争ひのやうに聞えたが何事ぢや」「これはしたり、みぐるしい儀が御耳に觸ッて何とも申譯のない次第、ありや下座敷の客の使ひで御坐りまする」「む、下の客が何の使ひに來たのぢや」「お尋問にあづかつては、もはや隠しもならぬ仔細、實は拙者ども雨乞の騒ぎに踊り出した

響きが氣に入らぬとて聊か文句を並べにまるツた女、第一その客と申すが人なみくの客なら知らぬこと、泉州堺の藥種問屋で仇名を朝鮮人參と呼ぶ大の横紙やぶり、この里へ三年以來、通ひつゝけたを平生の鼻の先にぶらさけて、およそ廓にあるもの誰彼なしに痛めるが慰みの惡粹、しかも今日は女ばかりの大一座で、その頭上に男ばかりの體ときいて忽ち例の癩癩の蟲を走らし、いかな客でも引ッ搔き落すが名人とて狝々の勘といふ此女また花車の惡摺れ、年の若い里に得馴れぬ勤め女を咬かしては懷中を暖むる五十婆を使者としての掛合に、きのふ今日ながら斯うも御目かけられる喜助が何として居られませうや、つい二言三言賣言葉に買言葉の問答進退」「や、それはまた格別の一興ぢや、その人參とやら大根とやら、その狝々か猿かの生肉に添へて酒の肴にする工夫分別、おのく智慧を絞ッて出して見い、さア七十三人が智慧の切賣ぢや、随分と値を善う買ッてやるぞよ」

其二十七

委細かまはぬ、この下座敷の人參とやら大根とやらといふ奴、ついでに猿とか狒々とか使者に來をッた百年の半婆もろとも、三盃酸にして一口に飲むほどの分別せいと、水車の大盡いよく興に乗って膝を進むれば、七十三人の末社いづれも咽喉を鳴らして褒美の金は欲しけれど、天晴我こそと智慧を絞って承るものなく、一座しらけて見ゆる今この場に、否でも應でも無言で居られぬは横飛の喜助、誰彼なしに其お役目この鼻に仰せつけられたしとぞ願ひぬ、

「なるほど喜助、さうなうては叶はぬところ、こゝは餘の者でゆくまい、また往かれもせまい、萬事は汝に委すぞ、随分と諸事にぬからず、くわツと活氣に持つて開いて敵の腸かきむしツて來い、味を遣り過ぎて今日から大鼓家業を止めるにせい、汝が身に十人二十人の眷族はあ

るまい、は、は、は、奈良の名物、ひツ取ツて生涯を酒で漬けるも易い事ぢや、胴骨ぐらく、狼狽へて二の足ふむなや、面白いぞく」はッ、假令夜半の御寢言でも、御人品に對して十人受判の證文より正確に存する拙者奴が、四十二の太鼓冥利、この廓にありとあらゆる末社七十三人の其中で、白晝その御一言を下されましたは喜助が身に取ツての金城鐵壁、さア誰でも來い、鬼の生肝でも攔んで來る筈の男ぢや」と、勢ひ込んで起上りし面相すさまじけれど、また何處やらに物の呵しみを含んで、なるほど太鼓は太鼓なりける、

されど本人さらに呵しみでもなく洒落でもなき眞實の心底、時と場合に寄ツては今日から太鼓も止める覺悟の目を張って、例の緋博多の帯ぐいと占めあけつ、槍にも長刀にも扇子一本より外はない家業、その代りに打出す鐵砲玉は舌一枚の先に仕掛けて御坐るわと、梯子段しづかに降りて内證に走せ入り、菰梅の口より一升樹をうけて溢る、ばかりに注ぎ込みしを、其

ま、の両手に仰ぎながら一息の瀧呑、みことに見ゆれど實は三合あまり、残りし七合ほどの酒に左の指頭を染めて自己が眞向額に濡りしは、何の譯やらト占やら知らねども、これも本人ひとりやが兩眼とちて仔細ありけの體、さアこれからちや、あの人參め、今日この張合にならずさへあれば無事で置きたうない奴、いつぞや満座の中で何の失策もない我面に盃なけつかけつた無念さも、時來つて幸ひの今日たゞいま、太鼓家業を止めても生涯の引受人あるからは百人力に勝りし横飛の喜助、こゝぞ男一代の晴業、浮世を張拔の太鼓でも中には肉あり骨もある證據を見せてくれむ、また大盡とて小判の威勢ばかりで廓は廻しきれぬ物の道理を教へて、我あとに残る末社のため此後に入り来る客のため、一番こゝは胴骨の据處ちやなど思ひつめて入り來りし下座敷の此方、隔ての襖二枚に墨ベツたり筆太の文字、まだ乾かぬを見れば、南無三寶、これより内は男たるもの禁制とありける、

流石の喜助はツと思はず、其處に立ッたるま、の一思案、人參奴が味をやりをツた、この襖あけ放てば無筆の明盲目と吐さむ、この襖あけずば何とやら物の勢ひなく事の張合なし、さればとて此ま、襖を隔て、文句ばかりに斬込めば、手のうち無用と乞食あしらひ仕かねまじき奴、横の壁ぶちぬいて踏ん込みくれむか、下より床板跳ね上げて現はれくれむか、そもくゝここが、勝負の門口と思ふ折しも、どツと襖の中より女どもが笑ふ聲、喜助たまらず地鞆鞆ふんで、えッもう破れかぶれちや、傘の骨になるとも、

其二十八

いつまでも太鼓家業が何の手柄ぞ、もう四十二の今が切上げ時、それも明日から袖乞非人に落つる身ならば兎も角、幸ひ今日この張合に一期の腕を鳴らして、十三年住馴れし廓にも天晴末社の手本を残し置き、我身は世間の人並に立歸らむと、横飛の喜助こゝを一生懸命の場と

入り来りし眼前、襖二枚に鸚鵡返し（かみじがへ）の男禁制（おとこごんせい）を立てられ、あつと思ふ中（おもふなか）には女ども（おんな）が聲あけて笑ふ聲（こゑ）、や、何が左ほど（ひだりほど）に呵（あ）しいやら、根も葉もない（ねもはもない）を白痴（ばか）の高笑（たかわら）ひとは宜（よ）う言（い）うた、その笑ひ聲（こゑ）も腹（はら）から出ることか、やうく一枚（まい）の小判（こはん）を三四十（さんじゅうし）に割（わ）った金粉（きんぷん）の缺端（けつたん）で切賣（きりうり）の笑ひ聲（こゑ）、あんまり願（ねが）の紐（ひも）を解（と）過ぎると笑ひ代（わらひだい）が散（ち）つて仕舞（し）ふぞ、それは先（ま）づ儲（たくわ）置いて、男禁制（おとこごんせい）の此（この）うち（うち）に男一疋（おとこひと）ある筈（はず）ぢや、其男（そのおとこ）に聊（い）か用（よう）があつて二階（にかい）からの使者（ししや）、横飛（よことび）の喜助（きすけ）といふものが罷（ま）り向（むか）うた、喚（わめ）きながら襖（ふすま）の隙間（すきま）より片目（かため）そつと差覗（さしのぞ）けば、朝鮮人（てうせんじん）參（ま）が日本酒（にっぽんざけ）に酔（よ）食（く）うて床柱（とこはしら）に脊（せ）を持たせながら、此方（こなた）を睨（にら）んで今（いま）ぞ頻（し）りに返答（へんたふ）思案（しあん）の體（てい）なり、「さア返答（へんたふ）きかう、聾（ぶん）か啞（おし）か但（た）しまた膽魂（だんたま）と共に舌（した）まで縮（ちぢ）みあがつたか、こりや女（おんな）ども、よう聞（き）けよ、これが臍茶（へそぢや）の本笑（ほんわら）ひといふものぢや、わつ、わつは、、、、「家業（かげふだいじ）大事（だいじ）と思（おも）へばこそ叩（たた）かれて世（よ）を渡（わた）る太鼓（たいこ）の身（み）なれ、今（いま）こゝに萬事（ばんじ）さらりと捨鉢（すてはち）の喜助（きすけ）、これが四十二年（よんじゅうにねん）の笑ひ終（わらひすま）めぢやと、五體（たい）ひつ

くりかへして笑ひぬ、折（を）しも隔（へ）ての襖（ふすま）するりと開（あ）きぬ、一（い）や、喜助（きすけ）か、男禁制（おとこごんせい）の中（なか）なれど、おのれは男（おとこ）であるまい、その證據（しやうこ）に先（ま）づ這入（は）れ、時に今（いま）きけば二階（にかい）からの使者（ししや）に來（き）たとやら、使者（ししや）にせい五車（ごしゃ）にせい、ろくでもない事（こと）うか／＼ほざいて後悔（こうかい）するな、まづ斯（か）うぢや、ある習慣（なまひ）、この里（さと）の客（きやく）と客（きやく）とが意氣地（いきぢ）といひ物の張合（はりあひ）といふは、五分（ごぶん）と五分（ごぶん）との相手（あひて）同士（どうし）で始（は）めて面白（おもしろ）い花（はな）も咲（さ）かうが、二分（にぶん）と八分（はつぶん）の掛合（かけあひ）、大佛（だいつつ）の釣鐘（つりがね）を破（やぶ）れ提灯（ちやうちん）で叩（たた）くやうでは、逆（さか）も呵（あ）しうない、むかしの軍書（ぐんしよ）めいて名乗（なを）る及（およ）ばぬが、こりや喜助（きすけ）、元來（もとより）この自己（おれ）様（さま）を誰（たれ）と思（おも）うて來（き）たのぢや、泉州（せんしゅう）堺（さかい）での金銀柄（ぎんづか）を握（にぎ）る男（おとこ）、およそ西三十三（さいさんじゅうさん）箇國（かこく）は大隅薩摩（おほすみさつま）の果（は）まで一手（ひとて）の我等（われら）に向（むか）うて、やうく二日（ふつか）、きのふ今日（けふ）この里（さと）が珍（めづ）らしい分際（ぶんざい）で、しかも何處（どこ）の蛙（かへる）の化物（はけもの）やら家（いへ）も名（な）も正體（しやうたい）わからぬ初心（しんしん）者（もの）が、は、、、片腹（かたはら）いたい、しかし張合（はりあ）ふなら張合（はりあ）うて見（み）い、随分（ずいぶん）と手加減（てかへん）はしてやるも

の、何をいふにも三年以來、我家同然に通ひづめの大盡ぢやぞ」いひつゝ、前なる大盃とツて天井を見上げながらの息に飲み乾し、またもや床柱に身を持たせて左右より女どもに扇子の風を送らせ、とかく浮世は斯うしたものと小唄の一節、喜助しみく其顔みつめて何にも言はず、唯ほろ／＼と涙こぼしぬ、「や、喜助め泣きをツたわ、さて外貌と口にはよらぬ腹の脆い奴」「いやこの涙は喜助が脆い後悔降参の涙で御坐らぬ、實は敵ながら餘りの氣の毒さに貴方を弔ひの涙ぢや」

「何と吐した、も一度き、たい、この自己を弔ひの涙とは」「やれ／＼痛ましや、しらぬが佛とはいひながら、相手も相手によりけりぢや、今こゝで御自慢なされた貴方の身代、どれほどの大身代かは存せぬが、逆もの事、この喧嘩およしなされませ、さアといへば小指の先で弾き飛ばさる、ほどの怖ろしい人を敵にうけて、何の張合が出来ませう笑止の至極、元來

この喜助は其やうな深い張合とは思はず、たい今日眼前の張合を今日中の勝負に仕て退けむための汗水、それを貴方が乗り掛つて身代の講釋から、申さば互に家の潰し合ひの末まで遣らうとは、いやもう、呆れの蟲が腹の中で宙返り致して言語道斷の始末、こゝは何事も仰せられず、此ま、お遁けなさるが一の術、うかく／＼すると堺の家庫が粉になつて淡路島まで飛びまするぞ、御用心々々々」いひつゝ、起たむとすれば、朝鮮人參くわツと怒ツて、「やいまた喜助、まづ汝に褒美の一品くれるわ」

其二十九

横飛の喜助、眞向額を煙管の雁首に打割られて、流る、血汐を懐紙に押へながら、しづかに梯子段を上り来て、一座の末社が驚くに目もくれず、其ま、水車の大盡が前に坐しぬ、「や、喜助その疵は」「はッ、身から一本の拙者が瘦腕でも今日は美事の勝鬨あけまする筈、ま

してや御威勢を笠にいたいて萬事の委細かまはずお言葉を後盾として諸事くわつと持つて開き、いふだけのこと、天晴言うて退けた猛勢に、なるほどこれは謝まつたと、野暮でも犬でも三年以來の廓男がらりと捌けて出るかと思ひの外、此奴どこまでも馬の耳に蛙の面、こりや喜助おのれに褒美の一品くれるぞと吐すが否、銀の伸煙管で拙者の生面まッこの通り」「む、割られて其ま、何にも言はず、すごく其場を起つたか」お言葉に御坐りますれど、一寸の蟲にも一分の魂魄とやら、この粗末な目鼻の置場でも面は面、その面の急所かくまで打たれて何とすごく歸られませうや、第一が太鼓の喜助で彼奴に買はれた今日の身でなし、申さば恐れながら、貴方様の名代にまかり向うた男の看板へ、これほどの極印うつた奴、その場で脛腰ふんぬき咽喉笛しめあけてやらうかとは思ひましたれど、いやまて、我面で我面ならぬ今日の眞向、ともかくも打たれた極印このま、御覽に入れた上、いかやうの思召やら

其邊とくと伺ひ、倅改めて二度目の掛合には鬼の鐵棒、結句こりや面白く土産物お目にかけるも同然と心得まして、もしまたこの疵がお役に立つならば、此上を鐵火箸で抉つても痛いとは申さぬ筈の喜助め」「む、よし、どうやら下司の喧嘩めいたれど、假にも我等が息のか、つた者に疵つけた奴、無事では置けぬ、それ喜助そのま、來い、もはや大將同士の一騎討ちやかくとは兼ねて覺悟の下座敷に、例の朝鮮人参いよく高く笑うて、「どうちや女ども、あの横飛の喜助め、じたい太鼓で居ながら高慢の鼻うごめかす奴、いつぞや山口屋の一座で身のほど知らぬ大口ぬかしたとき、幅のない客なら其のま、で濟みませうが、この人参さうはまるらぬ、忽ち盃なけつけて外の末社の見せしめに仕て置いたを、龍車にむかふ蟻螂の斧、蔭ながら意恨を含んでわれを覘ふとの風聞は全くのこと、元來どれほどの大盡に飛附いたかは知らねど、かさに掛つて先刻の勢ひ、それも我等が買つた太鼓でなしと、始めは心に

許しておいたもの、西三十三箇國を一手に握る自己が身代を何と心得たか、うかくする
 と淡路島まで粉になつて散ると吐した一言が彼奴の最後、ぐわんと煙管で喰はした時の面が
 呵しかつた、さらぬだに不出來の目鼻も口も一つに寄せて何とも吐さず、じつと堪へて苦笑
 ひと半泣と無念を搦交せた顔色、いやはや鳥羽僧正の名畫にもあるまい、しかし彼奴どこま
 で素根性の太い奴やら、下さる、褒美の一品とは此事で御坐りまするか、へんこの疵を手柄
 に立歸つて小判幾枚に賣る太鼓と太鼓の音色が違ふぞよ、人參おぼえて居れとの捨悪口、さ
 ては今にも二度の掛合に來せるであらうが、同じ事なら枝葉の喜助より、その大盡といふ奴
 に一文句ならべて見たい、は、は、は、いや妙な工合で罪な事が面白うなつて來たわい、
 それ女ども酒ぢや、酒々、瀧は鳴る、瀧は鳴る水のし

其三十

一人は日本一の長者、この大阪の舞臺骨と唄はる、淀屋の主人辰五郎、しかも生れついでの
 活氣に乗掛つては山も河も踏抜くばかりの勢ひ當年とつて二十九、一人は泉州堺での金銀柄
 を握つて西は三十三箇國を一手の藥種問屋、年々長崎へ入り來る和蘭陀船へも船脚しづむほ
 どの大金抛け込んで音に聞えたる大腹中ことし四十一。

人間うまれて冥加の絶頂、あるにまかせて雙方ともに世の中を我ま、の振舞ひ仕盡し、地獄
 の沙汰も金次第で通る世上に物の憚りもなく事の會釋もなき水車大盡と朝鮮人參が、たま
 く同じ揚屋の上下に陣を構へて、女たるもの禁制の一札、男たるもの禁制の一札、互に角
 め立つて、一寸も退かぬ氣と氣の張合に、果は大將みづから馳せ向うて一騎討の勝負とぞな
 りぬ、

大盡と大盡が同じ一人の戀を争うて、互に家庫揉み潰すまでの珍事は、得て廓にある習慣な

れど、これはまた格別おもひもよらぬ意氣地の張合、どうなる事ぞと狼狽へ騒ぐ其中に、ひとり内證で笑を含むは揚屋の主人、何卒々々火の手が盛に燃え上ツて、この家このまゝ、黒煙になるほど、冥加に叶ひたしとぞ祈りぬ、

朝鮮人參には例の狝々の勤女が附添うて、白髪まじりの薄鬢かきあけながら、「きのふ今日やうくこの里へ泳ぎ出した岡生育の分際で、あの横飛の喜助を舟とも楫とも頼むほどの初心な敵手で御坐んすもの、逆もの事、貴方様に本氣の膝つきつけられて何の句も語も出ませうぞ、元を申せば喜助が當座の抓み喰となつて今更退くに退かれぬ苦しませの狂亂半分、全く腹から据つた意氣地でもなく張合でもなければ、絲目の切れた奴風、ふわ／＼と風につれて何處へやら散つてゆくは知れた事で御坐んす、ところで喜助も叶はず其尾について逃出すは必定、そこを妾が出て先刻の幕つゞき、敵手の客は逃けても彼奴だけは逃さぬ工夫、どうぞ

二度と再び浮べぬほどの深い底まで突き落してやりたいもの」

水車の大盡には固より横飛の喜助が附添うて、眞向額の疵に膏藥一枚の詮議もせず、わざと疼痛を忍んで其まゝの面體に流れし頼の血汐も拭はず、宛がら張子達摩の俄雨に逢うたるが如し、拙者奴も太鼓家業を致してより丸十三年、お客の数は幾千人、なれども凡そ今日これほどの花も實もある面白い目に逢ひまするは始めての事、白痴奴が御人體を知らねばこそついては太鼓冥利、お袖の端に縋つて晴れがましう敵に渡り合ひ、この里に横飛の喜助として少しは男らしい末社もあつたぞと、後の太鼓どもに一事の語り草を傳へ、また聊か物の手本を残してやりたう心得まする、はて御縁でがな、やう／＼二日の御目かけられました拙者がかうも俄に深い御言葉にあづかり、身に取つては關が原ともいふべき晴勝負、いや四十二の只今、なるほど此事が男心地と申す味ひやら、からりと胸が透きました」

朝鮮人參はお勘、水車の大盡は喜助、その餘は互に今日の暇をくれて追ひ歸しつゝ、二階座敷より下座敷より、歩み合つて中間の一室を今日の戰場とぞ定めぬ、

其三十一

二階座敷より水車の大盡に喜助の御供、下座敷より朝鮮人參にお勘の介添、互に歩み合つて中間の一室に差向ひぬ、

「これは水車殿とやら荷車殿とやら、始めて逢ひまする、お見受け申せば御風俗の寛濶さといひ、とんと歌舞伎めいての御立派さ、なるほど、底光りのせぬ上目からは天清寸隙なしの本大盡、なれど我等また、三年以來この里に通ひつめて聊か廓の仔細も存するものが、憚りながら、きのふ今日まだ諸分の淺い貴方衆に向うて大人氣もない、何の意氣地も張合も御坐らうぞ、時と場合に依つては盃の二三遍お近交にもなつて、ちと御指南も申し上げたいほどに

ふものが、はて何うした瓢箪の川流れから浮出したやら、七十三人といふ男を二階に踊らせ下座敷の我等が盃盤へ天井板の塵埃を拂込まるとは、あまり聞えぬ仕方と存する、かつまた其處に控へた喜助といふ奴、十三年も此の里の水垢を喰うて育ちながら、客と客との争ひを輕う治めて無事に捌かうとは致さず、薪に油を注いで燃しかくるが憎さに煙管の一折檻くれましたが、何とか其事についても御言葉が御坐らば承りまするぢや、は、は、は、は、は、は、は、

「これは朝鮮人參とやら和蘭陀牛蒡とやら、いはる、通り、なるほど我等この里は今日で二日目の初心なれど、かりきつた二階座敷で買切つた末社どもを踊らせた分のこと、下に御坐つた貴方の盃へ天井の塵埃を拂ひ落さうとての業でも御坐らねば、お使ひ柄に依つては隨分と會釋も遠慮も致さう筈のところへ、そこに居る猿とか狒とか申す婆が、頭から大口あいての雑言より斯くの始末ぢや、なれど、その争ひは先づ互の水掛論として、その猿婆を無

事に返した我等の使者この喜助が面上、何として割られた、我等若年ながら、今日まで息のか、ツた奴を人の指頭にも上せた事のない男で御坐れば、これこの疵の療治鹽梅ちと面倒で御坐る」「は、は、面倒、どれほどの御面倒かは存せねど、高が小判の端で自由な太鼓の額」「いや太鼓でない、水車か名代ぢや」「こりや面白い、おぬしの名代とあるからは、この人參が生面へも返報せうといはる、か」「御所望なら何時でも、したが其事にも及ぶまい、その辨々とやらいふ婆の皺面」「どっこい、さうは成り申さぬ、その喜助奴たゞの雑言ならば無事に歸した法もあれ、この人參が身代の店卸しを始めて、うか／＼すると家庫が淡路島まで粉になると吐した一言の褒美に呉れた極印」「は、は、は、それは喜助が全くの正直、うか／＼なると淡路島はおろか、名も知れぬ唐の横町まで飛びまするぞ、用心さッしやい」「や、おのれ」「もしお疑ひ御坐らば、身代の相撲とツて見せうか」「ほざいたり二歳奴、

この自己様は西三十三箇國」「いやその三十三箇國は聞き飽いた、まだしも日本六十餘州といはぬが殊勝ぢや、よしや六十餘州にしてからが何の事ぞ、高が草根木皮、三千世界に探しても數の知れた事ぢや」「おけ／＼こりや二歳、まづ悪口よりも差當ツて名乗り交さうが、この人參は泉州堺での金銀柄を握る藥種問屋といへば、誰しらぬものもない男、それに引代へ、じたい、おぬしは何の某ぢや、歌舞伎役者の化物か貧乏公卿の落胤か、名乗ツて人に知らる、ほどの名があらば、それ聞いた上の相撲も取らうわ、あまり段違ひでは興が覺めて呵しうない」「南無三寶、その段になツては我等いさ、か迷惑、實は現在この喜助にさへ言はぬほどの瘦身代、されど問はれて名乗らぬも異なるもの、これは此大阪の町人に淀屋辰五郎と申す男で御坐る」「やッ」

朝鮮人參よりも先づ目玉と共に膽魂を引ツくりかへしたは辨々のお勘、喜助は此時しづかに

額口の疵を押へて、あ、痛いぞ痛いぞ、

其三十二

敵も敵によりけり、淀屋辰五郎と聞いて流石の朝鮮人參ぎよつとせしが、こいつ元來した、かの大踏張に生れついて、むらくと怒れば忽ち右も左もない闇雲飛乗の猪武者、おもしろい日本一の長者とは近來おもしろい敵手ぢや、我も泉州堺で金が呻るといはる、ほどの身代、端た小判の捨場がなうて三年以來この里へ抛けつゞけの男が、淀屋の名を聞いた分で此ま、一寸も退かるべきや、いかに淀屋とて長者とて、あればあるだけ祖先傳來の家法きびしく、遣ふべき金と遣はれぬ金との差別なうては叶はぬ筈、されば彼奴が身代を丸潰しの屋敷跡にべんく草の生えるまでは逆も掛つて來をるまじ、それに引代へ我こそは親兄弟もなく、妻子親類あつたところで何の其、いざ乗出した曉は浪も風も物かは、釜の下の灰まで打込むといは

い必ず打込むべき覺悟の男、つまりは根本の身代で相撲とるではなく、この廓だけでの勝負なほさら易い事、いつでもまるるぞ、たとひ負けても劣つても、敵に取つて恥かしからぬ奴、世上に聞えても白痴が花咲き實りし名聞の一事、廓で潰れながら戀の外とは面白し、ましてこの朝鮮人參が編笠紙衣を通りこして丸裸の末になるまで突ツ掛れば、あの淀屋辰五郎も寒中に布子一枚までは組んで落すべき筈ぢやと、其ま、泉州堺へ馳せ歸つて、勿體なや十七戸前の庫々まづ一年に三戸前づつ揉潰すの覺悟、さらに虚偽なしと自己が氏神に誓を立てしは、狂氣にしても天晴の男なりける、
朝鮮人參が堺へ馳歸るや否や、水車の大盡は横飛の喜助に約束の太鼓家業さらりと止めさせ以來は我一人の腰巾著、なれども常分この里に住んで廓へ通ふ毎の給仕せよと、其ま、扇屋の玄關より駕を飛ばして北濱の松屋敷に立歸りぬ、

そのころ淀屋の松屋敷とて、流る、大川の水を蜘蛛手に堰入れつゝ、四國九州より取寄せたる岩を組み石を疊みし島々に、諸國の名所松を移し植ゑたる翠色の蔭ふかく、四方にめぐらす壁一重に火宅の宿を忘れて、こゝぞ仙境とも思はるゝは主人の辰五郎が朝夕の住宅なりける。

そのころの定目法度によりて家を出づる時の身は町人でこそあれ、人しれぬ内證は驚くばかりの華奢全盛を極めて、人間世界およそ小判でなるほどの事は國司大名の上をも飛越えつゝ、夜は銀燭の光り輝いて更に油火を用ひず、寝ぬるに綺羅錦繡の夜具を吊りかけて宿直を設け、和歌俳諧の座、楊弓の席、鞠のか、り坪、能狂言の舞臺、茶屋水屋、夏は清涼の臺、秋は月見の宴、火桶の冬座敷に至るまで、いづれも當時の名工を集めて其道の宗匠が意を凝せしもの、主人が日々の持料に京の扇子折を二人づつ養ひ、珍客に二度の疊を踏ませしとて備後の

疊刺五人の常備ひとは、この大阪に傳へたる風聞に違はず、白羽二重の下帯かけ捨にして、海山の珍味も十日目ならでは同じ品を口にせず、大の男が拜み搗きの米を銀釜に炊ぎ、飲水は宇治の平等院より二重箱の瓶に汲んで淀川を下らせ、器具玩弄は六十餘州の名物に飽足りいで、多くは朝鮮唐土の品々見るもの舌を捲き聞くもの耳を敬て、驚きぬ、

この北濱の松屋敷を主人の住宅として、天下の諸侯に用金取引の表店は堂島の岸に沿うて一町四面の家庫いかめしく、その外の持家下屋敷は家業の外遊山場所とて京に八箇所、伏見に三箇所、八幡に二箇所、大阪に六箇所、堺に四箇所、奈良に一箇所、諸國の物産賣買のために設けたる西の出店は肥前の長崎、筑前の博多、下の關、伊豫の松山、安藝の廣島、備前の岡山、北には越前の敦賀、加賀の金澤、東には伊勢の津、尾張の名古屋、美濃の大垣、駿河の府中、江戸には合して十箇所、いづれも金銀財寶を靴となしての勢ひ凄まじく、千石

以上の持船は常に帆を孕んで海上に浮ぶもの二八の空にも十艘を下らず、諸國の港にゐる丸に三角の帆印は津々浦々いたるところの闇をも照せしといふ、

元祿名物男 中編

其一

金殿玉樓のうちに生れしものは粧飾人形に等しく富貴珠玉の間に育ちしものは張子の虎、みかけの勢ひ強けれど風のまに〜首骨なしとは、なるほど世を欺かぬ諺ながら、こゝに日本一の長者として淀屋五代の主人となりし辰五郎は、その容貌にも似ぬ天性の英氣ほとばしつて萬事に寛濶を喜び、動ともすれば町人に不用の膽魂おそろしく、しかも無口の太腹なほさら物に會釋なければ、扇子で膝を叩くや否や海には千石船の三四艘また陸には家庫の四棟五棟さつと吹飛ばして笑ひかねまじき顔色、どう見ても此ま、無事太平の人でなし、あぶない〜と家來眷屬うち寄つての相談に、能狂言、茶の湯、香、花、和歌俳諧、鞠、楊弓、およそ

優にやさしき雲上めいたる諸藝のみ其道の名人を選んで責むるが如く教ふれども、可憐ら一
を聞いて十を悟るの才智ありながら更に見返りもせず、たゞ幼少より日夜に軍書の類を繕い
て目色を變へ、や、長じては來るほどのもの誰彼なしに引ッ捕へて相撲を取るの勢ひ、なかな
か十七八の美少年とも思へぬ外貌の外力量ありて、中には三十前後の腕に覺えの大男が、
氣の毒ながら御身のため以後の懲戒にと、本氣の沙汰に力足踏んで飛んで掛れば、忽ち道具
外れの目鼻を搔撈られ向脛に喰附かれて驚き遁ぐるもの多し、
さればとて七歳に父を失ひ十四歳に母を喪ひ、兄弟もなき獨身に蟲氣一度も煩うたことなき
頭上より、くわツと一息に取ッて押へて戒むるものはなく、いづれも下より見上げて家に譜
代の白髪頭たま〜意見がましき事をいへば、笑ひながら逆捻に急所を突かれて二の句も出
でず、さらばとてまた手を代へ品を代へつ、容色より美女を手許に選んで、もはや年ごろ

和らぐ道は外になし、これに心のうつるかと思ひの外、何としてやら更に目も呉れざるのみ
か、一夜の戲事その女の睡れる頬先べたく〜と白刃に叩けば、きやツと驚き生命には代へら
れじと遁け出せし始末に、いづれも呆れて、こりや叶はぬと二十五の曉を待兼ね、御家法で御
坐れば今日より奥様の御詮議といふを、仔細あッて三十五まで妻は持たぬぞ、さるを汝等が
押附業に迎へた女あらば、四の五の言はぬ、た、ツ斬るぞと嚇されて青くなりしが、はて不
思議、二十九の今日このごろ、どうした風の吹きまはしやら、人しれず新町の廓へ通はる、
との事に、いづれも手を拍ッて聲を潜めつ、我等よりお勧め申す里にはあらねども、あの通
りの持つて生れた御氣性を和らけなば、大夫の一人や二人は受出さる、ともま、の事、またこ
れほどの大身代に一年や二年の捨金なんの苦しかるべき、暫らくは此ま、知らぬ顔、しらぬ
顔と示し合して様子を伺へば、南無三寶、通はれたは思ふ戀にあらで相手ほしさの喧嘩の種、

しかも二日目に扇屋で引ツか、ツた敵は泉州堺の薬種問屋、身代の勝負では更に怖る、敵ならねど、あの小西とは音に聞えし闇雲の半狂亂と、さすがは大家、かねてより主人につけたる穩密の者が色を變へての注進に、すはこそ大事ぢや、

其二

町人でこそあれ由緒は歴々の武家にも劣らず、まして金が物いふ世の中に日本一の長者と唄はれ、天下の諸侯を相手の家業とは名聞の絶頂、諸國諸州の物産を一手に買占め賣上げて、いはゞ六十餘州の金元に等しい家に生れながら、それをさほどの冥加とも思はず、また大事とも心得ぬ目色の怖ろしさ、腹の中どれほどか底の知れぬか上に、うまれつゝの活氣なほさら危しと、平生より眉を蹙めて心を悩ます折から、人しれぬ新町通ひは時に取ツての僥倖この分で氣性の和らぐ事やあるかと思ふ折しも、その廊通ひ戀にはあらで喧嘩の種さがし、

しかも堺の半狂亂が生命がけの敵手と聞いて、一家の者共あつと驚きぬ、

すは大事ぢや、き、及ぶ堺の薬種問屋を敵手に取ツては、此方の氣性いかなる珍事にならうも知れずと、堂島の本店より六人の白髪頭うち揃うて松屋敷を伺へば、主人の辰五郎をりしも奥の一室に書見の體、それと見るより例の氣輕に呼入れて、さても業々しい何事ぞといふ顔いづれも見上げて聞き及ぶ段々より諫めか、れば、からくと高く笑うて此方へ膝を振り向けぬ、

「いや、汝等のいふところ、いちく道理、また懸念の段々は家のために殊勝なれど、よう思つても見い、あの薬種問屋、廊では朝鮮人參とやらいふ奴、どれほどの身代かは知らず、よもや死物狂ひに家庫た、き潰しても爪の垢ぢや、また大阪の淀屋が堺の小西と身代の相撲を取るといへば、勝負は誰も組まぬ前から知れたこと、は、は、は、されば此ま、負けて